

新古今和歌集

目次

新古今集	假名序	2
新古今集	卷第一 春歌	4
新古今集	卷第二 春歌	11
新古今集	卷第三 夏歌	17
新古今集	卷第四 秋歌	25
新古今集	卷第五 秋歌	36
新古今集	卷第六 冬歌	44
新古今集	卷第七 賀歌	55
新古今集	卷第八 哀傷歌	59
新古今集	卷第九 離別歌	67
新古今集	卷第十 羈旅歌	70
新古今集	卷第十一 戀歌	77
新古今集	卷第十二 戀歌	84
新古今集	卷第十三 戀歌	89
新古今集	卷第十四 戀歌	95
新古今集	卷第十五 戀歌	102
新古今集	卷第十六 雜歌	109
新古今集	卷第十七 雜歌	120
新古今集	卷第十八 雜歌	128
新古今集	卷第十九 神祇歌	140
新古今集	卷第二十 釋教歌	145

新古今集 假名序

(1) 和歌の歴史

やまと歌は、昔、天地開け始めて、人のしわざいまだ定まらざりし時、葦原の中つ國の言の葉として、稲田姫、素鷲の里よりぞ伝はれりける。

しかありしよりこのかた、その道盛りに興り、その流れ今に絶ゆることなくして、色にふけり心をのぶるなただちとし、世を治め民をやはらぐる道とせり。かかりければ、代々の帝もこれを捨てたまはず、えらび置かれたる集ども、家々のもてあそび物として、言葉の花、残れる木の下かたく、思ひの露、漏れたる草隠れもあるべからず。しかはあれども、伊勢の海清き渚の玉は、拾ふとも尽くることなく、泉の朶しげき宮木は、引くとも絶ゆべからず。物皆かくのごとし。歌の道、また同じかるべし。

(2) 新古今集編集の企畫

これによりて、右衛門督源朝臣通具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中将藤原朝臣定家、前上総介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經らに仰せて、昔今、時を分たず、高き賤しき、人をきはらず、目に見えぬ神佛の言の葉も、うば玉の夢に伝へたることまで、廣く求め、あまねく集めしむ。おのおのえらび奉れるところ、夏引きの糸の一筋ならず、夕べの雲の思ひ定めがたきゆゑに、緑の洞花かうばしき朝、玉のみぎり、風涼しき夕べ、難波津の流れを汲みて、澄み濁れるを定め、淺香山の跡を尋ねて、深き淺きを分てり。萬葉集に入れる歌はこれを除かず、古今よりこのかた、七代の集に入れる歌をばこれを載することなし。ただし、言葉の園に遊び、筆の海を汲みても、空飛ぶ鳥の網を漏れ、水に住む魚の釣をのがれるたぐいは、昔もなきにあらざれば、今もまた知らざるところなり。すべて、集めたる歌、二十卷、名づけて新古今和歌集といふ。

(3) 和歌の本質

春霞立田の山に初花をしのぶより、夏は妻戀ひする神南備のほととぎす、秋は風に散る葛城の紅葉、冬は白妙の富士の高嶺に雪積る年の暮まで、皆折に触れたるなさけなるべし。しかのみならず、高き屋に遠きを望みて民の時を知り、末の露本の雲によそへて人の世を悟り、たまほこの道のべに別れを慕ひ、天さかる鄙の長路に都を思ひ、高間の山の雲居のよそなる人を戀ひ、長柄の橋の波に朽ちぬる名を惜しみても、心内に動き、言葉外にあらはれずといふことなし。いはんや、住吉の神は片そぎの言の葉を残し、傳教大師はわが立つ朶の思ひをのべたまへり。かくのごとき知らぬ昔の人の心をもあらはし、行きて見ぬ境の外のことをも知るは、ただこの道ならし。

(4) 新古今集編集の目的と特色

そもそも、昔は、五度譲りし跡を尋ねて天つ日嗣の位に備り、今は、やすみする名をのがれて、はこやの山にすみかを占めたりといへども、すべらぎは子たる道を守り、星の位は政をたすけし契りを忘れずして、天の下しげきことわざ、雲の上のいにしへにも變らざりければ、萬の民、春日野の草のなびかぬかたなく、四方の海、秋津島の月靜かに澄みて、和歌の浦の跡を尋ね、敷島の道をもてあそびつつ、この集をえらびて長き世に伝へんとなり。かの萬葉集は歌の源なり。時移り事隔たりて、今の人知ることかたし。延喜の聖の御代には、四人に勅して古今集をえらばしめ、天曆の賢き帝は、五人に仰せて後撰集を集めしめたまへり。そののち、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載などの集は、皆一人これをつけたまはれるゆゑに、聞き漏らし、見及ばざるところもあるべし。よりて、古今、後撰の跡を改めず、五人のともがらを定めて、しるし奉らしむるなり。その上、みづから定め、手づからみかけることは、遠くもろこしの文の道を尋ねれば、濱千鳥跡ありといへども、わが國、やまと言の葉始まりてのち、呉竹の世々にかかるためしななかりける。このうち、みづからの歌を載せたること、古きたぐひはあれど、十首には過ぎざるべし。しかるを、今、かれこれえらべるところ、三十首に余れり。これ、皆、人の目立つべき色もなく、心とむべきふしもありがたきゆゑに、かへりて、いつれと分きがたければ、森の朽葉數積り、汀の藻屑かき捨てずな

りぬることは、道にふける思ひ深くして、のちのあざけりを顧みざるなるべし。

(5) 編集の完成と歌道振興の自負

時に元久二年三月二十六日なんしるしをはりぬる。目をいやしみ、耳をたふとぶるあまり、石上古き跡を恥づといへども、流れを汲みて源を尋ぬるゆゑに、富の緒川の絶えせぬ道を興しつれば、露霜は改まるとも、松吹く風の散り失せず、春秋はめぐるとも、空行く月の曇りなくして、この時に逢へらんものはこれを喜び、この道を仰がんものは今をしのばざらめかむ。

新古今集 卷第一 春歌 上

岩間とぢし氷も今朝は解け初めて苔の下水道もとむらむ

(八) 題知れず 讀人しらず

風まぜに雪は降りつゝしかすがに霞たなびき春は來にけり

(九) 題知れず 讀人しらず

時は今春になりぬとみ雪降る遠き山べに霞たなびく

(一〇) 堀河院の御時百首歌奉りけるに残りの雪の心をよみ侍りける 權中納言

國信

春日野の下萌えわたる草の上につれなく見ゆる春の淡雪

(一一) 題知れず 山邊赤人

明日からは若菜摘まむとしめし野に昨日も今日も雪は降りつゝ

(一二) 天曆御時屏風の歌 壬生忠見

春日野の草は緑になりにけり若菜摘まむとたれかしめむ

(一三) 崇徳院に百首歌奉りける時春の歌 前參議教長

若菜摘む袖とぞ見ゆる春日野の飛火の野への雪のむら消え

(一四) 延喜御時の屏風に 紀貫之

(一) 春立つ心をよみ侍りける 撰政太政大臣

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春は來にけり

(二) 春のはじめの歌 太上天皇

ほのほのと春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく

(三) 百首歌奉りし時春の歌 式子内親王

山深み春とも知らぬ松の戸にたえだえかゝる雪の玉水

(四) 五十首歌奉りし時 宮内卿

かき暮しなほふるさとの雪のうちに跡こそ見えね春は來にけり

(五) 入道前關白太政大臣右大臣に侍るける時百首歌よませ侍りけるに立春の

心を 皇太后宮大夫俊成

今日といへばもろこしまでもゆく春を都にのみと思ひけるかな

(六) 題知れず 俊恵法師

春といへばかすみにけりな昨日まで波間に見えし淡路島山

(七) 題知れず 西行法師

ゆきて見ぬ人もしのべと春の野のかたみに摘める若菜なりけり

(二二) 題知らず 凡河内躬恆

(一五) 述懐百首歌よみ侍りけるに若菜 皇太后宮大夫俊成

いづれをか花とは分かむ故郷の春日の原にまだ消えぬ雪

澤に生ふる若菜ならねどいたづらに年を積むにも袖は濡れけり

(二三) 家の百首歌合に餘寒の心を 摂政太政大臣

(一六) 日吉社よみて奉りける子日の歌 皇太后宮大夫俊成

空はなほかすみもやらず風冴えて雪げに曇る春の夜の月

さざなみや志賀の濱松古りにけりたが世に引ける子の日なるらむ

(二四) 和歌所にて春山月といふ心をよめる 越前

(一七) 百首歌奉りし時 藤原家隆朝臣

山深みなほ影寒し春の月空かき曇り雪は降りつゝ

谷川のうち出づる波も聲立てつうぐひすさそへ春の山風

(二五) 詩を作らせて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを 左衛門督通光

(一八) 和歌所にて關路鶯といふことを 太上天皇

三島江や霜もまだ干ぬ蘆の葉につのぐむほどの春風ぞ吹く

うぐひすの鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂のせき

(二六) 詩を作らせて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを 藤原秀能

(一九) 堀河院に百首歌奉りける時残雪の心をよみ侍りける 藤原仲實朝臣

夕月夜汐満ち來らし難波江の蘆の若葉を越ゆる白波

春來ては花とも見よと片岡の松の上葉に淡雪ぞ降る

(二七) 春の歌とて 西行法師

(二〇) 題知らず 中納言家持

降り積みし高嶺のみ雪解けにけり清滝川の水の白波

まきもくの檜原のいまだ曇らねば小松が原に淡雪ぞ降る

(二八) 春の歌とて 源重之

(二二) 題知らず 讀人しらず

梅が枝にもものうきほどに散る雪を花ともいはじ春の名立てに

今さらに雪降らめやもかげろふの燃ゆる春日となりにしものを

(二九) 春の歌とて 山邊赤人

あづさゆみ春山近く家居してたえず聞きつる鶯の聲

(三〇) 春の歌とて 讀人しらす

梅が枝に鳴きてつづるふ鶯のはね白妙に淡雪ぞ降る

(三一) 百首歌奉りし時 惟明親王

うぐひすの涙のつらうち解けて古巢ながらや春を知るらむ

(三二) 題知らず 志貴皇子

岩そそぐたるひの上のさ蕨の萌え出づる春になりけるかな

(三三) 百首歌奉りし時 前大僧正慈圓

天の原富士の煙の春の色の霞になびくあけぼの空

(三四) 崇徳院に百首歌奉りける時 藤原清輔朝臣

朝霞深く見ゆるや煙立つ室の八島のわたりなるらむ

(三五) 晚霞といふことをよめる 後徳大寺左大臣

なごの海の霞の間よりながむれば入目をあらふ沖つ白波

(三六) をのことも詩を作りて歌に合せ侍りしに水郷春望といふことを 太上天皇

見たたせば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ

(三七) 撰政太政大臣家百首歌合に春曙といふ心をよみ侍りける 藤原家隆朝臣

霞立つ末の松山ほのぼのと波にはなるゝ横雲の空

(三八) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに 藤原定家朝臣

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るゝ横雲の空

(三九) きさらぎまで梅の花咲き侍らざりける年よみ侍りける 中務

知るらめや霞の空をながめつゝ花もにほはぬ春を嘆くと

(四〇) 守覺法親王五十首歌に 藤原定家朝臣

大空は梅のにほひにかすみつゝ曇りも果てぬ春の夜の月

(四一) 題知らず 宇治前關白太政大臣

折られけり紅にほふ梅の花今朝白妙に雪は降れれど

(四二) 垣根の梅をよみ侍りける 藤原敦家朝臣

あるじをばたれとも分かず春はただ垣根の梅を尋ねてぞ見る

(四三) 梅花遠薫といへる心をよみ侍りける 源俊頼朝臣

心あらば問はましものを梅が香はたが里よりかにほひ来つらむ

(四四) 百首歌奉りし時 藤原定家朝臣

梅の花にほひをつつす袖の上に軒漏る月の影ぞあらそふ

(四五)百首歌奉りし時 藤原家隆朝臣

梅が香に昔を問へば春の月答へぬ影ぞ袖につつれる

(四六)千五百番歌合に 右衛門督道眞

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春や昔の月に問はばや

(四七)千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女

梅の花あかぬ色香も昔にておなじ形見の春の夜の月

(四八)梅の花に添へて大貳三位に遣しける 權中納言定頼

來ぬ人によそへて見つる梅の花散りなむのちのなくさめぞなき

(四九)返し 大貳三位

春ごとに心をしむる花の枝にたがなほざりの袖かふれつる

(五〇)二月雪落 衣といふことをよみ侍りける 康資王母

梅散らす風も越えてや吹きつらむかをれる雪の袖に亂るゝ

(五一)題知らず 西行法師

とめ來かし梅さかりなるわが宿がうときも人は折にこそよれ

(五二)百首歌奉りしに春の歌 式子内親王

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅はわれを忘るな

(五三)土御門内大臣家に梅香留袖といふことをよみ侍りけるに 藤原有家朝臣

散りぬればにほひばかりを梅の花ありとや袖に春風の吹く

(五四)題知らず 八條院高倉

ひとりのみながめて散りぬ梅の花知るばかりなる人は訪ひ來で

(五五)文集嘉陵春夜詩不明不暗朧々月といへることをよみ侍りける 大江千里

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき

(五六)祐子内親王藤壺に住み侍りけるに女房上人などさるべきかぎり物語して

春秋のあはれ いづれにか心ひくなどあらそひ侍りけるに人々多く秋に
心を寄せ侍りければ 藤原孝標娘

淺緑花もひとつにかすみつゝおぼろに見ゆる春の夜の月

(五七)百首歌奉りし時 源具親

難波瀉かすまぬ波もかすみけりうつるも曇る朧月夜に

(五八)摂政太政大臣家の百首歌合に 寂蓮法師

今はとてたのむの雁もつちわびぬ朧月夜のあけぼの空

(五九) 刑部卿頼輔歌合し侍りけるによみて遣しける 皇太后宮大夫俊成

聞く人ぞ涙は落つる 歸る雁鳴きてゆくなるあけぼのの空

(六〇) 題知らず 讀人しらす

故郷に歸るかりがねさ夜更けて雲路にまよふ聲聞ゆなり

(六一) 歸雁を 撰政太政大臣

忘るなよたのむの澤を立つ雁もいなばの風の秋の夕暮

(六二) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

歸る雁今はの心ありあけに月と花との名こそ惜しけれ

(六三) 守覺法親王の五十首の歌に 藤原定家朝臣

霜まよふ空にしをれしかりがねの歸るつばさに春雨ぞ降る

(六四) 閑中春雨といふことを 大僧正行慶

つくづくと春のながめの寂しきはしのぶにつたふ軒の玉水

(六五) 寛平の御時后の宮の歌合の歌 伊勢

水の面に綾織り亂る春雨や山の緑をなべて染むらむ

(六六) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

常磐なる山の岩根にむす苔の染めぬ緑に春雨ぞ降る

(六七) 清輔朝臣のもとにて雨中苗代といふことをよめる 勝命法師

雨降れば小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて

(六八) 延喜の御時屏風に 凡河内躬恆

春雨の降りそめしより青柳の絲の緑ぞ色まさりける

(六九) 題知らず 大宰大貳高遠

うちなびき春は來にけり青柳の陰ふむ道に人のやすらふ

(七〇) 題知らず 輔仁親王

み吉野の大川のへの古柳陰こそ見えね春めきにけり

(七一) 百首歌の中に 崇徳院御歌

嵐吹く岸の柳のいなむしる織り敷く波にまかせてぞ見る

(七二) 建仁元年三月歌合に霞隔遠樹といふことを 權中納言公經

高瀬さす六田の淀の柳原緑も深くかすむ春かな

(七三) 百首の歌よみ侍りける時春の歌とてよめる 殷富門院大輔

春風の霞吹き解く絶え間より亂れてなびく青柳の絲

(七四)千五百番歌合に春の歌 藤原雅經

白雲の絶え間になびく青柳の葛城山に春風ぞ吹く

(七五)千五百番歌合に春の歌 藤原有家朝臣

青柳の絲に玉ぬく白露の知らず幾世の春か經ぬらむ

(七六)千五百番歌合に春の歌 宮内卿

薄く濃き野への緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え

(七七)題知らず 曾禰好忠

荒小田の去年の古跡の古蓬今は春へとひこばえにけり

(七八)題知らず 壬生忠見

焼かずとも草はもえなむ春日野をただ春の日にまかせたらなむ

(七九)題知らず 西行法師

吉野山櫻が枝に雪散りて花遅げなる年にもあるかな

(八〇)白河院鳥羽におはしましける時人々山家待花といへる心をよみ侍りける
に 藤原隆時朝臣

櫻花咲かばまつ見むと思ふ間に日數經にけり春の山里

(八一)亭子院歌合に 紀實之

わが心春の山べにあくがれてながながし日を今日も暮しつ

(八二)撰政太政大臣家百首歌合に野遊の心を 藤原家隆朝臣

思ふどちそことも知らずゆき暮れぬ花の宿かせ野への鶯

(八三)百首歌奉りし時 式子内親王

いま櫻咲きぬと見えてうす曇り春にかすめる世のけしきかな

(八四)題知らず 讀人しらず

臥して思ひ起きてながむる春雨に花の下紐いかに解くらむ

(八五)題知らず 中納言家持

ゆかむ人來む人しのべ春霞たつ田の山の初櫻花

(八六)花の歌とてよみ侍りける 西行法師

吉野山去年のしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねむ

(八七)和歌所にて歌つかうまつりしに春歌とてよめる 寂蓮法師

葛城や高間の櫻咲きにけり立田の奥にかゝる白雲

(八八)題知らず 讀人しらず

いそのかみ古き都を來て見れば昔かざしし花咲きにけり

(八九) 題知らず 源公忠朝臣

春にのみ年はあらなむ荒小田をかへすがへすも花を見るべく

(九〇) 八重櫻を折りて人の遣して侍りければ 道命法師

白雲の立田の山の八重櫻いづれを花と分けて折りけむ

(九一) 百首歌奉りし時 藤原定家朝臣

白雲の春はかさねて立田山小倉の峰に花にほふらし

(九二) 題知らず 藤原家衡朝臣

吉野山花やさかりににほふらむ故郷去らぬ峰の白雲

(九三) 和歌所の歌合に羈旅花といふことを 藤原雅經

岩根踏みかさなる山を分け捨てて花も幾重のあとの白雲

(九四) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

尋ね来て花に暮せる木の間より待つとしもなき山の端の月

(九五) 故郷の花といへる心を 前大僧正慈圓

散り散らず人も尋ねぬ故郷の露けき花に春風ぞ吹く

(九六) 千五百番歌合に 右衛門督道具

いそのかみ布留野の櫻たが植えて春は忘れぬ形見なるらむ

(九七) 千五百番歌合に 正三位季能

花ぞ見る道の芝草踏み分けて吉野の宮の春のあけほの

(九八) 千五百番歌合に 藤原有家朝臣

朝日影にほへる山の櫻花つれなく消えぬ雪かとぞ見る

新古今集 卷第二 春歌 下

花にあかぬ歎きはいつもせしかども今日の今宵に似る時はなし

(一〇六) 題知らず 凡河内躬恆

(九九) 釋阿和歌所にて九十賀し侍りし折屏風に山に櫻咲きたる所を 太上天皇

櫻咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日もあかぬ色かな

いもやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつゝ

(一〇七) 題知らず 伊勢

(一〇〇) 千五百番歌合に春の歌 皇太后宮大夫俊成

いくとせの春に心をつくし來ぬあはれと思へみ吉野の花

山櫻散りてみ雪にまがひなばいづれか花と春に問はなむ

(一〇八) 題知らず 紀貫之

(一〇一) 百首の歌に 式子内親王

はかなくて過ぎにしかたを數ふれば花にも思ふ春ぞ經にける

わが宿のものなりながら櫻花散るをばえこそとどめざりけれ

(一〇九) 寛平御時后の宮の歌合の歌に 讀人しらす

(一〇二) 内大臣に侍りける時望山花といへる心をよみ侍りける 京極前關白太政大臣

霞立つ春の山べに櫻花あかず散るとや鶯の鳴く

(一一〇) 題知らず 山邊赤人

白雲のたなびく山の八重櫻いづれを花とゆきて折らまし

(一〇三) 祐子内親王家にて人々花の歌よみ侍りけるに 權大納言長家

春雨はいたくな降りそ櫻花まだ見ぬ人に散らまくも惜し

花の色にあまぎる霞立ちまよひ空さへにほふ山櫻かな

(一一一) 題知らず 紀貫之

(一〇四) 題知らず 山邊赤人

花の香に衣は深くなりけり木の下陰の風のまにまに

ももしきの大宮人はいとまあれや櫻かざして今日も暮らしつ

(一一二) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女

(一〇五) 題知らず 在原業平朝臣

風通ふ寢覺めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

(一一三) 守覺法親王五十首歌よませ侍りける時 藤原家隆朝臣

このほどは知るも知らぬもたまほこのゆき交ふ袖は花の香ぞする

(一一四) 撰政太政大臣家に五首歌よみ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

またや見むかた野のみ野の櫻狩花の雪散る春のあけぼの

(一一五) 花の歌よみ侍りけるに 祝部成仲

散り散らずおぼつかなきは春霞立田の山の櫻なりけり

(一一六) 山里にまかりてよみ侍りける 能因法師

山里の春の夕暮来てみれば入相の鐘に花ぞ散りける

(一一七) 題知らず 恵慶法師

櫻散る春の山へは憂かりけり世をのがれにと來しかひもなく

(一一八) 花見侍りける人にさそはれてよみける 康資王母

山櫻花の下風吹きにけり木のもとごとの雪のむら消え

(一一九) 題知らず 源重之

春雨のそぼ降る空のをやみせず落つる涙に花ぞ散るける

(一二〇) 題知らず 源重之

かりがねの歸る羽風やさそふらむ過ぎゆく峰の花も残らぬ

(一二二) 百首歌召しし時春の歌 源具親

時しもあれたのむの雁の別れさへ花散るころのみ吉野の里

(一二三) 見山花といへる心を 大納言經信

山深み杉の群立ち見えぬまで尾のへの風に花の散るかな

(一二四) 堀河院の御時百首歌奉りけるに花の歌 大納言師頼

木のもとの苔の緑も見えぬまで八重散りしける山櫻かな

(一二五) 花十首歌よみ侍りけるに 左京大夫顕輔

麓まで尾のへの櫻散り來ずばたなびく雲と見てや過ぎまし

(一二六) 花落客稀といふことを 刑部卿範兼

花散れば訪ふ人まれになりはてていとひし風の音のみぞする

(一二七) 題知らず 西行法師

ながむとて花にもいたくなれぬれば散る別れこそ悲しかりけれ

(一二八) 題知らず 越前

山里の庭よりほかの道もがな花散りぬやと人もこそとへ

(一一二八)五十首歌奉りし中に湖上花を 宮内卿

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟の跡見ゆるまで

(一一二九)關路花を 宮内卿

逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞかすむ關の杉群ら

(一一三〇)百首歌奉りし時春の歌 二條院讃岐

山高み峰の嵐に散る花の月にあまぎる明け方の空

(一一三一)百首歌召しける時春の歌 崇徳院御歌

山高み岩根の櫻散る時は天の羽衣撫つるとぞ見る

(一一三二)春日社歌合とて人々歌よみ侍りけるに 刑部卿頼輔

散りまがふ花のよそめは吉野山嵐にさわぐ峰の白雲

(一一三三)最勝四天王院障子に吉野山かきたる所 太上天皇

み吉野の高嶺の櫻散りにけり嵐も白き春のあけぼの

(一一三四)千五百番歌合に 藤原定家朝臣

櫻色の庭の春風跡もなし訪はばぞ人の雪とだに見む

(一一三五)ひととせ忍びて大内の花見にまかりて侍りしに庭に散りて侍りし 花を
硯のふたに入れて撰政のもとに遣し侍りし 太上天皇

今日だにも庭をさかりとつる花消えずはありとも雪かとも見よ

(一一三六)返し 撰政太政大臣

さそはれぬ人のためとや残りけむ明日よりさきの花の白雪

(一一三七)家の八重櫻を折らせて惟明親王のもとに遣しける 式子内親王

八重にはふ軒端の櫻うつろひぬ風よりさきに訪ふ人もがな

(一一三八)返し 惟明親王

つらきかなうつろふまでに八重櫻訪へともいはで過ぐる心は

(一一三九)五十首歌奉りし時 藤原家隆朝臣

櫻花夢かうつゝか白雲の絶えてつれなき峰の春風

(一一四〇)題知らず 皇太后宮大夫俊成女

恨みずや憂き世を花のいとひとつさそふ風あらばと思ひけるをば

(一一四一)題知らず 後徳大寺左大臣

はかなさをほかにもいはじ櫻花咲きては散りぬあはれ世の中

(一一四二)入道前關白太政大臣家に百首歌よませ侍りける時 俊恵法師

ながむべき残りの春をかぞふれば花とともに散る涙かな

(一四三) 花の歌とてよめる 殷富門院大輔

花もまた別れむ春は思ひでよ咲き散るたびの心づくしを

(一四四) 千五百番歌合に 佐近中將良平

散る花の忘れがたみの峰の雲そをだに殘せ春の山風

(一四五) 落花といふことを 藤原雅經

花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風

(一四六) 題知らず 後白河院御歌

惜しめども散り果てぬれば櫻花いまは梢をながむばかりぞ

(一四七) 殘春の心を 撰政太政大臣

吉野山花の故郷跡絶えてむなしき枝に春風ぞ吹く

(一四八) 題知らず 大納言經信

故郷の花のさかりは過ぎぬれど面影去らぬ春の空かな

(一四九) 百首歌の中に 式子内親王

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る

(一五〇) 小野宮のおほきおほいまつち君月輪寺に花見侍りける日よめる 清原元輔

たがために明日は残らむ山櫻こぼれてにほへ今日の形見に

(一五一) 曲水宴をよめる 中納言家持

唐人の舟を浮かべて遊ぶてふ今日ぞわがせこ花かつらせよ

(一五二) 紀實之曲水宴し侍りける時月入花灘暗といふことをよみ侍りける 坂上

是則

花流す瀬をも見るべき三日月のわれて入りぬる山のをち方

(一五三) 雲林院の櫻見にまかりけるにみな散り果ててはつかに片枝に残りて侍り

ければ 良暹法師

尋ねつる花もわが身もおとるへて後の春ともえこそ契らね

(一五四) 千五百番歌合に 寂蓮法師

思ひ立つ鳥は古巢も頼むらむなれぬる花の跡の夕暮

(一五五) 千五百番歌合に 寂蓮法師

散りにけりあはれ恨みのたれなれば花の跡訪ふ春の山風

(一五六) 千五百番歌合に 權中納言公經

春深く尋ねいるさの山の端にほの見し雲の色ぞ残れる

(一五七) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

初瀬山うつろふ花に春暮れてまがひし雲ぞ峰に残れる

(一六五)清慎公の家の屏風に 紀貫之

(一五八)百首歌奉りし時 藤原家隆朝臣

暮れぬとは思ふものから藤の花咲ける宿には春ぞ久しき

吉野川岸の山吹咲きにけり峰の櫻は散り果てぬらむ

(一六六)藤の松にかゝれるをよめる 紀貫之

(一五九)百首歌奉りし時 皇太后宮大夫俊成

緑なる松にかゝれる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける

駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井出の玉川

(一六七)春の暮つ方實方朝臣のもとに遣しける 藤原道信朝臣

(一六〇)堀河院の御時百首歌奉りけるに 權中納言國信

散り残る花もやあるとうち群れてみ山がくれを尋ねてしがな

岩根越す清滝川のはやければ波折りがくる岸の山吹

(一六八)修行し侍りける頃春の暮によみける 大僧正行尊

(一六一)題知らず 厚見王

木のもとのすみかもいまは荒れぬべし春し暮れなばたれか訪ひ來む

かはづ鳴く神南備川に影見えて今か咲くらむ山吹の花

(一六九)五十首歌奉りし時 寂蓮法師

(一六一)延喜十三年亭子院歌合の歌 藤原興風

暮れてゆく春のみなとは知らねども霞に落つる宇治の柴舟

あしびきの山吹の花散りにけり井出のかはづは今や鳴くらむ

(一七〇)山家三月盡をよみ侍りける 藤原伊綱

(一六三)飛香舎にて藤花宴侍りけるに 延喜御歌

來ぬまでも花ゆゑ人の待たれつる春も暮れぬるみ山べの里

かくてこそ見まくほしけれ萬代をかけて忍べる藤波の花

(一七一)題知らず 皇太后宮大夫俊成女

(一六四)天曆四年三月十四日藤壺にわたらせ給ひて花を惜しませ給ひけるに 天曆御歌

石上布留のわさ田をうち返し恨みかねたる春の暮かな

曆御歌

まとめて見れどもあかぬ藤波のたたまく惜しき今日にもあるかな

(一七二)寛平御時後の宮の歌合の歌 讀人しらず

待てといふにとまらぬものと知りながらしひてぞ惜しき春の別れは

(一七三) 山家暮春といへる心を 宮内卿

柴の戸をさすや日影のなごりなく春暮れかゝる山の端の雲

(一七四) 百首歌奉りし時 摂政太政大臣

明日よりは志賀の花園まれにだにたれかは訪はむ春の故郷

新古今集 卷第三 夏歌

(一七五) 題知らず 持統天皇御歌

春過ぎて夏來にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山

(一七六) 題知らず 素性法師

惜しめどもとまらぬ春もあるものをいはぬにきたる夏衣かな

(一七七) 更衣をよみ侍りける 前大僧正慈圓

散りはてて花のかけなき木の下にたつことやすき夏衣かな

(一七八) 春を送りて昨日のごとしといふことを 源道濟

夏衣着ていくかにかなりぬらむ残れる花は今日も散りつゝ

(一七九) 夏のはじめの歌とてよみ侍りける 皇太后宮大夫俊成女

折ふしも移れば替へつ世の中の人心の花染めの袖

(一八〇) 卯花如月といへる心をよませ給ひける 白河院御歌

卯の花のむらむら咲ける垣根をば雲間の月の影かとぞ見る

(一八一) 題知らず 大宰大貳重家

卯の花の咲きぬる時は白妙の波もて結へる垣根とぞ見る

(一八二) 齋院に侍りける時神館にて 式子内親王

忘れめや葵を草にひき結び假寝の野への露のあけほの

(一八三) 葵をよめる 小侍從

いかなればそのかみ山の葵草年はふれども二葉なるらむ

(一八四) 最勝四天王院の障子に淺香の沼かきたる所 藤原雅經

野べはいまだ淺香の沼に刈る草のかつ見るままに茂るころかな

(一八五) 崇徳院に百首歌奉りける時夏の歌 待賢門院安藝

櫻麻の苧生の下草茂れただあかで別れし花の名なれば

(一八六) 題知らず 曾禰好忠

花散りし庭の木の問も茂りあひて天照る月の影ぞまれなる

(一八七) 題知らず 曾禰好忠

かりに來と恨みし人の絶えにしを草葉につけてしのぶころかな

(一八八) 題知らず 藤原元眞

夏草は茂りにけりなたまばこの道ゆく人も結ぶばかりに

(一八九) 題知らず 延喜御歌

夏草は茂りにけりと時鳥などわが宿に一聲もせぬ

(一九〇) 題知らず 柿本人丸

鳴く聲をえやは忍ばぬ時鳥初卯の花の陰に隠れて

(一九一) 賀茂に詣でて侍りけるに人の時鳥鳴かなむと申しける曙片岡の梢をかし
く見え侍りければ 紫式部

時鳥聲待つほどは片岡の森の雲に立ちや濡れまし

(一九二) 賀茂に籠りたりける曉ほととぎすの鳴きければ 辨乳母

ほととぎすみ山出なる初聲をいつれの里のたれか聞くらむ

(一九三) 題知らず 讀人しらず

五月山卯の花月夜ほととぎす聞けどもあかすまた鳴かむかも

(一九四) 題知らず 讀人しらず

おのが妻戀ひつゝ鳴くや五月闇神南備山の山ほととぎす

(一九五) 題知らず 中納言家持

時鳥一聲鳴きて往ぬる夜はいかでか人のいをやすくぬる

(一九六) 題知らず 大中臣能宣朝臣

時鳥鳴きつゝ出づるあしひきのやまとなでしこ咲きにけらしも

(一九七) 題知らず 大納言經信

一聲と鳴きつと聞かば時鳥衣片敷きうたた寝はせむ

(一九八) 待客聞時鳥といへる心を 白河院御歌

時鳥まだうちとけぬ忍音は來ぬ人を待つわれのみぞ聞く

(一九九) 題知らず 花園左大臣

聞きてしもなほぞ寝られぬ時鳥待ちし夜ごろの心ならひに

(二〇〇) 神館にてほととぎすを聞きて 前中納言匡房

卯の花の垣根ならねど時鳥月の桂のかけに鳴くなり

(二〇一) 入道前關白右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける時鳥の歌 皇太后

宮大夫俊成

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山時鳥

(二〇二) 入道前關白右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りける時鳥の歌 皇太后

宮大夫俊成

雨そそぐ花橘に風過ぎて山時鳥雲に鳴くなり

(二〇三) 題知らず 相模

聞かでただ寝なましものを時鳥なかなかなりや夜半の一聲

(二〇四)題知らず 紫式部

たが里も訪ひもや來ると時鳥心のかぎり待ちぞわびまし

(二〇五)寛治八年前太政大臣高陽院歌合に時鳥を 周防内侍

夜をかさね待ちかね山の時鳥雲井のよそに一聲ぞ聞く

(二〇六)海邊時鳥といふことをよみ侍りける 按察使公通

一聲と聞かずば出でじ時鳥幾夜あかしのとまりなりとも

(二〇七)百首歌奉りし時夏歌の中に 民部卿範光

時鳥なほ一聲は思ひ出でよ老曾の森の夜半の昔を

(二〇八)時鳥をよみける 八條院高倉

一聲は思ひぞあへぬ時鳥たそがれどきの雲のまよひに

(二〇九)千五百番歌合に 摂政太政大臣

有明のつれなく見えし月は出でぬ山時鳥待つ夜ながらに

(二一〇)後徳大寺左大臣家に十首歌よみ侍りけるによみて遣しける 皇太后宮大

夫俊成 わが心いかにせよとて時鳥雲間の月の影に鳴くらむ

(二一一)時鳥の心をよみ侍りける 前太政大臣

時鳥鳴きているさの山の端は月ゆゑよりも恨めしきかな

(二一二)時鳥の心をよみ侍りける 權中納言親宗

有明の月は待たぬに出でぬれどなほ山深き時鳥かな

(二一三)社間時鳥といふことを 藤原保季朝臣

過ぎにけり信太の森の時鳥絶えぬ雫を袖に残して

(二一四)題知らず 藤原家隆朝臣

いかにせむ來ぬ夜あまたの時鳥待たじと思へば村雨の空

(二一五)百首歌奉りしに 式子内親王

聲はして雲路にむせぶ時鳥涙やそそぐ宵の村雨

(二一六)千五百番歌合に 權中納言公經

時鳥なほつとまれぬ心かなが鳴く里のよその夕暮

(二一七)題知らず 西行法師

聞かずともここをせにせむ時鳥山田の原の杉の群立ち

(二一八)題知らず 西行法師

ほととぎす深き峰より出でにけり外山の裾に聲の落ち来る

(二二六) 釋阿に九十賀給はせ侍りし時屏風に五月雨 撰政太政大臣

(二一九) 山家暁時鳥といへる心を 後徳大寺左大臣

小山田に引くしめ縄のうちはへて朽ちやしぬらむ五月雨のころ

小笹置く賤のまる屋の假の戸をあけがたに鳴く時鳥かな

(二二七) 題知らず 伊勢大輔

(二二〇) 五首の歌人々によませ侍りける時夏の歌とてよみ侍りける 撰政太政大臣

いかばかり田子の裳裾もそぼつらむ雲間も見えぬころの五月雨

うちしめりあやめぞかをる時鳥鳴くや五月の雨の夕暮

(二二八) 題知らず 大納言經信

(二二二) 述懐に寄せて百首歌よみ侍りける時 皇太后宮大夫俊成

三島江の入江の眞菰雨降ればいとどしをれて刈る人もなし

今日はまたあやめの根さへかけ添へて亂れぞまさる袖の白玉

(二二九) 題知らず 前中納言匡房

(二二二) 五月五日薬玉遣し侍りける人に 納言經信

眞菰刈る淀の澤水深けれど底まで月の影は澄みけり

あかなくに散りにし花のいろいろは残りにけりな君が袂に

(二三〇) 雨中木繁といふ心を 藤原基俊

(二二三) 同ならびに住み侍りけるころ五月六日もるともにながめ 明してあした

玉がしは茂りにけりな五月雨に葉守の神のしめはふるまで

に長き根を包みて紫式部に遣しける 上東門院小少將

(二三二) 百首歌よませ侍りけるに 入道前關白太政大臣

なべて世のうきになかるゝあやめ草今日までかゝるねはいかが見る

五月雨はおうの川原の眞菰草刈らでや波の下に朽ちなむ

(二三四) 返し 紫式部

(二三三) 五月雨の心を 藤原定家朝臣

何ごととあやめは分かで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせね

たまほこの道ゆく人のことづても絶えてほどふる五月雨の空

(二二五) 山畦早苗といへる心を 大納言經信

(二三三) 五月雨の心を 荒木田氏良

早苗とる山田の寛漏りにけり引くしめ縄に露ぞこぼるゝ

五月雨の雲の絶え間をながめつゝ窓より西に月を待つかな

(二三四)百首歌奉りし時 前大納言忠良

あふち咲く外面の木陰露落ちて五月雨晴るゝ風わたるなり

(二三五)五十首歌奉りし時 藤原定家朝臣

五月雨の月はつれなきみ山よりひとりも出づる時鳥かな

(二三六)大神宮に奉りし夏歌の中に 太上天皇

時鳥雲居の外に過ぎぬなり晴れぬ思ひの五月雨のころ

(二三七)建仁元年三月歌合に雨後時鳥といへる心を 二條院讃岐

五月雨の雲間の月のはれゆくをしばし待ちける時鳥かな

(二三八)題知らず 皇太后宮大夫俊成

たれかまた花橋に思ひ出でむわれも昔の人となりなば

(二三九)題知らず 右衛門督通具

ゆく末をたれしのべとて夕風に契りか置かむ宿の橋

(二四〇)百首歌奉りし時夏歌 式子内親王

かへり來ぬ昔を今と思ひ寝の夢の枕にほふ橋

(二四二)百首歌奉りし時夏歌 前大納言忠良

盧橋の花散る軒のしのぶ草昔をかけて露そこぼるゝ

(二四三)五十首歌奉りし時 前大僧正慈圓

五月闇みじかき夜半のうたた寝に花橋の袖に涼しき

(二四四)題知らず 讀人しらず

尋ぬべき人は軒端のふるさとにそれかとかをる庭の橋

(二四五)題知らず 讀人しらず

時鳥花橋の香をとめて鳴くは昔の人や戀しき

(二四六)題知らず 皇太后宮大夫俊成女

橋のほふあたりのうたた寝は夢も昔の袖の香ぞする

(二四七)題知らず 藤原家隆朝臣

今年より花咲き初むるたち花のいかで昔の香にほふらむ

(二四八)守覺法親王五十首歌よませ侍りける時 藤原定家朝臣

夕暮はいづれの雲のなごりとて花橋に風の吹くらむ

(二四九)堀河院の御時后の宮にて聞五月時鳥といふ心をのこどもつかうまつりけるに 權中納言國信

時鳥さつきみなつき分きかねてやすらふ聲ぞ空に聞ゆる

(二四九) 題知らず 白河院御歌

庭の面は月漏らぬまでなりにけり梢に夏の陰茂りつゝ

(二五〇) 題知らず 惠慶法師

わが宿の外面に立てる櫓の葉の茂みに涼む夏は來にけり

(二五一) 撰政太政大臣家百首歌合せに鵜川をよみ侍りける 前大僧正慈圓

鵜飼舟あはれとぞ見るものふの八十字治川の夕闇の空

(二五二) 撰政太政大臣家百首歌合せに鵜川をよみ侍りける 寂蓮法師

鵜飼舟高瀬さし越すほどなれやむすばほれゆくかがり火の影

(二五三) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

大堰川かがりさしゆく鵜飼舟いく瀬に夏の夜を明すらむ

(二五四) 千五百番歌合に 藤原定家朝臣

ひさかたの中なる川の鵜飼舟いかに契りて闇を待つらむ

(二五五) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

いさり火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ螢かな

(二五六) 百首歌奉りし時 式子内親王

窓近き竹の葉ささぶ風の音にいとど短きうたた寝の夢

(二五七) 鳥羽にて竹風夜涼といふことを人々つかうまつりしに 春宮權大夫公繼

窓近きいささむら竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢

(二五八) 五十首歌奉りし時 前大僧正慈圓

むすぶ手に影亂れゆく山の井のあかでも月の傾きにけり

(二五九) 最勝四天王院の障子清見關かきたる所 權大納言通光

清見瀉月はつれなき天の戸を待たても白む波の上かな

(二六〇) 家百首歌合に 撰政太政大臣

重ねても涼しかりけり夏衣つすき袂に宿る月影

(二六一) 撰政太政大臣家にて詩歌を合せけるに水邊自秋涼といふことをよみ侍り

ける 藤原有家朝臣

涼しさは秋やかへりて初瀬川ふる川のべの杉の下陰

(二六二) 題知らず 西行法師

道のべに清水流るゝ柳陰しばしとてこそ立ちどまりけれ

(二六三) 題知らず 西行法師

よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立の空

(二六四) 崇徳院に百首歌奉りける時 藤原清輔朝臣

おのづから涼しくもあるか夏衣日も夕暮の雨のなごりに

(二六五) 千五百番歌合に 權中納言公經

霞すがる庭の玉笹うちなびき一群過ぎぬ夕立の雲

(二六六) 雲隔遠望といへる心をよみ侍りける 源俊頼朝臣

十市には夕立すらしひさかたの天の香具山雲隠れゆく

(二六七) 夏月をよめる 從三位頼政

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな

(二六八) 百首歌中に 式子内親王

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山にひぐらしの聲

(二六九) 千五百番歌合に 前大納言忠良

夕づく日さすや庵の柴の戸に寂しくもあるかひぐらしの聲

(二七〇) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

秋近きけしきの森に鳴く蝉の涙の霞や下葉染むらむ

(二七一) 百首歌奉りし時 二條院讃岐

鳴く蝉の聲も涼しき夕暮に秋をかけたる森の下露

(二七二) 螢の飛びのぼるを見てよみ侍りける 壬生忠見

いつちとか夜は螢ののぼるらむ行き方知らぬ草の枕に

(二七三) 五十首歌奉りし時 撰政太政大臣

螢飛ぶ野澤に茂る蘆の根の夜な夜な下に通ふ秋風

(二七四) 刑部卿頼輔歌合し侍りけるに納涼をよみ侍りける 俊恵法師

秋生ふる片山陰に忍びつゝ吹きけるものを秋の初風

(二七五) 瞿麦露滋といふことを 高倉院御歌

白露の玉もて結へるませの中に光さへ添ふとこなつの花

(二七六) 夕顔をよめる 前太政大臣

白露のなさけ置きける言の葉やほのぼの見えし夕顔の花

(二七七) 百首歌よみ侍りける中に 式子内親王

たそがれの軒端の菝にともすればほに出でぬ秋ぞ下にこと問ふ

(二七八) 夏の歌とてよみ侍りける 前大僧正慈圓

雲まよふ夕に秋をこめながら風もほに出でぬ萩の上かな

(二七九) 大神宮に奉りし夏の歌の中に 太上天皇

山里の峰の雨雲と絶えて夕べ涼しき槿の白露

(二八〇) 文治六年女御入内屏風に 入道前關白太政大臣

岩井汲むあたりの小笹玉越えてかつがつ結ぶ秋の夕露

(二八一) 千五百番歌合に 宮内卿

片枝さす麻生の浦梨初秋になりもならずも風ぞ身にしむ

(二八二) 百首歌奉りし時 前大僧正慈圓

夏衣片へ涼しくなりぬなり夜や更けぬらむゆきあひの空

(二八三) 延喜御時月次の屏風に 壬生忠岑

夏果つる扇と秋の白露といづれかさきに置かむとすらむ

(二八四) 延喜御時月次の屏風に 紀貫之

みそぎする川の瀬見ればからころも日も夕暮に波ぞ立ちける

新古今集 卷第四 秋歌 上

伏見山松の陰より見わたせば明るる田の面に秋風ぞ吹く

(二九二) 守覺法親王五十首歌よませ侍りける時 藤原家隆朝臣

明けぬるか衣手寒し菅原や伏見の里の秋の初風

(二九三) 千五百番歌合に 摂政太政大臣

深草の露のよすがを契りにて里をばかれず秋は來にけり

(二九四) 千五百番歌合に 右衛門督通具

あはれまたいかに忍ばむ袖の露野原の風に秋は來にけり

(二九五) 千五百番歌合に 源具親

しきたへの枕の上に過ぎぬなり露を尋ぬる秋の初風

(二九六) 千五百番歌合に 顯昭法師

水茎の岡の葛葉も色づきて今朝うらがなし秋の初風

(二九七) 千五百番歌合に 越前

秋はただ心より置く夕露を袖のほかとも思ひけるかな

(二九八) 五十首歌奉りし時秋の歌 藤原雅經

昨日までよそにしのびし下荻の末葉の露に秋風ぞ吹く

(二八五) 題知らず 中納言家持

神南備の御室の山の葛かつら裏吹き返す秋は來にけり

(二八六) 百首の歌に初秋の心を 崇徳院御歌

いつしかと荻の葉向けの片よりにそそや秋とぞ風も聞ゆる

(二八七) 百首の歌に初秋の心を 藤原季通朝臣

この寝ぬる夜のまに秋は來にけらし朝けの風の昨日にも似ぬ

(二八八) 文治六年女御入内屏風に 後徳大寺左大臣

いつも聞く麓の里と思へども昨日に變る山風の風

(二八九) 百首歌よみけるうちに 藤原家隆朝臣

昨日だに訪はむと思ひし津の國の生田の森に秋は來にけり

(二九〇) 最勝四天王院の障子に、高砂かきたる所 藤原秀能

吹く風の色こそ見えね高砂の尾のへの松に秋は來にけり

(二九一) 百首歌奉りし時 皇太后宮大夫俊成

(二九九) 題知らず 西行法師

おしなべてものを思はぬ人にさへ心をつくる秋の初風

(三〇〇) 題知らず 西行法師

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原

(三〇一) 崇徳院に百首歌奉りける時 皇太后宮大夫俊成

みしづつき植ゑし山田に引板はへてまた袖濡らす秋は來にけり

(三〇二) 中納言中將に侍りける時家に山家早秋といふ心をよませ侍りけるに 法
成寺入道前關白太政大臣

朝霧や立田の山の里ならで秋來にけりとたれか知らまし

(三〇三) 題知らず 中務卿具平親王

夕暮は荻吹く風の音まさる今はたいかに寢覺せられむ

(三〇四) 題知らず 後徳大寺左大臣

夕されば荻の葉向けを吹く風にことごともなく涙落ちけり

(三〇五) 崇徳院に百首歌奉りし時 皇太后宮大夫俊成

荻の葉も契ありてや秋風のおとづれ初むるつまとなるらむ

(三〇六) 題知らず 七條院權大夫

秋來ぬと松吹く風も知らせけりかならず荻の上葉ならねど

(三〇七) 題をさぐりこれかれ歌よみたるに信太の森の秋風をよめる 藤原經衡

日を経つゝ音こそまされ和泉なる信太の森の千枝の秋風

(三〇八) 百首歌に 式子内親王

うたた寝の朝けの袖に變るなりならず扇の秋の初風

(三〇九) 題知らず 相模

手もたゆくならず扇の置きどころ忘るばかりに秋風ぞ吹く

(三一〇) 題知らず 大貳三位

秋風は吹き結べども白露の亂れて置かぬ草の葉ぞなき

(三一一) 題知らず 曾禰好忠

朝ぼらけ荻の上葉の露見ればややはだ寒し秋の初風

(三一二) 題知らず 小野小町

吹き結ぶ風は昔の秋ながらありしにも似ぬ袖の露かな

(三一三) 延喜の御時月次の屏風に 紀實之

大空をわれもながめて彦星の妻待つ夜さへひとりかも寝む

(三二四) 題知らず 山邊赤人

この夕降り来る雨は彦星のとわたる舟の櫂の掣か

ながむれば衣手涼しひさかたの天の川原の秋の夕暮

(三二五) 宇治前關白太政大臣家に七夕の心をよみ侍りける 權大納言長家

年を経て住むべき宿の池水は星合の影もおもなれやせむ

(三二二) 家に百首歌よみ侍りける時 入道前關白太政大臣

いかばかり身にしみぬらむ柵機のつま待つ宵の天の川風

(三二六) 花山院の御時七夕の歌つかうまつりけるに 藤原長能

袖ひぎてわが手にむすぶ水の面に天つ星合の空を見るかな

(三二三) 七夕の心を 權中納言公經

星合の夕べ涼しき天の川紅葉の橋をわたる秋風

(三二七) 七月七日七夕祭する所にてよみける 祭主輔親

雲間より星合の空を見渡せばしづ心なき天の川波

(三二四) 七夕の心を 待賢門院堀河

七夕の逢ふ瀬絶えせぬ天の川いかなる秋か渡り初めけむ

(三二八) 七夕の歌とてよみ侍りける 大宰大貳高遠

七夕の天の羽衣うち重ね寝る夜涼しき秋風ぞ吹く

(三二五) 七夕の心を 女御徽子女王

わくらばに天の川波よるながら明くる空にはまかせずもがな

(三二九) 七夕の歌とてよみ侍りける 小辨

七夕の衣のつまは心して吹き返しそ秋の初風

(三二六) 七夕の心を 大中臣能宣朝臣

いとどしく思ひ消ぬべし柵機の別れの袖に置ける白露

(三三〇) 七夕の歌とてよみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

七夕の門渡る舟の櫂の葉にいく秋書きつ露の玉章

(三二七) 中納言兼輔の家の屏風に 紀貫之

織女は今や別るゝ天の川川霧立ちて千鳥鳴くなり

(三三一) 百首歌の中に 式子内親王

(三二八) 堀河院の御時百首歌の中に萩をよみ侍りける 前中納言匡房

川水に鹿のしがらみかけてけり浮きて流れぬ秋萩の花

(三三九) 題知らず 從三位賴政

狩衣われとは摺らし露しげき野原の萩の花にまかせて

(三三〇) 題知らず 權僧正永縁

秋萩を折らでは過ぎし月草の花摺衣露に濡るとも

(三三一) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに 顯昭法師

萩が花ま袖にかけて高圓の尾の上の宮に領巾ふるやたれ

(三三二) 題知らず 祐子内親王家紀伊

置く露のしづ心なく秋風に亂れて咲ける眞野の萩原

(三三三) 題知らず 人丸

秋萩の咲き散る野への夕露に濡れつゝ來ませ夜は更けぬとも

(三三四) 題知らず 中納言家持

さ牡鹿の朝立つ小野の秋萩に玉と見るまで置ける白露

(三三五) 題知らず 凡河内躬恆

秋の野を分けゆく露にうつりつゝわが衣手は花の香ぞする

(三三六) 題知らず 小野小町

誰をかまつちの山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし

(三三七) 題知らず 藤原元眞

女郎花野への故郷思ひ出でて宿りし蟲の聲や戀しき

(三三八) 千五百番歌合に 左近中將良平

夕されば玉散る野への女郎花枕定めぬ秋風ぞ吹く

(三三九) 蘭をよめる 公猷法師

ふぢばかま主はたれともしら露のこぼれてにほふ野への秋風

(三四〇) 崇徳院に百首歌奉りし時 藤原清輔朝臣

薄霧の籬の花の朝じめり秋は夕べとたれかいひけむ

(三四一) 入道前關白太政大臣右大臣に侍りける時百首歌よませ侍りけるに 皇太

后宮大夫俊成

いとかくや袖はしをれし野べに出でて昔も秋の花は見しかど

(三四二) 筑紫に侍りける時秋野を見てよみ侍りける 大納言經信

花見にと人やりならぬ野べに來て心のかぎりつくしつるかな

(三四三) 題知らず 曾禰好忠

おきて見むと思ひしほどに枯れにけり露よりけなる朝顔の花

(三三四) 題知らず 紀貫之

山賊の垣ほに咲ける朝顔はしのめならで逢ふよしもなし

(三四五) 題知らず 坂上是則

うら枯るゝ淺茅が原の刈萱の亂れてものを思ふころかな

(三四六) 題知らず 人麻呂

さ牡鹿の入野の薄初尾花いつしか妹が手枕にせむ

(三四七) 題知らず 讀人しらす

小倉山麓の野への花薄ほのかに見ゆる秋の夕暮

(三四八) 題知らず 女御徽子女王

ほのかにも風は吹かなむ花薄むすばほれつゝ露に濡るとも

(三四九) 題知らず 式子内親王

花薄まだ露ふかしほに出でてはながめじと思ふ秋の盛りを

(三五〇) 撰政太政大臣家百首歌よませ侍りけるに 八條院六條

野べごとにおとづれわたる秋風をあだにもなびく花薄かな

(三五一) 和歌所歌合に朝草花といふことを 左衛門督通光

明けぬとて野べより山に入る鹿のあと吹き送る萩の下風

(三五二) 題知らず 前大僧正慈圓

身にとまる思ひを萩の上葉にてこのころ悲し夕暮の空

(三五三) 崇徳院の御時百首歌召しけるに萩を 大藏卿行宗

身のほどを思ひつづくる夕暮の萩の上葉に風わたるなり

(三五四) 秋歌よみ侍りけるに 源重之女

秋はただものをこそ思へ露かゝる萩の上吹く風につけても

(三五五) 堀河院に百首歌奉りける時 藤原基俊

秋風のややはだ寒く吹くなべに萩の上葉の音ぞかなしき

(三五六) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

萩の葉に吹けば風の秋なるを待ちける夜半のさ牡鹿の聲

(三五七) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

おしなべて思ひしことの數々になほ色まさる秋の夕暮

(三五八) 題知らず 撰政太政大臣

暮れかゝるむなしき空の秋を見ておぼえずたまる袖の露かな

(三五九) 家に百首歌合し侍りけるに 撰政太政大臣

もの思はでかゝる露やは袖に置くながめてけりな秋の夕暮

(三六〇) をのことも詩作りて歌に合せ侍りしに山路秋行といふことを 前大僧正

慈圓

深山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕暮の空

(三六一) 題知らず 寂蓮法師

寂しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮

(三六二) 題知らず 西行法師

心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ澤の秋の夕暮

(三六三) 西行法師すめて百首歌よませ侍りけるに 藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の笛屋の秋の夕暮

(三六四) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

たへてやは思ひありともいかがせむ律の宿の秋の夕暮

(三六五) 秋の歌とてよみ侍りける 宮内卿

思ふことさしてそれとはなきものを秋の夕べを心にぞ問ふ

(三六六) 秋の歌とてよみ侍りける 鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖はあらじただわれからの露の夕暮

(三六七) 秋の歌とてよみ侍りける 西行法師

おぼつかな秋はいかなるゆゑのあればすするにもの悲しかるらむ

(三六八) 秋の歌とてよみ侍りける 式子内親王

それながら昔にもあらぬ秋風にいとどながめをしづのをだまき

(三六九) 題知らず 藤原長能

ひぐらしの鳴く夕暮ぞ憂かりけるいつもつきせぬ思ひなれども

(三七〇) 題知らず 和泉式部

秋來れば常盤の山の松風もつつるばかりに身にぞしみける

(三七二) 題知らず 曾禰好忠

秋風の四方に吹きくる首羽山なにの草木かのどけかるべき

(三七三) 題知らず 相模

暁の露も涙もとどまらで恨むる風の聲ぞ残れる

(三七三) 法性寺入道前關白太政大臣家の歌合に野風 藤原基俊

高圓の野路の篠原末さわぎそや木枯し今日吹きぬなり

(三七四) 千五百番歌合に 右衛門督通具

深草の里の月影寂しさも住み来しままの野への秋風

(三七五) 五十首歌奉りし時杜間月といふことを 皇太后宮大夫俊成女

大荒木の森の木の間を漏りかねて人だのめなる秋の夜の月

(三七六) 守覺法親王五十歌よませ侍りけるに 藤原家隆朝臣

有明の月待つ宿の袖の上に人だのめなる宵の稻妻

(三七七) 撰政太政大臣家百首歌合に 藤原有家朝臣

風わたる淺茅が末の露にだに宿りも果てぬ宵の稻妻

(三七八) 水無瀬にて十首歌奉りし時 左衛門督通光

武藏野やゆけども秋の果てぞなきいかなる風の末に吹くらむ

(三七九) 百首歌奉りし時月の歌に 前大僧正慈圓

いつまでか涙雲らで月は見し秋待ちえても秋ぞ戀しき

(三八〇) 百首歌奉りし時月の歌に 式子内親王

ながめわびぬ秋よりほかの宿もがな野にも山にも月や澄むらむ

(三八一) 題知らず 圓融院御歌

月影の初秋風と更けゆけば心づくしにものをこそ思へ

(三八二) 題知らず 三條院御歌

あしびきの山のあなたに住む人は待たでや秋の月を見るらむ

(三八三) 雲間嶺月といふことを 堀河院御歌

しきしまや高圓山の雲間より光さしそふ弓張の月

(三八四) 題知らず 堀河右大臣

人よりも心のかぎりながめつる月はたれとも分かじものゆゑ

(三八五) 題知らず 橋為仲朝臣

あやなくも曇らぬ宵をいとふかなしのぶの里の秋の夜の月

(三八六) 題知らず 法性寺入道前關白太政大臣

風吹けば玉散る萩の下露にはかなく宿る野への月かな

(三八七) 題知らず 從三位頼政

今宵たれす吹く風を身にひめて吉野の嶽に月を見るらむ

(三八八) 法性寺入道前關白太政大臣家に月の歌あまたよみ侍りけるに 太宰大貳

重家

月見れば思ひぞあへぬ山高みいつれの年の雪にあるらむ

(三八九)和歌所歌合に湖邊月といふことを 藤原家隆朝臣

鳩の海や月の光のうつろへば波の花にも秋は見えけり

(三九七)月前松風 鴨長明

(三九〇)百首歌奉りし時秋の歌の中に 前大僧正慈圓

更けゆかば煙もあらし鹽竈のうらみな果てそ秋の夜の月

ながむれば千々にもの思ふ月にまたわが身ひとつの峰の松風

(三九八)山月といふことをよみ侍りける 藤原秀能

(三九一)題知らず 皇太后宮大夫俊成女

ことわりの秋にはあへぬ涙かな月の桂も變る光に

あしびきの山路の苔の露の上に寢覺夜深き月を見るかな

(三九九)八月十五夜和歌所歌合に海邊秋月といふことを 宮内卿

(三九二)題知らず 藤原家隆朝臣

ながめつゝ思ふも寂しひさかたの月の都の明け方の空

心ある雄島の海女の袂かな月宿れとは濡れぬものから

(四〇〇)八月十五夜和歌所歌合に海邊秋月といふことを 宜秋門院丹後

(三九三)五十首歌奉りし時月前草花 撰政太政大臣

故郷の本あらの小萩咲きしより夜な夜な庭の月ぞうつろふ

忘れじな難波の秋の夜半の空こと浦に澄む月は見るとも

(四〇一)八月十五夜和歌所歌合に海邊秋月といふことを 鴨長明

(三九四)建仁元年三月歌合に山家秋月といふことをよみ侍りし 撰政太政大臣

時しもあれ故郷人は音もせて深山の月に秋風ぞ吹く

松島や鹽汲む蟹の秋の袖月はもの思ふならひのみかは

(四〇二)題知らず 七條院大納言

(三九五)八月十五夜和歌所歌合に深山月といふことを 撰政太政大臣

深からぬ外山の庵の寢覺だにさぞな木の間は寂しき

こと問はむ野島が崎の蟹衣波と月とにいかがしをるゝ

(四〇三)和歌所歌合に海邊月を 藤原家隆朝臣

(三九六)月前松風 寂蓮法師

秋の夜の月やをしまのあまの原明け方近き沖の釣舟

(四〇四) 題知らず 前大僧正慈圓

憂き身にはながむるかひもなかりけり心に曇る秋の夜の月

(四〇五) 題知らず 大江千里

いづくにか今宵の月の曇るべき小倉の山も名をや變ふらむ

(四〇六) 題知らず 源道濟

心こそあくがれにけれ秋の夜の夜深き月をひとり見しより

(四〇七) 題知らず 上東門院小少將

變らじな知るも知らぬも秋の夜の月待つほどの心ばかりは

(四〇八) 題知らず 和泉式部

たのめたる人はなけれど秋の夜は月見てぬべき心地こそせね

(四〇九) 月を見て遣しける 藤原範永朝臣

見る人の袖をぞしぼる秋の夜は月にいかなる影か添ふらむ

(四一〇) 返し 相模

身に添へる影とこそ見れ秋の月袖にうつらぬ折しなければ

(四一一) 永承四年内裏歌合に 大納言經信

月影の澄みわたるかな天の原雲吹きはらふ夜半の風に

(四一二) 題知らず 左衛門督通光

立田山夜半に嵐の松吹けば雲にはつとき峰の月影

(四一三) 崇徳院に百首歌奉りけるに 左京大夫顕輔

秋風にたなびく雲の絶え間より漏れ出づる月の影のさやけさ

(四一四) 題知らず 道因法師

山の端に雲の横ぎる宵の間は出でて月ぞなほ待たれける

(四一五) 題知らず 殷富門院大輔

ながめつゝ思ふに濡るゝ袂かな幾夜かは見む秋の夜の月

(四一六) 題知らず 式子内親王

宵の間にさても寝ぬべき月ならば山の端近きものは思はじ

(四一七) 題知らず 式子内親王

更くるまでながむればこそ悲しけれ思ひも入れじ秋の夜の月

(四一八) 五十首歌奉りし時 摂政太政大臣

雲はみなはらひはてたる秋風を松に残して月を見るかな

(四一九) 家に月五十首歌よませ侍りける時 撰政太政大臣

月だにも慰めがたき秋の夜の心も知らぬ松の風かな

(四二〇) 家に月五十首歌よませ侍りける時 藤原定家朝臣

さ笹や待つ夜の秋の風更けて月を片敷く宇治の橋姫

(四二二) 題知らず 右大将忠經

秋の夜の長きかひこそなかりけれ待つに更けぬる有明の月

(四二二) 五十首歌奉りけるに野徑月 撰政太政大臣

ゆく末は空もひとつの武藏野に草の原より出づる月影

(四二三) 雨後月 宮内卿

月をなほ待つらむものか村雨の晴れゆく雲の末の里人

(四二四) 題知らず 右衛門督通具

秋の夜は宿かる月も露ながら袖に吹きこす荻の上風

(四二五) 題知らず 源家長

秋の月しのに宿かる影たけて小笹が原に露ふけにけり

(四二六) 元久元年八月十五夜和歌所にて田家見月といふことを 前太政大臣

風わたる山田の庵をもる月や穂波に結ぶ氷なるらむ

(四二七) 和歌所歌合に田家月を 前大僧正慈圓

雁の来る伏見の小田に夢覺めて寝ぬ夜の庵に月を見るかな

(四二八) 和歌所歌合に田家月を 皇太后宮大夫俊成女

稲葉吹く風にまかせて住む庵は月ぞまことにもり明しける

(四二九) 題知らず 皇太后宮大夫俊成女

あくがれて寝ぬ夜の塵の積るまで月にはらはぬ床のさ笹

(四三〇) 題知らず 大中臣定雅

秋の田のかりねの床の稲筵月宿れともしげる露かな

(四三一) 崇徳院御時百首歌召しけるに 左京大夫顯輔

秋の田に庵さす賤の苦をあらみ月とともにやもり明すらむ

(四三二) 百首歌奉りし時秋の歌 式子内親王

秋の色は籬にうとくなりゆけど手枕なるゝ閨の月影

(四三三) 秋の歌の中に 太上天皇

秋の露や袂にいたく結ぶらむ長き夜あかず宿る月かな

(四三四) 千五百番歌合に 左衛門督通光

さらにまた暮を頼めと明けにけり月はつれなき秋の夜の空

(四三五) 經房卿家歌合に暁月の心を 二條院讃岐

おほかたの秋の寢覺めの露けくばまたたが袖に有明の月

(四三六) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

はらひかねさこそは露のしげからめ宿るか月の袖のせばきに

新古今集 卷第五 秋歌 下

(四三七)和歌所にてをのことも歌よみ侍りしに夕の鹿といふことを 藤原家隆朝臣

下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてやひとり鹿の鳴くらむ

(四三八)百首歌奉りし時 入道左大臣

山嵐に鹿の音高く聞ゆなり尾上の月にさ夜や更けぬる

(四三九)百首歌奉りし時 寂蓮法師

野分せし小野の草臥荒れ果ててみ山に深きさ牡鹿の聲

(四四〇)題知らず 俊恵法師

嵐吹く眞葛が原に鳴く鹿は恨みてのみや妻を戀ふらむ

(四四一)題知らず 前中納言匡房

妻戀ふる鹿の立ちどを尋ねれば狭山が裾に秋風ぞ吹く

(四四二)百首歌奉りし時秋の歌 惟明親王

み山べの松の梢をわたるなり嵐に宿すさ牡鹿の聲

(四四三)晩聞鹿といふことをよみ侍りし 土御門内大臣

われならぬ人もあはれやまさるらむ鹿鳴く山の秋の夕暮

(四四四)百首歌よみ侍りけるに 摂政太政大臣

たぐへくる松の嵐やたゆむらむ尾のへに歸るさ牡鹿の聲

(四四五)千五百番歌合に 前大僧正慈圓

鳴く鹿の聲に目覺めてしのぶかな見果てぬ夢の秋の思ひを

(四四六)家に歌合し侍りけるに鹿をよめる 權中納言俊忠

夜もすがら妻問ふ鹿の鳴くなべに小萩が原の露ぞこぼるゝ

(四四七)題知らず 源道濟

寢覺して久しくなりぬ秋の夜は明けやしぬらむ鹿ぞ鳴くなる

(四四八)題知らず 西行法師

小山田の庵近く鳴く鹿の音におどろかさされておどろかさな

(四四九)白河院鳥羽におはしましけるに田家秋興といへることを人々よみ侍りけるに 中宮大夫師忠

山里の稲葉の風に寢覺めて夜深く鹿の聲を聞くかな

(四五〇)郁芳門院の前裁合によみ侍りける 藤原顕綱朝臣

ひとり寝やいとど寂しきさ牡鹿の朝臥す小野の葛の裏風

(四五二) 題知らず 俊恵法師

立田山木末まばらになるままに深くも鹿のそよくなるかな

(四五九) 題知らず 人麻呂

秋されば雁のはかぜに霜降りて寒き夜な夜な時雨さへ降る

(四五二) 祐子内親王家歌合の後鹿の歌よみ侍りけるに 權大納言長家

さ牡鹿の妻問ふ山の岡べなるわさ田は刈らし霜は置くとも

過ぎてゆく秋の形見にさ牡鹿のおのが鳴く音も惜しくやあるらむ

(四六〇) 題知らず 紀貫之

(四五三) 撰政太政大臣家の百首歌合に 前大僧正慈圓

刈りて干す山田の稲は袖ひぢて植ゑし早苗と見えすもあるかな

わきてなど庵守る袖のしをるらむ稲葉にかぎる秋の風かは

(四六一) 題知らず 菅贈太政大臣

(四五四) 題知らず 讀人しらず

草葉には玉と見えつゝわび人の袖の涙の秋の白露

秋田守る假庵つくり我れ居れば衣手寒し露ぞ置きける

(四六二) 題知らず 中納言家持

(四五五) 題知らず 前中納言匡房

わが宿の尾花が末の白露の置きし日よりぞ秋風も吹く

秋來れば朝けの風の手を寒み山田の引板をまかせてぞ聞く

(四六三) 題知らず 恵慶法師

(四五六) 題知らず 喜滋爲政朝臣

秋といへば契り置きてや結ぶらむ淺茅が原の今朝の白露

時鳥鳴く五月雨に植ゑし田をかりがね寒み秋ぞ暮れぬる

(四六四) 題知らず 人麻呂

(四五七) 題知らず 中納言家持

秋されば置く白露にわが宿の淺茅が上葉色つきにけり

今よりは秋風寒くなりぬべしいかでかひとり長き夜を寝む

(四六五) 題知らず 天曆御歌

(四五八) 題知らず 人麻呂

おぼつかな野にも山にも白露のなにごとをかは思ひ置くらむ

(四六六) 後冷泉院のみこの宮と申しける時尋野花といへる心を 堀河右大臣

露しげみ野べを分けつゝ唐衣濡れてぞ歸る花の雲に

(四六七) 閑庭露滋といふことを 藤原基俊

庭の面にしげる蓬にことよせて心のままに置ける露かな

(四六八) 白河院にて野草露繁といへる心ををのこどもつかまつりけるに 贈左大臣長實

秋の野の草葉おしなみ置く露に濡れてや人の尋ねゆくらむ

(四六九) 百首歌奉りし時 寂蓮法師

もの思ふ袖より露やならひけむ秋風吹けばたへぬものとは

(四七〇) 秋の歌の中に 太上天皇

露は袖にもの思ふころはさぞな置くかならず秋のならひならねど

(四七一) 秋の歌の中に 太上天皇

野原より露のゆかりを尋ね来てわが衣手に秋風ぞ吹く

(四七二) 題知らず 西行法師

きりぎりす夜寒に秋のなるままに弱るか聲の遠ざかりゆく

(四七三) 守覺法親王家五十首歌中に 藤原家隆朝臣

蟲の音も長き夜あかぬ故郷になほ思ひ添ふ松風ぞ吹く

(四七四) 百首歌中に 式子内親王

跡もなき庭の淺茅にむすばほれ露の底なる松蟲の聲

(四七五) 題知らず 藤原輔尹朝臣

秋風は身にしむばかり吹きにけり今や打つらむ妹がさ衣

(四七六) 題知らず 前大僧正慈圓

衣打つ音は枕に菅原や伏見の夢を幾夜残しつ

(四七七) 千五百番歌合に秋歌 權中納言公經

衣打つみ山の庵のしばしばも知らぬ夢路に結ぶ手枕

(四七八) 和歌所歌合に月のもとに衣を打つといふことを 攝政太政大臣

里は荒れて月やあらぬと恨みてもたれ淺茅生に衣打つらむ

(四七九) 和歌所歌合に月のもとに衣を打つといふことを 宮内卿

まどろまでながめよとのすさびかな麻のさ衣月に打つ聲

(四八〇) 千五百番歌合に 藤原定家朝臣

秋とだに忘れむと思ふ月影をさもあやくに打つ衣かな

(四八一) 擣衣をよみ侍りける 大納言經信

故郷に衣打つとはゆく雁や旅の空にも鳴きて告ぐらむ

(四八二) 中納言兼輔の家の屏風の歌 紀貫之

雁鳴きて吹く風寒み唐衣君待ちがてに打たぬ夜ぞなき

(四八三) 擣衣の心を 藤原雅經

み吉野の山の秋風さ夜更けて故郷寒く衣打つなり

(四八四) 擣衣の心を 式子内親王

千度打つきぬたの音に夢さめてもの思ふ袖の露ぞくだくる

(四八五) 百首歌奉りし時 式子内親王

更けにけり山の端近く月冴えて十市の里に衣打つ聲

(四八六) 九月十三日夜月くまなく侍りけるを詠めあかしてよみ侍りける 道信朝臣

秋果つるさ夜更け方の月見れば袖も残らず露ぞ置きける

(四八七) 百首歌奉りし時 藤原定家朝臣

ひとり寝る山鳥の尾のしだり尾に霜置きまよふ床の月影

(四八八) 摂政太政大臣大將に侍りける時月歌五十首よませ侍りけるに 寂蓮法師

人目見し野へのけしきはうら枯れて露のよすがに宿る月かな

(四八九) 月の歌とてよみ侍りける 大納言經信

秋の夜は衣さ筵重ねても月の光にしくものぞなき

(四九〇) 九月ついたちがたに 花山院御歌

秋の夜ははや長月になりけりことわりなりや寢覺せらるゝ

(四九一) 五十首歌奉りし時 寂蓮法師

村雨の露もまだ干ぬ槿の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

(四九二) 秋の歌とて 太上天皇

寂しさは深山の秋の朝曇り霧にしをるゝ槿の下露

(四九三) 河霧といふことを 左衛門督通光

あけぼのや川瀬の波の高瀬舟下すか人の袖の秋霧

(四九四) 堀河院御時百首歌奉りけるに霧をよめる 權大納言公實

麓をば宇治の川霧立ちこめて雲居に見ゆる朝日山かな

(四九五) 題知らず 曾禰好忠

山里に霧の籬のへだてずはをちかた人の袖も見てまし

(四九六) 題知らず 清原深養父

鳴く雁の音をのみぞ聞く小倉山霧立ち晴るゝ時しなれば

(四九七) 題知らず 人麻呂

垣ほなる荻の葉そよぎ秋風の吹くなるなべに雁ぞ鳴くなる

(四九八) 題知らず 人麻呂

秋風に山飛び越ゆるかりがねのいや遠ざかり雲隠れつゝ

(四九九) 題知らず 凡河内躬恆

初雁の羽風涼しく鳴るなべにたれか旅寝の衣返さぬ

(五〇〇) 題知らず 讀人しらす

かりがねは風にきほひて過ぐれどもわが待つ人の言つてもなし

(五〇一) 題知らず 西行法師

横雲の風に分かるゝしののめに山飛び越ゆる初雁の聲

(五〇二) 題知らず 西行法師

白雲をつばさにかけてゆく雁の門田の面の友慕ふなる

(五〇三) 五十首歌奉りし時月前聞雁といふことを 前大僧正慈圓

大江山かたぶく月の影冴えて鳥羽田の面に落つるかりがね

(五〇四) 題知らず 朝恵法師

村雲や雁の羽風に晴れぬらむ聲聞く空に澄める月影

(五〇五) 題知らず 皇太后宮大夫俊成女

吹きまよふ雲居をわたる初雁のつばさにならす四方の秋風

(五〇六) 詩に合せし歌の中に山路秋行といへることを 藤原家隆朝臣

秋風の袖に吹きまく峰の雲をつばさにかけて雁も鳴くなり

(五〇七) 五十首歌奉りし時菊籬月といへる心を 宮内卿

霜を待つ籬の菊の宵の間に置きまがふ色は山の端の月

(五〇八) 鳥羽院御時内裏より菊を召しけるに奉るとて結びつけ侍りける 花園左

大臣室

九重にうつろひぬとも菊の花もとの籬を思ひ忘るな

(五〇九) 權中納言定頼

今よりはまた咲く花もなきものをいたくな置きそ菊の上の露

(五一〇) 枯れゆく野べのきりぎりすを 中務卿具平親王

秋風にしをるゝ野べの花よりも蟲の音いたくかれにけるかな

(五一二) 題知らず 大江嘉言

寢覺する袖さへ寒く秋の嵐吹くなり松蟲の聲

(五一三) 千五百番歌合に 前大僧正慈圓

秋を経てあはれも露も深草の里訪ふものは鶉なりけり

(五一四) 千五百番歌合に 左衛門督通光

入り日さす麓の尾花うちなびきたれ秋風に鶉鳴くらむ

(五一五) 題知らず 皇太后宮大夫俊成女

あだに散る露の枕に臥しわびて鶉鳴くなり床の山風

(五一六) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女

訪ふ人もあらし吹き添ふ秋は來て木の葉に埋む宿の道芝

(五一七) 秋の歌とて 太上天皇

色變る露をば袖に置きまよひつら枯れてゆく野への秋かな

(五一八) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

秋更けぬ鳴けや霜夜のきりぎりすや影寒し蓬生の月

きりぎりす鳴くや霜夜のさ筵に衣片敷きひとりかも寝む

(五二〇) 千五百番歌合に 春宮權大夫公繼

寢覺めする長月の夜の床寒み今朝吹く風に霜や置くらむ

(五二一) 和歌所にて六首歌つかうまつりし時秋の歌 前大僧正慈圓

秋深き淡路の島の有明にかたぶく月を送る浦風

(五二二) 暮秋の心を 前大僧正慈圓

長月も幾有明になりぬらむ淺茅の月のいとどさびゆく

(五二三) 撰政太政大臣將に侍りける時百首歌よませ侍りけるに 寂蓮法師

鶉の雲のかけはし秋暮れて夜半には霜や冴えわたるらむ

(五二四) 櫻のもみぢはじめたるを見て 中務卿具平親王

いつの間に紅葉しぬらむ山櫻昨日か花の散るを惜しみし

(五二五) 紅葉透霧といふことを 高倉院御歌

薄霧の立ち舞ふ山のもみぢ葉はさやかならねどそれと見えけり

(五二六) 秋の歌とてよめる 八條院高倉

神南備の三室の梢いかならむなべての山も時雨するころ

(五二六) 最勝四天王院の障子に鈴鹿川かきたる所 太上天皇

鈴鹿川深き木の葉に日數經て山田の原の時雨をぞ聞く

(五二七) 入道前關白太政大臣家に百首歌よみ侍りけるに紅葉を 皇太后宮大夫俊成

心とや紅葉はすらむ立田山松は時雨に濡れぬものかは

(五二八) 大堰川にまかりて紅葉見侍りけるに 藤原輔尹朝臣

思ふことなくぞ見ましもみぢ葉を嵐の山の麓ならずば

(五二九) 題知らず 曾禰好忠

入日さす左保の山への柞原曇らぬ雨と木の葉降りつゝ

(五三〇) 百首歌奉りし時 宮内卿

立田山嵐や峰に弱るらむ渡らぬ水も錦絶えけり

(五三一) 左大將に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに柞をよみ侍りける 攝政
太政大臣

ははそ原雲も色や變はるらむ森の下の草秋更けにけり

(五三二) 左大將に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに柞をよみ侍りける 藤原
定家朝臣

時分かぬ波さへ色にいづみ川柞の森に風吹くらし

(五三三) 障子の繪に荒れたる宿に紅葉散りたる所をよめる 俊頼朝臣

故郷は散るもみぢ葉に埋もれて軒のしのぶに秋風ぞ吹く

(五三四) 百首歌奉りし時秋の歌 式子内親王

桐の葉も踏み分けがたくなりけりかならず人を待つとなけれど

(五三五) 題知らず 曾禰好忠

人は來ず風に木の葉は散り果てて夜な夜な蟲は聲弱るなり

(五三六) 守覺法親王家五十首歌よみ侍りけるに 春宮權大夫公繼

もみぢ葉の色にまかせて常磐木も風につつるふ秋の山かな

(五三七) 千五百番歌合に 藤原家隆朝臣

露時雨もる山陰の下紅葉濡るとも折らむ秋の形見に

(五三八) 題知らず 西行法師

松に這ふ正木のかづら散りにけり外山の秋は風すさぶらむ

(五三九) 法性寺入道前關白太政大臣家歌合に 前參議親隆

鶉鳴く片野に立てる櫛紅葉散らぬばかりに秋風ぞ吹く

(五四〇) 百首歌奉りし時 二條院讚岐

散りかゝる紅葉の色は深けれど渡れば濁る山川の水

(五四一) 題知らず 柿本人麻呂

飛鳥川もみぢ葉流る葛城の山の秋風吹きぞしめらし

(五四二) 題知らず 中納言長方

飛鳥川瀬々に波よるくれなゐや葛城山の木枯しの風

(五四三) 長月のころ水無瀬に日ごろ侍りけるに嵐の山の紅葉 涙にたぐふよし申

し遣して侍りける人の返事に 權中納言公經

もみぢ葉をさこそ嵐のはらふらめこの山もとも雨と降るなり

(五四四) 家に百首歌合し侍りける時 撰政太政大臣

龍田姫今はこのころの秋風に時雨をいそぐ人の袖かな

(五四五) 千五百番歌合に 權中納言兼宗

ゆく秋の形見なるべきもみぢ葉も明日は時雨と降りやまがはむ

(五四六) 紅葉見にまかりてよみ侍りける 前大納言公任

うち群れて散るもみぢ葉を尋ねれば山路よりこそ秋はゆきけれ

(五四七) 津の國に侍りけるころ道濟がもとに遣しける 能因法師

夏草のかりそめにとて来しかども難波の浦に秋ぞ暮れぬる

(五四八) 暮の秋思ふこと侍りけるころ 能因法師

かくしつゝ暮れぬる秋と老いぬればしかすがになほものぞ悲しき

(五四九) 五十首歌よませ侍りけるに 守覺法親王

身に代へていざさは秋を惜しみむさらでももろき露の命を

(五五〇) 閏九月盡の心を 前太政大臣

なべて世の惜しさに添へて惜しむかな秋よりのちの秋の限りを

新古今集 卷第六 冬歌

(五五二) 千五百番歌合に初冬の心をよめる 皇太后宮大夫俊成

おき明す秋の別れの袖の露霜こそ結べ冬や來ぬらむ

(五五二) 天曆の御時神無月といふことを上に置きて歌つかうまつりけるに 藤原

高光

神無月風に紅葉の散る時はそこはかたなくものぞ悲しき

(五五三) 題知らず 源重之

名取川築瀬の波も騒くなり紅葉やいとど寄りて堰くらむ

(五五四) 後冷泉院の御時上のをのことも大堰川にまかりて 紅葉浮水といへる心をよみ侍りけるに 藤原資宗朝臣

筏士よ待て言問はむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ

(五五五) 後冷泉院の御時上のをのことも大堰川にまかりて 紅葉浮水といへる心をよみ侍りけるに 大納言經信

散りかゝる紅葉流れぬ大堰川いづれ井堰の水のしがらみ

(五五六) 大堰川にまかりて落葉満水といへる心をよみ侍りける 藤原家經朝臣

高瀬舟しぶくばかりにもみぢ葉の流れて下る大堰川かな

(五五七) 深山落葉といへる心を 源俊頼朝臣

日暮るれば逢ふ人もなし正木散る峰の嵐の音ばかりして

(五五八) 題知らず 藤原清輔朝臣

おのづから音するものは庭の面に木の葉吹きまく谷の夕風

(五五九) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 前大僧正慈圓

木の葉散る宿に片敷く袖の色をありとも知らでゆく嵐かな

(五六〇) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 右衛門督通具

木の葉散る時雨やまがふわが袖にもろき涙の色と見るまで

(五六一) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 藤原雅經

移りゆく雲に嵐の聲すなり散るか正木の葛城の山

(五六二) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 七條院大納言

初時雨しのぶの山のもみぢ葉を嵐吹けとは染めずやありけむ

(五六三) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 信濃

しぐれつゝ袖も干しあへずあしひきの山の木の葉に嵐吹くころ

(五六四) 春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 藤原秀能

山里の風すさまじき夕暮に木の葉亂れてものぞ悲しき

(五六五)春日社歌合に落葉といふことをよみて奉りし 祝部成茂

冬の來て山もあらはに木の葉降り残る松さへ峰に寂しき

(五六六)五十首歌奉りし時 宮内卿

唐錦秋の形見や立田山散りあへぬ枝に風吹くなり

(五六七)頼輔卿家歌合に落葉の心を 藤原資隆朝臣

時雨かと聞けば木の葉の降るものをそれにも濡るゝわが袂かな

(五六八)題知らず 法眼慶算

時しもあれ冬は葉守の神無月まばらになりぬ森の柏木

(五六九)題知らず 津守國基

いつの間に空のけしきの變るらむはげしき今朝の木枯の風

(五七〇)題知らず 西行法師

月を待つ高嶺の雲は晴れにけり心あるべき初時雨かな

(五七一)題知らず 前大僧正覺忠

神無月木々の木の葉は散り果てて庭にぞ風の音は聞ゆる

(五七二)題知らず 清輔朝臣

柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるゝ山へなるらむ

(五七三)山家時雨といへる心を 藤原隆信朝臣

雲晴れてのちもしぐるゝ柴の戸や山風はらぶ松の下露

(五七四)寛平御時后宮の歌合に 讀人しらず

神無月時雨降るらし左保山の正木のかづら色まさりゆく

(五七五)題知らず 中務卿具平親王

木枯しの音に時雨を聞き分かで紅葉に濡るゝ袂とぞ見る

(五七六)題知らず 中納言兼輔

時雨降る音はすれども呉竹のなご世とともに色も變らぬ

(五七七)十月ばかり常盤の杜を過ぐとて 能因法師

時雨の雨染めかねてけり山城の常盤の杜の槿の下葉は

(五七八)題知らず 清原元輔

冬を淺みまだき時雨と思ひしをたへざりけりな老の涙も

(五七九)鳥羽殿にて旅宿時雨といふことを 後白河院御歌

まばらなる柴の庵に旅寝して時雨に濡るゝ小夜衣かな

晴れ曇り時雨は定めなきものを古り果てぬるはわが身なりけり

(五八〇) 時雨を 前大僧正慈圓

やよ時雨もの思ふ袖のなかりせば木の葉ののちに何を染めまし

(五八八) 題知らず 俊恵法師

今はまた散らでもまがふ時雨かなひとり古りゆく庭の松風

(五八一) 冬歌中に 太上天皇

深緑あらしひかねていかならむ間なく時雨の布留の神杉

(五八九) 百首歌奉りし時 入道左大臣

み吉野の山かき曇り雪降れば麓の里はうちしぐれつゝ

(五八二) 題知らず 人麻呂

時雨の雨間なくし降れば槿の葉もあらしひかねて色づきにけり

(五九〇) 千五百番歌合に冬の歌 二條院讃岐

槿の屋に時雨の音の變るかな紅葉や深く散り積もるらむ

(五八三) 題知らず 和泉式部

世の中になほもふるかなしぐれつゝ雲間の月のいでやと思へど

(五九一) 題知らず 源信明朝臣

世に經るは苦しきものを槿の屋にやすくも過ぐる初時雨かな

(五八四) 百首歌奉りしに 二條院讃岐

折こそあれながめにかゝる浮雲の袖もひとつにうちしぐれつゝ

(五九二) 題知らず 中務卿具平親王

もみち葉をなに惜しみけむ木の間より漏り來る月は今宵こそ見れ

(五八五) 題知らず 西行法師

秋篠や外山の里やしぐるらむ膽駒の嶽に雲のかゝれる

(五九三) 題知らず 宜秋門院丹後

(五八六) 題知らず 道因法師

吹きはらふ嵐ののちの高嶺より木の葉曇らで月や出つらむ

(五九四) 春日社歌合に暁月といふことを 右衛門督通具

霜凍る袖にも影は残りけり露よりなれし有明の月

(五九五) 和歌所にて六首歌奉りしに冬歌 藤原家隆朝臣

ながめつゝいくたび袖に曇るらむ時雨に更くる有明の月

(五九六) 題知らず 源泰光

定めなくしぐるゝ空の村雲にいくたび同じ月を待つらむ

(五九七) 千五百番歌合に 源具親

今よりは木葉隠れもなければも時雨に残る村雲の月

(五九八) 題知らず 源具親

晴れ曇る影を都に先立ててしぐると告ぐる山の端の月

(五九九) 五十首歌奉りし時 寂蓮法師

たえだえに里分く月の光かな時雨を送る夜半の村雲

(六〇〇) 雨後冬月といふ心を 良暹法師

今はとて寝なましものをしぐれつる空とも見えず澄める月かな

(六〇一) 題知らず 曾禰好忠

露霜の夜半におきゐる冬夜の月見るほどに袖は凍りぬ

(六〇二) 題知らず 前大僧正慈圓

もみち葉はおのが染めたる色ぞかしょそげに置ける今朝の霜かな

(六〇三) 題知らず 西行法師

小倉山麓の里に木の葉散れば梢に晴るゝ月を見るかな

(六〇四) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

秋の色をはらひ果ててやひさかたの月の桂に木枯しの風

(六〇五) 題知らず 式子内親王

風寒み木の葉晴れゆく夜な夜なに残るくまなき庭の月影

(六〇六) 題知らず 殷富門院大輔

わが門の刈田のおもに臥す鳴の床あらはなる冬の夜の月

(六〇七) 題知らず 藤原清輔朝臣

冬枯れの森の朽葉の霜の上に落ちたる月の影の寒けさ

(六〇八) 千五百番の歌合に 皇太后宮大夫俊成女

冴えわびて覺むる枕に影見れば霜深き夜の有明の月

(六〇九) 千五百番の歌合に 右衛門督通具

霜結ぶ袖の片敷きうち解けて寝ぬ夜の月の影の寒けさ

(六一〇) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

影とめし露の宿りを思ひ出でて霜に跡訪ふ淺茅生の月

(六一一) 橋上霜といへることをよみ侍りける 法印幸清

片敷きの袖をや霜に重ぬらむ月よかるゝ宇治の橋姫

(六一二) 題知らず 源重之

夏刈の荻の古枝は枯れにけり群れるし鳥は空にやあるらむ

(六一三) 題知らず 藤原道信朝臣

さ夜更けて聲さへ寒きあしたづは幾重の霜か置きまさらむ

(六一四) 冬歌中に 太上天皇

冬の夜の長きをおくる袖濡れぬ暁方の四方の嵐に

(六一五) 百首歌奉りし時 摂政太政大臣

笹の葉はみ山もさやにうちそよぎ凍れる霜を吹く嵐かな

(六一六) 崇徳院御時百首歌奉りけるに 藤原清輔朝臣

君來ずばひとりや寝なむ笹の葉のみ山もそよにさやぐ霜夜を

(六一七) 題知らず 皇太后宮大夫俊成女

霜枯れはそこも見えぬ草の原たれに問はまし秋のなごりを

(六一八) 百首歌中に 前大僧正慈圓

霜冴ゆる山田の畔の群薄刈る人なしに残るころかな

(六一九) 題知らず 曾禰好忠

草の上にごこら玉ぬし白露を下葉の霜と結ぶ冬かな

(六二〇) 題知らず 中納言家持

鶺鴒の渡せる橋に置く霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

(六二一) 上のをのことも菊合し侍りけるついでに 延喜御歌

しぐれつゝ枯れゆく野べの花なれど霜の籬ににはふ色かな

(六二二) 延喜十四年尚侍藤原満子に菊宴賜はせける時 中納言兼輔

菊の花手折りては見し初霜の置きながらこそ色まさりけれ

(六二三) 同じ御時大堰川に行幸侍りける日 坂上是則

影さへに今はと菊のうつろふは波の底にも霜や置くらむ

(六二四) 題知らず 和泉式部

野へ見れば尾花がもとの思ひ草枯れゆく冬になりぞしにける

(六二五) 題知らず 西行法師

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり

(六二六) 崇徳院に十首歌奉りける時 大納言成通

冬深くなりにつらしな難波江の青葉まじらぬ蘆の群立ち

(六二七) 題知らず 西行法師

寂しさにたへたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里

(六二八) 東に侍りける時都の人に遣しける 康資王母

東路の道の冬草茂りあひて跡だに見えぬ忘れ水かな

(六二九) 冬歌とてよみ侍りける 守覺法親王

昔思ふさ夜の寢覺の床冴えて涙も凍る袖の上かな

(六三〇) 百首歌奉りし時 守覺法親王

立ち濡るゝ山の雫も音絶えて槇の下葉に垂氷しにけり

(六三一) 題知らず 皇太后宮大夫俊成

かつ凍りかつは砕くる山川の岩間にむせぶ暁の聲

(六三二) 題知らず 撰政太政大臣

消えかへり岩間に迷ふ水の泡のしばし宿借る薄水かな

(六三三) 題知らず 撰政太政大臣

枕にも袖にも涙つららめて結ばぬ夢を訪ふ嵐かな

(六三四) 五十首歌奉りし時 撰政太政大臣

水上やたえだえ凍る岩間より清滝川に残る白波

(六三五) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

片敷の袖の氷もむすばほれ解けて寝ぬ夜の夢ぞ短き

(六三六) 最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所 太上天皇

橋姫の片敷衣さ筵に待つ夜むなしき宇治のあけぼの

(六三七) 最勝四天王院の障子に宇治川かきたる所 前大僧正慈圓

網代木にいざよふ波の音更けてひとりや寝ぬる宇治の橋姫

(六三八) 百首歌の中に 式子内親王

見るままに冬は來にけり鴨のある入江の汀薄凍りつゝ

(六三九) 撰政太政大臣家歌合に湖上冬月 藤原家隆朝臣

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月

(六四〇) 守覺法親王家五十首歌よませ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池の氷に澄む月のやがて袖にもうつりぬるかな

(六四一) 題知らず 山邊赤人

うば玉の夜の更けゆけば楸生ふる清き川原に千鳥鳴くなり

(六四二) 左保の川原に千鳥の鳴きけるをよみ侍りける 伊勢大輔

ゆくさきはさ夜更けぬれど千鳥鳴く左保の川原は過ぎ憂かりけり

(六四三) 陸奥國にまかりける時よみ侍りける 能因法師

夕されば汐風越してみちのくの野田の玉川千鳥鳴くなり

(六四四) 題知らず 源重之

白波に羽根うちかはし濱千鳥悲しきものは夜半の一聲

(六四五) 題知らず 後徳大寺左大臣

夕風に門渡る千鳥波間より見ゆる小島の雲に消えぬる

(六四六) 堀河院に百首歌奉りけるに 祐子内親王家紀伊

浦風に吹上の濱の濱千鳥なみ立ち來らし夜半に鳴くなり

(六四七) 五十首歌奉りし時 撰政太政大臣

月ぞ澄むたれかはここにきの國や吹上の千鳥ひとり鳴くなり

(六四八) 千五百番歌合に 正三位季能

さ夜千鳥聲こそ近くなるみ瀉かたぶく月に汐や満つらむ

(六四九) 最勝四天王院の障子に鳴海の浦かきたる所 藤原秀能

風吹けばよそになるみのかた思ひ思はぬ波に鳴く千鳥かな

(六五〇) 同し所 権大納言通光

浦人の日も夕暮になるみ瀉かへる袖より千鳥鳴くなり

(六五一) 文治六年女御入内屏風に 正三位季經

風牙ゆるとしまが磯の群千鳥立ちゐは波の心なりけり

(六五二) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

はかなしやさても幾夜かゆく水に數書きわぶる鴛のひとり寝

(六五三) 堀河院に百首歌奉りける時 河内

水鳥の鴨のうき寝のうきながら波の枕に幾夜經ぬらむ

(六五四) 題知らず 湯原王

吉野なるなつみの川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山陰にして

(六五五) 題知らず 能因法師

閨の上に片枝さしおほひ外面なる葉廣柏に霰降るなり

(六五六) 題知らず 法性寺入道前關白太政大臣

ささなみや志賀の唐崎風冴えて比良の高嶺に霰降るなり

(六五七) 題知らず 人麻呂

矢田の野に淺茅色づくあち山峰の淡雪寒くぞあるらし

(六五八) 雪のあした基俊がもとへ申し遣し侍りける 瞻西上人

常よりも篠屋の軒ぞ埋るゝ今日は都に初雪や降る

(六五九) 返し 藤原基俊

降る雪にまことに篠屋いかならむ今日は都に跡だにもなし

(六六〇) 冬の歌あまたよみ侍りけるに 權中納言長方

初雪のふるの神杉埋れてしめゆふ野へは冬ごもりけり

(六六一) 思ふこと侍りけるころ初雪降り侍りける日 紫式部

ふればかく憂さのみまさる世を知らで荒れたる庭に積る初雪

(六六二) 百首歌に 式子内親王

さ笹の夜半の衣手冴え冴えて初雪白し岡のへの松

(六六三) 入道前關白右大臣に侍りける時家の歌合に雪をよめる 寂蓮法師

降り初むる今朝だに人の待たれつるみ山の里の雪の夕暮

(六六四) 雪のあした後徳大寺左大臣のもとに遣しける 皇太后宮大夫俊成

今日はもし君もや訪ふとながむればまた跡もなき庭の白雪

(六六五) 返し 後徳大寺左大臣

今ぞ聞く心は跡もなかりけり雪かき分けて思ひやれども

(六六六) 題知らず 前大納言公任

白山に年ふる雪や積るらむ夜半に片敷く袂冴ゆなり

(六六七) 夜深聞雪といふことを 刑部卿範兼

明けやらぬ寢覺めの床に聞ゆなり籬の竹の雪の下折れ

(六六八) 上のをのこども曉望山雪といへる心をつかうまつりけるに 高倉院御歌

音羽山さやかに見する白雪を明けぬと告ぐる鳥の聲かな

(六六九) 紅葉の散れりける上に初雪の降りて侍りけるを見て 上東門院にはべりける女房に遣はしける 藤原家経朝臣

山里は道もや見えずなりぬらむ紅葉とともに雪の降りぬる

(六七〇) 野亭雪をよみ侍りける 藤原國房

寂しさをいかにせよとて岡べなる櫛の葉しだり雪の降るらむ

(六七二) 百首歌奉りし時 藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮

(六七二) 撰政太政大臣大納言に侍りける時山家雪といふことをよませ侍りけるに 藤原定家朝臣

待つ人の麓の道は絶えぬらむ軒端の杉に雪重るなり

(六七三) 同じ家にて所の名を探りて冬歌よませ侍りけるに伏見里の雪を 藤原有家朝臣

夢通ふ道さへ絶えぬ呉竹の伏見の里の雪の下折れ

(六七四) 家に百首歌よませ侍りけるに 入道前關白太政大臣

降る雪に焚く藻の煙かき絶えて寂しくもあるか鹽竈の浦

(六七五) 題知らず 山邊赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつゝ

(六七六) 延喜御時歌奉れと仰せられければ 紀貫之

雪のみや降りぬとは思ふ山里にわれもおほくの年ぞ積れる

(六七七) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

雪降れば峰のまさか木埋れて月にみがける天の香具山

(六七八) 題知らず 小侍従

かき曇り天ぎる雪のふる里を積らぬさきに訪ふ人もがな

(六七九) 題知らず 前大僧正慈圓

庭の雪にわが跡つけて出でつるを訪はれにけりと人や見るらむ

(六八〇) 題知らず 前大僧正慈圓

ながむればわが山の端に雪白し都の人よあはれとも見よ

(六八一) 題知らず 曾禰好忠

冬草のかれにし人のいまさらに雪踏み分けて見えむものは

(六八二) 雪のあした大原にてよみ侍りける 寂然法師

尋ね来て道分けわぶる人もあらし幾重も積れ庭の白雪

(六八三) 百首歌の中に 太上天皇

このころは花も紅葉も枝になししばしな消えそ松の白雪

(六八四) 千五百番歌合に 右衛門督通具

草も木も降りまがへたる雪もよに春待つ梅の花の香でする

(六八五) 百首歌召したる時 崇徳院御歌

御狩する交野のみ野に降る霰あながままだき鳥もこそ立て

(六八六) 内大臣に侍りける時家の歌合に 法性寺入道前關白太政大臣

御狩すと鳥立の原をあさりつゝ片野の野べに今日も暮しつ

(六八七) 京極關白前太政大臣高陽院歌合に 前中納言匡房

御狩野はかつ降る雪に埋れて鳥立も見えず草隠れつゝ

(六八八) 鷹狩の心をよみ侍りける 左近中將公衡

狩り暮し片野のま柴折り敷きて淀の川瀬の月を見るかな

(六八九) 埋火をよみ侍りける 權僧正永縁

なかなか消えは消えなで埋火の生きてかひなき世にもあるかな

(六九〇) 百首歌奉りし時 式子内親王

日數ふる雪げにまさる炭竈の煙も寂し大原の里

(六九一) 歳暮に人に遣しける 西行法師

おのづからいはぬを慕ふ人やあるとやすらふほどに年の暮れぬる

(六九二) 年の暮によみ侍りける 上西門院兵衛

返りては身に添ふものと知りながら暮れゆく年をなに慕ふらむ

(六九三) 年の暮によみ侍りける 皇太后宮大夫俊成女

隔てゆく世々の面影かきくらし雪となりぬる年の暮かな

(六九四) 年の暮によみ侍りける 大納言隆季

新しき年やわが身にとめ來らむ隙ゆく駒に道をまかせて

(六九五) 俊成卿家に十首歌よみ侍りけるに歳暮の心を 俊恵法師

嘆きつゝ今年も暮れぬ露の命生けるばかりを思ひ出にして

(六九六) 百首歌奉りし時 小侍従

思ひやれ八十の年の暮なればいかばかりかはものは悲しき

(六九七) 題知らず 西行法師

昔思ふ庭に浮木を積み置きて見し世にも似ぬ年の暮かな

(六九八) 題知らず 摂政太政大臣

いそのかみ布留野の小笹霜を経てひと夜ばかりに残る年かな

(七〇六)千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

(六九九)題知らず 前大僧正慈圓

今日ことに今日や限りと思へどもまたも今年にあひにけるかな

年の明けて浮世の夢の覺むべくは暮るとも今日は厭はざらまし

(七〇〇)題知らず 權律師隆聖

朝ごとのあか井の水に年暮れてわが世のほどの汲まれぬるかな

(七〇一)百首歌奉りし時 入道左大臣

いそがれぬ年の暮こそあはれなれ昔はよそに聞きし春かは

(七〇二)年の暮に身の老いぬることを嘆きてよみ侍りける 和泉式部

數ふれば年の残りもなかりけり老いぬるばかり悲しきはなし

(七〇三)入道前關白百首歌よませ侍りける時歳暮の心をよみ遣しける 後徳大寺
左大臣

いはばしる初瀬の川の波枕はやくも年の暮れにけるかな

(七〇四)土御門内大臣家にて海邊歳暮といへる心をよめる 藤原有家朝臣

ゆく年ををしまの蛭の濡衣重ねて袖に波やかくらむ

(七〇五)土御門内大臣家にて海邊歳暮といへる心をよめる 寂蓮法師

老の波越えける身こそあはれなれ今年も今は末の松山

新古今集 卷第七 賀歌

君が代に逢ふべき春の多ければ散るとも櫻あくまでぞ見む

(七一四) 七條の後の宮五十賀屏風に 伊勢

(七〇七) 貢物許されて國富めるを御覽じて 仁徳天皇御歌

住の江の濱の眞砂を踏むたづは久しき跡をとむるなりけり

高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり

(七一五) 延喜御時屏風歌 紀貫之

(七〇八) 題知らず 讀人しらす

年ごとに生ひ添ふ竹の代々を経て變らぬ色をたれとかは見む

初春の初子の今日の玉簾手に取るからにゆうぐ玉の緒

(七一六) 題知らず 凡河内躬恆

(七〇九) 子の日をよめる 藤原清正

千年経る尾のへの松は秋風の聲こそ變れ色は變らず

子の日してしめつる野への姫小松引かや千代の陰を待たまし

(七一七) 題知らず 藤原興風

(七一〇) 題知らず 紀貫之

山川の菊の下水いかなれば流れて人の老を堰くらむ

君が代の年の數をば白妙の濱の眞砂とたれか敷きけむ

(七一八) 延喜御時屏風歌に 紀貫之

(七一一) 亭子院六十御賀屏風に若菜摘める所をよみ侍りける 紀貫之

祈りつゝなほ長月の菊の花いづれの秋か植ゑてみざらむ

若菜生ふる野べといふ野べを君がため萬代しめて摘まむとぞ思ふ

(七一九) 文治六年女御入内屏風歌 皇太后宮大夫俊成

(七一二) 延喜御時屏風歌 紀貫之

山人の折る袖にほふ菊の露うちはらふにも千代は經ぬべし

ゆふだすき千年をかけてあしびぎの山藍の色は變らざりけり

(七二〇) 貞信公家屏風に 清原元輔

(七二三) 祐子内親王家にて櫻を 土御門右大臣

神無月紅葉も知らぬ常磐木に萬代かゝれ峰の白雲

(七二二) 題知らず 伊勢

山風は吹けど吹かねどしら波の寄する岩根は久しかりけり

(七二二) 後一條院生れさせ給へりける九月月隈もなかりける夜に 大二條關白中將に侍りけるに時若き人々誘ひ出でて池の舟に乗せて 中島の松陰さし廻す程をかしく見え侍りければ 紫式部

曇りなく千年に澄める水の面に宿れる月の影ものどけし

(七二三) 永承四年内裏歌合に池の水といふ心を 伊勢大輔

池水の世々に久しく澄みぬれば底の玉藻も光見えけり

(七二四) 堀河院の大嘗會御禊に日ごろ雨降りて その日になりて空晴れて侍りければ紀伊典侍に申しける 六條右大臣

君が代の千年の數も隠れなく曇らぬ空の光にぞ見る

(七二五) 天喜四年皇后宮の歌合に祝の心をよみ侍りける 前大納言隆國

住の江に生ひ添ふ松の枝ごとに君が千年の數ぞこまれる

(七二六) 寛治八年關白前太政大臣高陽院歌合に祝の心を 康資王母

萬代をまつ尾山の陰茂み君をぞ祈るときはかきはに

(七二七) 後冷泉院をさなくおはましける時卯杖の松を人の子に賜はせけるによみ侍りける 大貳三位

あひおひのをしほの山の小松原今より千代の蔭を待たなむ

(七二八) 永保四年内裏子の日に 大納言經信

子の日する御垣の内の小松原千代をば外のものとやは見る

(七二九) 永保四年内裏子の日に 權中納言通俊

子の日する野べの小松を移し植えて年の緒長く君ぞ引くべき

(七三〇) 承暦二年内裏歌合に祝の心をよみ侍りける 前中納言匡房

君が代は久しかるべしわたらひや五十鈴の川の流れ絶えせで

(七三一) 題知らず 讀人しらず

常磐なる松にかゝれる苔なれば年の緒長きしるべとぞ思ふ

(七三二) 二條院御時花有喜色といふ心を人々つかまつりけるに 刑部卿範兼

君が代に逢へるはたれもうれしきを花は色にも出でにけるかな

(七三三) 同じ御時南殿の花の盛りに歌よめと仰せられければ 參河内侍

身にかへて花も惜しまじ君が代に見るべき春の限りなければ

(七三四) 百首歌奉りし時 式子内親王

天の下めぐむ草木のめもはるに限りも知らぬ御代の末々

(七三五) 京極殿にてはじめて人々歌つかうまつりしに松有春色といふことをよみ侍りし 撰政太政大臣

おしなべて木の芽もはるの淺緑松にぞ千代の色はこもれる

(七三六) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

敷島や大和島根も神代より君がためとや固め置きけむ

(七三七) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

濡れて干す玉串の葉の露霜に天照る光幾代經ぬらむ

(七三八) 祝の心をよみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

君が代は千代ともささじ天の戸や出づる月日の限りなければ

(七三九) 千五百番歌合に 藤原定家朝臣

わが道を守らば君を守るらむ齡はゆづれ住吉の松

(七四〇) 八月十五夜和歌所歌合に月多秋友といふことをよみ侍りし 寂蓮法師

高砂の松も昔になりぬべしなほゆく末は秋の夜の月

(七四一) 和歌所の開闔になりてはじめて参りし日奏し侍りし 源家長

藻鹽草かくとも盡きし君が代の數により置く和歌の浦波

(七四二) 建久七年入道前關白太政大臣宇治にて人々に歌よませ侍りけるに 前大

納言隆房

うれしさや片敷く袖につゝむらむ今日待ちえたる宇治の橋姫

(七四三) 嘉應元年入道前關白太政大臣宇治にて 河水久澄といふことを人々によませ侍りけるに 藤原清輔朝臣

年經たる宇治の橋守こと問はむ幾代になりぬ水の水上

(七四四) 日吉の禰直成仲七十賀し侍りけるに遣しける 藤原清輔朝臣

七十にみつの濱松老いぬれど千代の残りはなほぞはるけき

(七四五) 百首歌よみ侍りけるに 後徳大寺左大臣

八百日ゆく濱の眞砂を君が代の數に取らなむ沖つ島守

(七四六) 家に歌合し侍りけるに春の祝の心をよみ侍りける 撰政太政大臣

春日山都の南しかぞ思ふ北の藤波春に逢へとは

(七四七) 天曆御時大嘗會主基備中國中山 讀人しらず

常磐なる吉備の中山おしなべて千年をまつの深き色かな

(七四八) 長和五年大嘗會悠紀方風俗歌近江國朝日郷 祭主輔親

あかねさす朝日の里の日影草豊のあかりのかざしなるべし

(七四九) 永承元年大嘗會悠紀方屏風近江國守山をよめる 式部大輔資業

すべらぎを常磐かきはに守る山の山人ならし山かづらせり

(七五〇)寛治二年大嘗會屏風に鷹の尾山をよめる 前中納言匡房

とやかへる鷹の尾山の玉椿霜をばふとも色は變らじ

(七五一)久寿二年大嘗會悠紀方屏風に近江國鏡山をよめる 宮内卿永範

曇りなき鏡の山の月を見て明らけき代を空に知るかな

(七五二)平治元年大嘗會主基方辰日參入音聲生野をよめる 刑部卿範兼

大江山越えていく野の末遠み道ある世にも逢ひにけるかな

(七五三)仁安元年大嘗會悠紀歌奉りけるに稻春歌 皇太后宮大夫俊成

あふみのや坂田の稻を掛け積みて道ある御代のはじめにぞつく

(七五四)寿永元年大嘗會主基方稻春歌丹波國長田村をよめる 權中納言兼光

神代より今日のためとや八束穂に長田の稻のしなひ初めけむ

(七五五)元暦元年大嘗會悠紀歌青羽山 式部大輔光範

立ち寄れば涼しかりけり水鳥の青羽の山の松の夕風

(七五六)建久九年大嘗會主基屏風に六月松井 權中納言資實

常磐なる松井の水をむすぶ手の雲ごとにぞ千代は見えける

新古今集 卷第八 哀傷歌

(七五七) 題知らず 僧正遍昭 末の露もとの雫や世の中の後れ先立つためしなるらむ

(七五八) 題知らず 小野小町 あはれなりわが身の果てや淺緑つひには野への露と思へば

(七五九) 醍醐のみかどかくれ給ひて後彌生つごもりに三條右大臣に遣しける 中納言兼輔 櫻散る春の末にはなりにけり雨間も知らぬながめせしまに

(七六〇) 正暦二年諒闇の春櫻の枝に付けて道信朝臣に遣しける 實方朝臣 墨染のころも浮世の花盛りをり忘れても折りてけるかな

(七六一) 返し 道信朝臣 あかざりし花をや春も戀ひつらむありし昔を思ひ出でつゝ

(七六二) 彌生のころ人に後れて嘆きける人のもとへ遣しける 成尋法師 花櫻まだ盛りにて散りにけむ嘆きのもとを思ひこそやれ

(七六三) 人の櫻を植ゑ置きてその年の四月になくなりけるまたの年初めて花咲きたるを見て 大江嘉言

花見むと植ゑけむ人もなき宿の櫻は去年の春ぞ咲かまし

(七六四) 年ごろ住み侍りける女の身まかりにける 四十九日果ててなほ山里に籠りてよみ侍りける 左京大夫顕輔

たれもみな花の都に散り果ててひとりしぐるゝ秋の山里

(七六五) 公守朝臣母身まかりて後の春法金剛院の花を見て 後徳大寺左大臣

花見てはいとど家路ぞ急がれぬ待つらむと思ふ人しなれば

(七六六) 定家朝臣母の思ひに侍りける春の暮に遣しける 摂政太政大臣 春霞かすみし空のなごりさへ今日を限りの別れなりけり

(七六七) 前大納言光頼身まかりにけるを桂なる所にてとかくして歸り侍りけるに 前左兵衛督惟方

立ちのぼる煙をだにも見るべきに霞にまがふ春のあけぼの

(七六八) 六條摂政かくれ侍りて後植ゑ置きて侍りける牡丹の 咲きて侍りけるを 祈りて女房の元より遣して侍りければ 太宰大貳重家

形見とて見れば嘆きのふかみ草になかなかのにほひなるらむ

(七六九) 稚き子の失せにけるが植ゑ置きたりける菖蒲を見てよみ侍りける 高陽院木綿四手

あやめ草たれしのべとか植ゑ置きて蓬がもとの露と消えけむ

(七七〇) 嘆くこと侍りける五月五日人のもとへ申し遣しける 上西門院兵衛 今日来れどあやめも知らぬ袂かな昔を戀ふるねのみかゝりて

(七七二) 近衛院かくれ給ひにければ世を背きて後五月五日皇嘉門院に奉られける 九條院

あやめ草ひきたがへたる袂には昔を戀ふるねぞかりける

子女王

(七七二) 御返し 皇嘉門院

袖にさへ秋の夕べは知られけり消えし淺茅が露をかけつゝ

さもこそはおなじ袂の色ならめ變らぬねをもかけてけるかな

(七七九) 例ならぬこと重くなりて御くしおろし給ひける 日上東門院中宮と申しける時遣しける 一條院御歌

(七七三) 住み侍りける女なくなりけるころ藤原爲頼朝臣妻身まかりけるに遣しける 小野宮右大臣

秋風の露の宿りに君を置きて塵を出でぬることぞ悲しき

よそなれどおなじ心ぞ通ふべきたれも思ひのひとつならねば

(七八〇) 秋のころをさなき子に後れたる人に 大貳三位

(七七四) 返し 藤原爲頼朝臣

ひとりにもあらぬ思ひはなき人も旅の空にや悲しかるらむ

(七八一) 返し 讀人しらず

(七七五) 小式部内侍露置きたる萩織りたる唐衣を着て侍りけるを 身まかりて後

置き添ふる露とともに消えもせて涙にのみも浮き沈むかな

上東門院より尋ねさせ給ひけるに奉るとて 和泉式部

(七八二) 廉義公の母なくなりて後女郎花を見て 清慎公

置くと見し露もありけりはかなくて消えにし人をなにしたとへむ

女郎花見るに心はなぐさまでいとど昔の秋ぞ戀ひしき

(七七六) 御返し 上東門院

思ひきやはかなく置きし袖の上の露をかたみにかけむものとは

(七八三) 弾正尹爲尊親王に後れて嘆き侍りけるころ 和泉式部

(七七七) 白河院御時中宮おはしまさで後その御方は草のみ茂りて 侍りけるに七

寢覺する身を吹き通す風の音を昔は袖のよそに聞きけむ

月七日童べの露取り侍りけるを見て 周防内侍

(七八四) 従一位源師子かくれ侍りて宇治より新少將がもとに遣しける 知足院入

淺茅原はかなく置きし草の上の露を形見と思ひがけきや

道前關白太政大臣

袖濡らす萩の上葉の露はかり昔忘れぬ蟲の音ぞする

(七七八) 一品資子内親王に逢ひて昔のことども申し出でてよみ侍りける 女御徽

(七八五) 法輪寺に詣で侍るとて嵯峨野に大納言忠家が墓の 侍りけるもとにまかりてよみ侍りける 權中納言俊忠

さらでだに露けきさがの野べに来て昔の跡にしをれぬるかな

(七八六) 公時卿母身まかりて嘆き侍りけるころ大納言實國のもとに申し遣しける

後徳大寺左大臣

悲しさは秋のさが野のきりぎりすなほ故郷に音をや鳴くらむ

(七八七) 母の身まかりにけるを嵯峨のほとりにをさめ侍りける夜よみける 皇太后宮大夫俊成女

今はさは憂き世のさがの野べをこそ露消え果てし跡としのばめ

(七八八) 母身まかりにける秋野分しける日もと住み侍りける所にまかりて 藤原定家朝臣 玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人戀ふる宿の秋風

(七八九) 父秀宗身まかりての秋寄風懷舊といふことをよみ侍りける 藤原秀能

露をだに今は形見の藤衣あだにも袖を吹く風かな

(七九〇) 久我内大臣春のころ失せて侍りける年の秋土御門内大臣中将に侍りける

時遣しける 殷富門院大輔

秋深き寢覺にいかが思ひ出づるはかなく見えし春の夜の夢

(七九一) 返し 土御門内大臣

見し夢を忘るゝ時はなけれども秋の寢覺はげにぞ悲しき

(七九二) 忍びてもの申しける女身まかりて後その家に泊りてよみ侍りける 大納言實家

なれし秋の更けし夜床はそれながら心の底の夢ぞ悲しき

(七九三) 陸奥國へまかれりける野中に目にたつさまなる塚の 侍りけるを問はせて侍りければ是なむ中将の塚と申すと答へければ 中将とはいずれの人ぞと問ひ侍りければ實方朝臣のこととなむ申しけるに 冬のことにて霜枯れの薄ほのぼの見えわたりて折ふし物悲しくおぼえ侍りければよめる

西行法師

朽ちもせぬその名ばかりをとどめ置きて枯野の薄形見にぞ見る

(七九四) 同行なりける人うち續きはかなくなりければ思ひ出でてよめる 前大僧正慈圓

故郷を戀ふる涙やひとりゆく友なき山の道芝の露

(七九五) 母の思ひに侍りける秋法輪寺に籠りて嵐のいたく吹きければ 皇太后宮大夫俊成

憂き世には今は嵐の山風にこれやなれゆくはじめなるらむ

(七九六) 定家朝臣母身まかりて後秋の頃墓所近き堂に泊りてよみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

まれに来る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に聞くらむ

(七九七) 堀河院かくれ給ひて後神無月風の音あはれに聞えければ 久我太政大臣

もの思へば色なき風もなかりけり身にしむ秋の心ならひに

(七九八) 藤原定通身まかりて後月あかき夜の人の夢に殿上になむ侍るとてよみ侍りける歌

故郷を別れし秋を数ふれば八年になりぬ有明の月

(七九九) 源為義朝臣身まかりにけるまたの年月を見て 能因法師

命あれば今年の秋も月は見つ別れし人に逢ふよなきかな

(八〇〇) 世中はかなく人々多くなり侍りける頃中將宣方朝臣 身まかりて十月ばかり白川の家にかかりけるに紅葉の紅葉残れるを見つけて 前大納言公任

今日来ずば見でややままし山里の紅葉も人も常ならぬ世に

(八〇一) 十月ばかり水無瀬に侍りし頃前大僧正慈圓のもとへ 濡れて時雨のなど申し遣して次の年の神無月無常の歌あまたよみて遣し侍りし中に 太上天皇

思ひ出づる折り焚く柴の夕煙むせぶもつれし忘れがために

(八〇二) 返し 前大僧正慈圓

思ひ出づる折り焚く柴と聞くからに亂れ知られぬ夕煙かな

(八〇三) 雨中無常といふことを 太上天皇

なき人の形見の雲やしぐらむ夕への雨に色は見えねど

(八〇四) 枇杷皇太后宮かくれて後十月ばかりかの宮の人々の中に誰ともなくてさし置かせける 相模

神無月しぐるゝころもいかなれや空に過ぎにし秋の宮人

(八〇五) 右大將通房身まかりて後手習ひすさびて侍りける扇を見出してよみ侍りける 土御門右大臣女

手すさびのはかなき跡と見しかども長き形見となりけるかな

(八〇六) 齋宮女御のもとにて先帝の書かせ給へりける草子を見侍りて 馬内侍

尋ねても跡はかくてもみづくきのゆくへも知らぬ昔なりけり

(八〇七) 返し 女御徽子女王

古へのなきにながるゝ水茎は跡こそ袖のうらに寄りけれ

(八〇八) 恆徳公かくれて後女の許に月あかき夜忍びてまかりてよみ侍りける 藤原道信朝臣

干しもあへぬ衣の闇にくらされて月ともいはず迷ひぬるかな

(八〇九) 入道摂政のために萬燈會おこなはれ侍りけるに 東三條院

水底に千々の光は映れども昔の影は見えずぞありける

(八一〇) 公忠朝臣身まかりにけるころよみ侍りける 源信明朝臣

ものをのみ思ひ寝覺めの枕には涙かゝらぬ暁ぞなき

(八一) 一條院かくれ給ひければその御事をのみ戀ひ嘆き給ひて夢にほのかに見え給ひければ 上東門院

逢ふことも今はなき寝の夢ならでいつかは君をまたは見るべき

(八二) 後朱雀院かくれ給ひて上東門院白川に籠り給ひにけるを聞きて 女御藤原生子

憂しとは出でにし家を出でぬなりなど故郷にわが歸りけむ

(八三) をさなかりける子の身まかりにけるに 源道濟

はかなしといふにもいとど涙のみかゝるこの世を頼みけるかな

(八四) 後一條院中宮かくれ給ひて後人の夢に

故郷にゆく人もがな告げやらむ知らぬ山路にひとりまどふと

(八五) 小野宮右大臣身まかりぬと聞きてよめる 權大納言長家

玉の緒の長きために引く人も消ゆれば露にことならぬかな

(八六) 小式部内侍身まかりて後常にもちて侍りける手箱を誦經にせさすとよみ侍りける 和泉式部

戀ひわぶと聞きにだに聞け鐘の音にうち忘らるゝ時の間ぞなき

(八一七) 上東門院小少將身まかりて後常にうち解けて書き遣しける文の物の中に侍りけるを見出でて加賀少納言がもとに遣しける 紫式部

たれか世に長らへて見む書きとめし跡は消えせぬ形見なれども

(八一八) 返し 加賀少納言

なき人をしのぶることもいつまでぞ今日のあはれは明日のわが身を

(八一九) 僧正明尊かくれて後久しくなりて房なども石藏に取り渡して 草生ひ茂りてことざまになりけるを見て 律師慶暹

なき人の跡をだにとて来て見ればあらぬ里にもなりにけるかな

(八二〇) 世のはかなきことを嘆く頃陸奥國に名ある所々かきたる繪を見侍りて 紫式部

見し人の煙になりし夕べより名もむつまじき鹽竈の浦

(八二一) 後朱雀院かくれ給ひてのち源三位がもとに遣しける 辨乳母

あはれ君いかなる野への煙にてむなしき空の雲となりけむ

(八二二) 返し 源三位

思へ君燃えし煙にまがひなで立ちおくれたる春の霞を

(八二三) 大江嘉言対馬守になりて下るとて難波堀江の蘆のうら葉にとよみて下り侍りける程に國にてなくなりけると聞きて 能因法師

あはれ人今日の命を知らませば難波の蘆に契らざらまし

(八二四) 題知らず 大江匡衡朝臣

夜もすがら昔のことを見つるかな語るやうつゝありし世や夢

(八二五) 俊頼朝臣身まかりて後帝に見ける鏡を佛に作らせ侍るとてよめる 新少將

うつりけむ昔の影や残るとて見るに思ひのます鏡かな

(八二六) 通ひける女のはなくなり侍りける頃書き置きたる文ども經の料紙にな
さむとて取り出でて見侍りけるに 按察使公通 書きとむる言の葉のみ
ぞ水茎の流れととまる形見なりける

(八二七) 禊子内親王かくれ給ひて後宗子内親王かはりぬ侍りぬと聞きてまかりて
見れば何事も變らぬやうに侍りけるもいと昔思ひ出られて女房に申し
侍りける 中院右大臣

有栖河おなじ流れは變らねど見しや昔の影ぞわすれぬ

(八二八) 權中納言通家の母かくれ侍りにける秋撰政太政大臣のもとに遣しける
皇太后宮大夫俊成

限りなき思ひのほどの夢の中はおどろかされじと嘆き來しかな

(八二九) 返し 撰政太政大臣

見し夢にやがてまぎれぬわが身には問はるゝ今日もまつ悲しけれ

(八三〇) 母の思ひに侍りける頃又なくなりける人のあたりより問ひて侍りけれ
ば遣しける 藤原清輔朝臣

世の中は見しも聞きしもはかなくてむなしき空の煙なりけり

(八三一) 無常の心を 西行法師

いつ嘆きいつ思ふべきことなれば後の世知らで人の過ぐらむ

(八三二) 無常の心を 前大僧正慈圓

みな人の知り顔にして知らぬかなならず死ぬるならひありとは

(八三三) 無常の心を 前大僧正慈圓

昨日見し人はいかにと驚けばなほ長き夜の夢にぞありける

(八三四) 無常の心を 前大僧正慈圓

蓬生にいつか置くべき露の身は今日の夕暮明日のあけぼの

(八三五) 無常の心を 前大僧正慈圓

われもいつぞあましかばと見し人をしのぶとすればいとど添ひゆく

(八三六) 前參議教長高野に籠りゐて侍りけるが病限りになりぬと聞きて
まかりける程に身まかりぬと聞きて遣しける 寂蓮法師 頼輔卿

尋ね來ていかにあはれとながむらむ跡なき山の峰の白雲

(八三七) 人に後れて嘆きける人に遣しける 西行法師

なき跡の面影をのみ身に添へてさこそは人の戀ひしかるらむ

(八三八) 嘆くこと侍りける人間はずと恨み侍りければ 西行法師

あはれとも心に思ふほどばかりいはれぬべくは訪ひこそはせめ

(八三九) 無常の心を 入道左大臣

つくづくと思へば悲しいつまでか人のあはれをよそに聞くべき

(八四〇) 左近中将通宗が墓所にまかりてよみ侍りける 土御門内大臣

後れめて見るぞ悲しきはかなさを憂き身の跡になに頼みけむ

(八四一) 覺快法親王かくれ侍りて周忌の果てに墓所にまかりてよみ侍りける 前
大僧正慈圓

そこはかと思ひつづけて来て見れば今年の今日も袖は濡れけり

母のために粟田口の家にて佛供養し侍りける時はらからみなまつて來合
ひて古き面影など更にしのび侍りける折りしも雨かきくらし降り侍りけ
れば歸るとてかの堂の障子に書きつけ侍りける 右大將忠經

(八四二) 母のために粟田口の家にて佛供養し侍りける時はらからみなまつて來合
ひて古き面影など更にしのび侍りける折りしも雨かきくらし降り侍りけ
れば歸るとてかの堂の障子に書きつけ侍りける 右大將忠經

たれもみな涙の雨に堰きかねぬ空もいかがはつれなかるべき

なくなりたる人の數を卒塔婆に書いて歌よみ侍りける 法橋行遍

(八四三) なくなりたる人の數を卒塔婆に書いて歌よみ侍りける 法橋行遍

見し人は世にもなきさの藻汐草書き置きたびに袖ぞしをるゝ

(八四四) 子の身まかりにける次の年の夏かの家にまかりたりけるに花橘の薫りけ
ればよめる 祝部成仲

あらざらむ後しのべとや袖の香を花橘にとどめ置きけむ

(八四五) 能因法師身まかりて後よみ侍りける 藤原兼房朝臣

ありし世にしばしも見ではなかりしをあはれとばかりいひてやみぬる

(八四六) 妻なくなりて又の年の秋の頃周防内侍がもとへ遣しける 權中納言通俊

問へかしの片敷く藤の衣手に涙のかゝる秋の寢覺めを

(八四七) 堀河院かくれ給ひて後よめる 權中納言國信

君なくてよる方もなき青柳のいとど憂き世ぞ思ひ亂るゝ

(八四八) 通ひける女山里にてはなくなりければ徒然と籠りめて侍りけるがあ
からさまに京へまかりて暁歸るに鳥鳴きぬと人々急がし侍りければ 權
中納言國信

いつの間に身を山賊になし果てて都を旅と思ふなるらむ

奈良の御門を納め奉りけるを見て 人麻呂

(八四九) 奈良の御門を納め奉りけるを見て 人麻呂

ひさかたのあめにしをるゝ君ゆゑに月日も知らで戀ひわたるらむ

(八五〇) 題知らず 小野小町

あるはなくなきは數添ふ世の中にあはれいつれの日まで嘆かむ

(八五一) 題知らず 在原業平朝臣

白玉かなにぞと人の問ひしとき露と答へて消なましものを

(八五二)更衣の服にて参れりけるを見給ひて 延喜御歌

年経ればかくもありけり墨染のこは思ふてふそれかあらぬか

(八五三)思ひにて人の家に宿れりけるをその家に忘草の多く侍りければあるじに
遣しける 中納言兼輔

なき人をしのびかねては忘草多かる宿に宿りをぞする

(八五四)病に沈みて久しく籠りゐて侍りけるが偶よろしうなりて 内に参りて右
大辯公忠藏人に侍りけるに 逢ひて又あさてばかり参るべきよし申して
まかり出でにけるままに 病重くなりて限りに侍りければ公忠朝臣に遣
しける 藤原季繩

くやしくぞ後に逢はむと契りける今日を限りといはましものを

(八五五)母の女御かくれ侍りて七月七日よみ侍りける 中務卿具平親王

墨染の袖は空にも貸さなくにしほりもあへず露ぞこぼるゝ

(八五六)失せにける人の文の物の中なるを見出でてそのゆかりなる人の許に遣し
ける 紫式部

暮れぬ間の身をば思はで人の世のあはれを知るぞかつははかなき

新古今集 卷第九 離別歌

ける 讀人しらず

きならせと思ひしものを旅衣立つ日も知らずなりにけるかな

(八五七) 陸奥國に下りける人に装束贈るとてよみ侍りける 紀貫之

(八六四) 返し 寂昭上人

たまほこの道の山風寒からば形見がてらに著なむとぞ思ふ

これやさは雲のはたてに織ると聞きたつこと知らぬ天の羽衣

(八五八) 題知らず 伊勢

(八六五) 題知らず 源重之

忘れなむ世にも越路の歸る山いつはた人に逢はむとすらむ

衣河見なれし人の別れには袂までこそ波は立ちけれ

(八五九) 淺からず契りける人のゆき別れ侍りけるに 紫式部

(八六六) 陸奥國の介にてまかりける時範永朝臣のもとに遣しける 高階經重朝臣

北へゆく雁のつばさにことづてよ雲のつはがき書き絶えずして

ゆく末にあぶくま川のなかりせばいかにかせまし今日の別れを

(八六〇) 田舎へまかりける人に旅衣遣はすとて 大中臣能宣朝臣

(八六七) 返し 藤原範永朝臣

秋霧の立つ旅衣置きて見よつゆばかりなる形見なりとも

君にまたあぶくま川を待つべきに残りすくなきわれぞ悲しき

(八六一) 陸奥國に下り侍りける人に 紀貫之

(八六八) 大宰師隆家下りけるに扇賜ふとて 枇杷皇太后宮

見てだにもあかぬ心をたまほこの道の奥まで人のゆくらむ

涼しさはいきの松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ

(八六二) 逢坂の關近きわたりに住み侍りけるに遠き所にまかりける人に餞し侍る

(八六九) 亭子院宮の滝御覽じにおはしましけるに御共に素性法師召し具せられて

とて 中納言兼輔

参りけるを住吉の郡にていとま給はりて大和に遣しけるによみ侍りける

逢坂の關にわが宿なかりせば別るゝ人は頼まざらまし

る 一條右大臣恆佐

(八六三) 寂昭上人入唐し侍りけるに装束贈りけるに立ちけるを知らで追ひて遣し

神無月まれの御幸に誘はれで今日別れなばいつか逢ひ見む

(八七〇) 題知らず 大江千里

別れてのちも逢ひ見むと思へどもこれをいつれの時とかは知る

(八七一) 成尋法師入唐し侍りけるに母のよみ侍りける

もろこしも天の下にぞあると聞く照る日の本を忘れざらむ

(八七二) 修行に出で立つとて人のもとに遣しける 道命法師

別れ路はこれや限りの旅ならむさらにいくべき心地こそせね

(八七三) 老いたる親の七月七日筑紫へ下りけるに遙に離れぬる事を思ひて 八日

の暁追ひて舟に乗る所に遣しける 加賀左衛門

天の川空に聞えし舟出にはわれぞまさりて今朝は悲しき

(八七四) 實方朝臣の陸奥國へ下り侍りけるに饑すとてよみ侍りける 中納言隆家

別れ路はいつも嘆きの絶えせぬにいとど悲しき秋の夕暮

(八七五) 返し 藤原實方朝臣

とどまらむことは心になへどもいかにかせまし秋の誘ふを

(八七六) 七月ばかり美作へ下るとて都の人に遣しける 前中納言匡房

都をば秋とともにぞ立ち初めし淀の川霧幾夜へだつな

(八七七) みこの宮と申しける時太宰大貳實政学士にて侍りける甲斐守にて下り侍

りけるに饑賜はすとて 後三條院御歌

思ひ出ではおなじ空とは月を見よほどは雲居にめぐり逢ふまで

(八七八) 陸奥國の守基頼の朝臣久しく逢ひ見ぬよし申していつ上るべしと言は

ず侍りければ 藤原基俊

歸り來むほど思ふにも武隈のまつわが身こそいたく老いぬれ

(八七九) 修行に出で侍りけるによめる 大僧正行尊

思へども定めなき世のはかなさにいつを待てともえこそ頼めね

(八八〇) にはかに都を離れて遠くまかりにけるに女に遣しける 讀人しらす

契り置くことこそさらになかりしかゝねて思ひし別れならねば

(八八一) 別れの心をよめる 俊恵法師

かりそめの別れと今日を思へども今やまことの旅にもあるらむ

(八八二) 別れの心をよめる 登蓮法師

歸り來むほどをや人に契らまししのばれぬべきわが身なりせば

(八八三) 守覺法親王五十首歌よませ侍りける時 藤原隆信朝臣

たれとしも知らぬ別れの悲しきは松浦の沖を出づる舟人

(八八四) 登蓮法師筑紫へまかりけるに 俊恵法師

はるばると君が分くべき白波をあやしやとまる袖にかけつる

忘るなよ宿る袂は變るともかたみにしぼる夜半の月影

(八八五) 陸奥國へまかりける人に饒し侍りけるに 西行法師

(八九二) 都の外へまかりける人によみて贈りける 惟明親王

君いなば月待つともながめやらむ東の方の夕暮の空

なごり思ふ袂にかねて知られけり別るゝ旅のゆく末の露

(八八六) 遠き所に修行せむとて出で立ち侍りけるに人々に別れ惜しみてよみ侍り

(八九三) 筑紫へまかりける女に月いだしたる扇を遣はすとて 讀人しらす

ける 西行法師

頼め置かむ君も心や慰むと歸らむことはいつとなくとも

都をば心を空に出でぬとも月見むたびに思ひおこせよ

(八八七) 遠き所に修行せむとて出で立ち侍りけるに人々に別れ惜しみてよみ侍り

(八九四) 遠き國へまかりける人に遣しける 大藏卿行宗

ける 西行法師

別れ路は雲居のよそになりぬともそなたの風のたより過ぐすな

さりとともなほ逢ふことを頼むかな死出の山路を越えぬ別れは

(八九五) 人の國へまかりける人に狩衣遣はすとてよめる 藤原顕綱朝臣

(八八八) 遠き所へまかりける時師光饒し侍りけるによめる 道因法師

色深く染めたる旅のかりごろもかへらむまでの形見とも見よ

歸り來むほどを契らむと思へども老いぬる身こそ定めがたけれ

(八八九) 題知らず 皇太后宮大夫俊成

かりそめの旅の別れと忍ぶれど老は涙もえこそとどめね

(八九〇) 題知らず 祝部成仲

別れにし人はまたもやみわの山すぎにし方を今になさばや

(八九一) 題知らず 藤原定家朝臣

新古今集 卷第十 羈旅歌

朝霧に濡れにし衣干さずしてひとりや君が山路越ゆらむ

(八九六)和銅三年三月藤原の宮より奈良の宮にうつらせ給ひける時 元明天皇御歌

飛ぶ鳥の飛鳥の里を置きて往なば君があたりは見えずかもあらむ

(九〇三)東の方にまかりけるに淺間の嶽に煙の立つを見てよめる 在原業平

(九〇四)駿河の國宇津の山に逢へる人につけて京に遣しける 在原業平

(八九七)天平十二年十月伊勢國に行幸し給ひける時 聖武天皇御歌

妹に戀ひわか松原見わたせば汐の干潟にたづ鳴きわたる

駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人に逢はぬなりけり

(九〇五)延喜御時屏風の歌 紀貫之

(八九八)もろこしにてよみ侍りける 山上憶良

いざ子どもはや日の本へ大伴の三津の濱松待ち戀ひぬらむ

草枕夕風寒くなりけり衣打つなる宿や借らまし

(九〇六)題知らず 紀貫之

(八九九)題知らず 人麻呂

天さかる鄙の長路を漕ぎ來れば明石のとより大和島見ゆ

白雲のたなびきわたるあしひきの山の掛橋今日や越えなむ

(九〇七)題知らず 壬生忠岑

(九〇〇)題知らず 人麻呂

笹の葉はみ山もそよに亂るなりわれは妹思ふ別れ來ぬれば

東路やさやの中山さやかにも見えぬ雲居に世をや盡くさむ

(九〇一)帥の任果てて筑紫より上り侍りけるに 大納言旅人

(九〇八)伊勢より人に遣しける 女御徽子女王

人をなほ恨みつべしや都鳥ありやとだにも問ふを聞かねば

ここにありて筑紫やいづこ白雲のたなびく山の西にぞあるらし

(九〇九)題知らず 菅原輔昭

(九〇二)題知らず 讀人しらす

まだ知らぬ故郷人は今日までに來むと頼めしわれを待つらむ

(九一〇) 題知らず 讀人しらず

しなが鳥猪名野をゆけば有馬山夕霧立ちぬ宿はなくして

(九一一) 題知らず 讀人しらず

神風の伊勢の濱荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き濱へに

(九一二) 亭子院御ぐしおろして山々寺々に修行し給ひける頃御供に侍りて 和泉

國日根といふ所にて人々歌よみ侍りけるによめる 橘良利

故郷の旅寝の夢に見えつるは恨みやすらむまたと訪はねば

(九一三) 信濃のみ坂のかたかきたる繪に園原といふ所に旅人宿りて立ち明したる

所を 藤原輔尹朝臣

立ちながら今宵は明けぬ園原や伏屋といふもかひなかりけり

(九一四) 題知らず 御形宣旨

都にて越路の空をながめつゝ雲居といひしほどに來にけり

(九一五) 入唐し侍りける時いつほどにか歸るべきと人の問ひ侍りければ 法橋て

う然

旅衣立ちゆく波路遠ければいさしら雲のほども知られず

(九一六) 敷津の浦にまかりて遊びけるに舟に泊りてよみ侍りける 藤原實方朝臣

舟ながら今宵ばかりは旅寝せむ敷津の浦に夢は覺むとも

(九一七) いそのへちの方に修行し侍りけるに一人具したりける、同行を尋ね失ひ

てもとの岩屋の方へ歸るとてあま人の見えけるに、修行者見えばこれを
取らせよとてよみ侍りける 大僧正行尊

わがごとくわれを尋ねばあまを舟人もなぎさの跡と答へよ

(九一八) 湖の舟にて夕立のしめべきよし申しけるを聞きてよみ侍りける 紫式部

かき曇り夕立つ波の荒ければ浮きたる舟ぞしづ心なき

(九一九) 天王寺に参りけるに難波の浦に泊りてよみ侍りける 肥後

さ夜更けて蘆の末越す浦風にあはれうちそふ波の首かな

(九二〇) 旅の歌とてよみ侍りける 大納言經信

旅寝して暁方の鹿の音に稲葉おしなみ秋風ぞ吹く

(九二一) 旅歌とてよみ侍りける 惠慶法師

わきも子が旅寝の衣薄きほどよぎて吹かなむ夜半の山風

(九二二) 後冷泉院御時上のをのことも旅の歌よみ侍りけるに 左近中将隆綱

蘆の葉を刈り茸く賤の山里に衣片敷き旅寝をぞする

(九二三) 頼み侍りける人に後れて後初瀬に詣でて夜泊りたりける所に 草を結び

て枕にせよとて人のたび侍りければよみ侍りける 赤染衛門

ありし世の旅は旅ともあらざりきひとり露けき草枕かな

(九二四) 堀河院百首の歌に 權中納言國信

山路にてそばちにけりな白露の暁おきの木々の雲に

(九二五) 堀河院百首の歌に 大納言師頼

草枕旅寝の人は心せよ有明の月もかたぶきにけり

(九二六) 水邊旅宿といへる心をよめる 源師賢朝臣

磯なれぬ心ぞたへぬ旅寝する蘆の丸屋にかゝる白波

(九二七) 田上にてよみ侍りける 大納言經信

旅寝する蘆の丸屋の寒ければ爪木こり積む舟急くなり

(九二八) 題知らず 大納言經信

み山路に今朝や出でつる旅人の笠白妙に雪積りつゝ

(九二九) 旅宿の雪といへる心をよみ侍りける 修理大夫顯季

松が根に尾花刈り敷き夜もすがら片敷く袖に雪は降りつゝ

(九三〇) 陸奥國に侍りける頃八月十五夜に京を思ひ出でて大宮の女房のもとに遣

しける 橘爲仲朝臣

見し人も十布の浦風音せぬにつれなく澄める秋の夜の月

(九三一) 關戸の院といふ所にて霧中見月といふ心を 大江嘉言

草枕ほどぞ經にける都出でて幾夜か旅の月に寝ぬらむ

(九三二) 守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の歌 皇太后宮大夫俊成

夏刈りの蘆のかりねもあはれなり玉江の月の明け方の空

(九三三) 守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の歌 皇太后宮大夫俊成

立ち歸りまたも來て見む松島や雄島の苦屋波に荒すな

(九三四) 守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の歌 藤原定家朝臣

こと問へよ思ひおきつの濱千鳥泣く泣く出でし跡の月影

(九三五) 守覺法親王家に五十首歌よませ侍りけるに旅の歌 藤原家隆朝臣

野への露浦わの波をかこちても行方も知らぬ袖の月影

(九三六) 旅歌とてよめる 撰政太政大臣

もろともに出でし空こそ忘れね都の山の有明の月

(九三七) 題知らず 西行法師

都にて月をあはれと思ひしは數にもあらぬさびなりけり

(九三八) 題知らず 西行法師

月見ばと契りていでし故郷の人も今宵袖濡らすらむ

(九三九)五十首歌奉りし時 家隆朝臣

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空ゆく月の末の白雲

(九四〇)五十首歌奉りし時 藤原雅經

故郷の今日の面影誘ひ來と月にぞ契るさよの中山

(九四一)和歌所月十首歌合の次に月前旅といへる心を人々つかうまつりに 撰

政太政大臣 忘れじと契りて出でし面影は見ゆらむものを故郷の月

(九四二)旅の歌とてよみ侍りける 前大僧正慈圓

東路の夜半のながめを語らなむ都の山にかゝる月影

(九四三)海濱重、夜といへる心をよみ侍りし 越前

幾夜かは月をあはれと詠め來て波に折り敷く伊勢の濱荻

(九四四)百首歌奉りし時 宜秋門院丹後

知らざりし八十瀬の波を分け過ぎて片敷くものは伊勢の濱荻

(九四五)題知らず 前中納言匡房

風寒み伊勢の濱荻分けゆけば衣かりがね波に鳴くなり

(九四六)題知らず 權中納言定頼

磯なれで心も解けぬ孤枕荒くなかけそ水の白波

(九四七)百首歌奉りし時 式子内親王

ゆく末はいま幾夜とかいはしろの岡の菅根に枕結はむ

(九四八)百首歌奉りし時 式子内親王

松が根の雄鳥が磯のさ夜枕いたくな濡れそ蜚の袖かは

(九四九)千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

かくても明かせば幾夜過ぎぬらむ山路の苔の露の筵に

(九五〇)旅にてよみ侍りける 權僧正永縁

白雲のかゝる旅寝もならはぬに深き山路に日は暮れにけり

(九五二)暮望行客といへる心を 大納言經信

夕日さす淺茅が原の旅人はあはれいづくに宿を借るらむ

(九五三)撰政太政大臣家歌合に羈中晚嵐といふことをよめる 藤原定家朝臣

いづくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮の峰の嵐に

(九五三)旅の歌とてよめる 藤原定家朝臣

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日寂しき山の掛橋

(九五四)旅の歌とてよめる 藤原家隆朝臣

故郷に聞きし嵐の聲も似ず忘れぬ人をさやの中山

(九五五) 旅の歌とてよめる 藤原雅經

白雲の幾重の峰を越えぬらむなれぬ嵐に袖をまかせて

(九五六) 旅の歌とてよめる 源家長

今日はまた知らぬ野原にゆき暮れぬいづれの山か月は出づらむ

(九五七) 和歌所歌合に羈中暮といふことを 皇太后宮大夫俊成女

故郷も秋は夕べを形見とて風のみ送る小野の篠原

(九五八) 和歌所歌合に羈中暮といふことを 藤原雅經朝臣

いたづらに立つや浅間の夕煙里問ひかぬるをちこちの山

(九五九) 和歌所歌合に羈中暮といふことを 宜秋門院丹後

都をば天つ空とも聞かざりきにながむらむ雲のはたてを

(九六〇) 和歌所歌合に羈中暮といふことを 藤原秀能

草枕夕べの空を人間はば鳴きても告げよ初雁の聲

(九六一) 旅の心を 藤原有家朝臣

臥しわびぬしのを笹の假枕はかなの露や一夜ばかりに

(九六二) 石清水歌合に旅宿嵐といふことを 藤原有家朝臣

岩が根の床に嵐を片敷きてひとりや寝なむさよの中山

(九六三) 旅の歌とて 藤原業清

たれとなき宿の夕を契りにて變るあるじを幾夜訪ふらむ

(九六四) 羈中夕といふ事を 鴨長明

枕とていづれの草に契るらむゆくを限りの野への夕暮

(九六五) 東の方へまかりける道にてよみ侍りける 民部卿成範

道のへの草の青葉に駒とめてなほ故郷をかへりみるかな

(九六六) 長月のころ初瀬に詣でける道にてよみ侍りける 禅性法師

初瀬山夕越え暮れて宿問へば三輪の檜原に秋風ぞ吹く

(九六七) 旅の歌とてよめる 藤原秀能

さらぬだに秋の旅寝は悲しきに松に吹くなりこの山風

(九六八) 撰政太政大臣家歌合に秋旅といふことを 藤原定家朝臣

忘れなむ待つとな告げそなかなに因幡の山の峰の秋風

(九六九) 百首歌奉りし時旅歌 藤原家隆朝臣

契らねど一夜は過ぎぬ清見瀉波に別るゝ暁の雲

(九七〇)千五百番歌合に 藤原家隆朝臣

故郷に頼めし人も末の松待つらむ袖に波や越すらむ

(九七一)歌合し侍りける時旅の心をよめる 入道前關白太政大臣

日を経つゝ都しのぶのうらさびて波よりほかのおとづれもなし

(九七二)堀河院御時百首歌奉りける時旅歌 藤原顕仲朝臣

さすらふるわが身にしあれば象瀉や蜚の苦屋にあまたたび寝ぬ

(九七三)入道前關白家百首歌に旅の心を 皇太后宮大夫俊成

難波人蘆火焚く屋に宿借りてすすろに袖の汐垂るゝかな

(九七四)題知らず 僧正雅縁

また越えむ人も泊らばあはれ知れわが折り敷ける峰の椎柴

(九七五)題知らず 前右大將頼朝

道すがら富士の煙も分かざりき晴るゝ間もなさ空のけしきに

(九七六)述懐百首歌よみ侍りけるに旅歌 皇太后宮大夫俊成

世の中は憂きふししげし篠原や旅にしあれば妹夢に見ゆ

(九七七)千五百番歌合に 宣秋門院丹後

おぼつかぬ都に住まぬ都鳥言問ふ人にいかが答へし

(九七八)天王寺に参り侍りけるに俄に雨降りければ 江口に宿を借りけるに貸し

侍らざりければよみ侍りける 西行法師

世の中をいとふまでこそ難からめ假のやどりを惜しむ君かな

(九七九)返し 遊女妙

世をいとふ人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ

(九八〇)和歌所にてをのことも旅の歌つかうまつりしに 藤原定家朝臣

袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ思ふ方より通ふ浦風

(九八一)和歌所にてをのことも旅の歌つかうまつりしに 藤原家隆朝臣

旅寝する夢路はゆるせ宇津の山關とは聞かず守る人もなし

(九八二)詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへることを 藤原定家朝臣

都にもいまや衣をうつの山夕霜はらふ鳶の下道

(九八三)詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへることを 鴨長明

袖にしも月かゝれとは契り置かず涙は知るや宇津の山越え

(九八四)詩を歌に合はせ侍りしに山路秋行といへることを 前大僧正慈圓

立田山秋ゆく人の袖を見よ木々の梢はしぐれざりけり

(九八五)百首歌奉りし時旅歌 前大僧正慈圓

悟りゆくまことの道に入りぬれば戀ひしかるべき故郷もなし

(九八六)初瀬に詣でて歸さに飛鳥川のほとりに宿りて侍りける夜よみ侍りける

素覺法師

故郷に歸らむことは飛鳥川渡らぬさきに淵瀬たがふな

(九八七)東の方へまかりけるによみ侍りける 西行法師

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさよの中山

(九八八)旅の歌とて 西行法師

思ひ置く人の心にしたはれて露分くる袖のかへりぬるかな

(九八九)熊野へ参り侍りしに旅の心を 太上天皇

見るままに山風荒くしぐるめり都も今は夜寒なるらむ

新古今集 卷第十一 戀歌 一

みかの原わきて流るゝいづみ川いつ見きとてか戀しかるらむ

(九九七)平定文家歌合に 坂上是則

園原や伏屋に生ふる篝木のありとは見えて逢はぬ君かな

(九九八)人の文遣し侍りける返事に添へて女に遣しける 藤原高光

年を経て思ふ心のしるしにぞ空もたよりの風は吹きける

(九九九)九條右大臣の女にはじめて遣しける 西宮前左大臣

年月はわが身に添ひて過ぎぬれと思ふ心のゆかずもあるかな

(一〇〇〇)返し 大納言俊賢母

もろともにあはれといはずば人知れぬ問はず語りをわれのみやせむ

(一〇〇一)天曆御時歌合に 中納言朝忠

人づてに知らせてしがな隠れぬのみこもりにのみ戀ひやわたらむ

(一〇〇二)はじめて女に遣しける 太宰大貳高遠

みこもりの沼の岩垣つゝめどもいかなるひまに濡るゝ袂ぞ

(一〇〇三)いかなる折にありけむ女に 謙徳公

唐衣袖に人目はつゝめどもこぼるゝものは涙なりけり

(九九〇)題知らず 讀人しらす

よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山の峰の白雲

(九九一)題知らず 讀人しらす

音にのみありと聞き來しみ吉野の滝は今日こそ袖に落ちけれ

(九九二)題知らず 人麻呂

あしひきの山田守る庵に置く蚊火の下こがれつゝわが戀ふらくは

(九九三)題知らず 人麻呂

いその上布留のわさ田のほには出です心の中に戀ひやわたらむ

(九九四)女に遣しける 在原業平朝臣

春日野の若紫のすり衣しのぶの亂れかぎり知られず

(九九五)中將更衣に遣しける 延喜御歌

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる

(九九六)題知らず 中納言兼輔

(二〇〇四)左大将朝光五節の舞姫奉りけるかしづきを見て遣しける 前大納言公任

白雲の峰にしもなど通ふらむ同じ三笠の山の麓を

天つ空豊のあかりに見し人のなほ面影のしひて戀しき

(二〇二二)題知らず 和泉式部

(二〇〇五)つれなく侍りける女に師走の晦日に遣しける 謙徳公

今日もまたかくやいぶぎのさしも草さらばわれのみ燃えやわたらむ

あら玉の年にまかせて見るよりはわれこそ越えめ逢坂の關

(二〇二三)題知らず 源重之

(二〇〇六)堀河關白文など遣して里はいづこそと問ひ侍りければ 本院侍從

筑波山端山繁山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり

わが宿はそこもなにか教ふべきいはでこそ見め尋ねけりやと

(二〇二四)また通ふ人ありける女のもとに遣しける 大中臣能宣朝臣

(二〇〇七)返し 忠義公

われならぬ人に心をつくば山下に通はむ道だにやなき

わが思ひ空の煙となりぬれば雲居ながらもなほ尋ねてむ

(二〇二五)はじめて女に遣しける 大江匡衡朝臣

(二〇〇八)題知らず 貫之

人知れず思ふ心はあしびきの山下水の湧きやかへらむ

しるしなき煙を雲にまがへつゝ世を経て富士の山と燃えなむ

(二〇二六)女を物越しにほのかに見て遣しける 清原元輔

(二〇〇九)題知らず 清原深養父

にほふらむ霞のうちの櫻花思ひやりても惜しき春かな

煙立つ思ひならねど人知れずわびては富士のねをのみぞ泣く

(二〇二七)年を経て言ひわたり侍りける女のさすがにけ 近くはあらざりけるに春
の未つ方言ひ遣はしける 大中臣能宣朝臣

(二〇一〇)女に遣しける 藤原惟成

風吹けば室の八島の夕煙心の空に立ちにけるかな

幾返り咲き散る花をながめつゝもの思ひ暮す春に逢ふらむ

(二〇一一)文遣しける女に同じ司の上なりける人通ふと聞きて遣しける 藤原義孝

(二〇一八)題知らず 凡河内躬恆

奥山の峰飛び越ゆる初雁のはつかにだにも見でややみなむ

(二〇一九)題知らず 亭子院御歌

大空をわたる春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらむ

(二〇二〇)正月雨降り風吹きける日女に遣しける 謙徳公

春風の吹くにもまさる涙かなわが水上も氷解くらし

(二〇二二)たびたび返事せぬ女に 謙徳公

水の上に浮きたる鳥の跡もなくおぼつかなさを思ふころかな

(二〇二二)題知らず 曾禰好忠

片岡の雪間に根ざす若草のほかに見てし人ぞ戀しき

(二〇二三)返事せぬ女の許に遣はさむとて人のよませ侍りければ二月ばかりによみ侍りける 和泉式部

跡をだに草のはつかに見てしがな結ぶばかりのほどならずとも

(二〇二四)題知らず 藤原興風

霜の上に跡踏みつくる濱千鳥ゆくへもなしと音をのみぞ鳴く

(二〇二五)題知らず 中納言家持

秋萩の枝もとををに置く露の今朝消えぬとも色に出でめや

(二〇二六)題知らず 藤原高光

秋風に亂れてものは思へども萩の下葉の色は變らず

(二〇二七)忍草の紅葉したるに付けて女のもとに遣しける 花園左大臣

わが戀も今は色にや出でなまし軒のしのぶも紅葉しにけり

(二〇二八)和歌所歌合に久忍戀といふことを 摂政太政大臣

いその上布留の神杉古りぬれど色には出でず露も時雨も

(二〇二九)小野宮の歌合に忍戀の心を 太上天皇

わが戀は槇の下葉に漏る時雨濡るとも袖の色に出でめや

(二〇三〇)百首歌奉りし時よめる 前大僧正慈圓

わが戀は松を時雨の染めかねて眞葛が原に風さわぐなり

(二〇三一)家に歌合し侍りけるに夏戀の心を 摂政太政大臣

空蝉の鳴く音やよそにもりの露干しあへぬ袖を人の問ふまで

(二〇三二)家に歌合し侍りけるに夏戀の心を 寂蓮法師

思ひあれば袖に螢をつゝみてもいはばやものを問ふ人はなし

(二〇三三)水無瀬にてをのことも久戀といふことをよみ侍りしに 太上天皇

思ひつゝ經にける年のかひやなきただあらましの夕暮の空

(一〇三四)百首歌の中に忍戀を 式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

(一〇三五)百首歌の中に忍戀を 式子内親王

忘れてはうち嘆かるゝ夕かなわれのみ知りて過ぐる月日を

(一〇三六)百首歌の中に忍戀を 式子内親王

わが戀は知る人もなし堰く床の涙漏らすな黄楊の小枕

(一〇三七)百首歌よみ侍りける時忍戀 入道前關白太政大臣

忍ぶるに心のひまはなけれどもなほ漏るものは涙なりけり

(一〇三八)冷泉院みこの宮と申しける時侍ひける女房を見かはして 言ひわたり侍りける頃手習しける所にまかりて物に書きつけ侍りける 謙徳公

つられれど恨みむとはた思ほえずなほゆくさきを頼む心に

(一〇三九)返し 讀人しらず

雨こそは頼まば漏らめ頼まずば思はぬ人と見てをやみなむ

(一〇四〇)題知らず 紀貫之

風吹けばとはに波越す磯なれやわが衣手のかわく時なき

(一〇四一)題知らず 道信朝臣

須磨の蜚の波かけ衣よそにのみ聞くはわが身なりにけるかな

(一〇四二)薬玉を女に遣はすとて男にかはりて 三條院女藏人左近

沼ごとに袖ぞ濡れけるあやめ草心に似たる根を求むとて

(一〇四三)五月五日馬内侍に遣しける 前大納言公任

時鳥いつかと待ちしあやめ草今日はいかなる音にか鳴くべき

(一〇四四)返し 馬内侍

五月雨は空おぼれする時鳥時に鳴く音は人もとがめず

(一〇四五)兵衛佐に侍りける時五月ばかりによそながら物申し初めて遣しける 法

成寺入道前撰政太政大臣

ほととぎす聲をば聞けど花の枝にまだふみなれぬものをこそ思へ

(一〇四六)返し 馬内侍

時鳥忍ぶるものを柏木のもりても聲の聞えけるかな

(一〇四七)時鳥の鳴きけるは聞きつやと申しける人に 馬内侍

心のみ空になりつゝ時鳥人頼めなる音こそ泣かるれ

(一〇四八)題知らず 伊勢

み熊野の浦より遠に漕ぐ舟のわれをばよそに隔てつるかな

(一〇五六)題知らず 読人しらず

(一〇四九)題知らず 伊勢

水茎の岡の木の葉を吹き返したれかは君を戀ひむと思ひし

難波瀧短き蘆のふしの間も逢はでこの世を過ぐしてよとや

(一〇五七)題知らず 読人しらず

(一〇五〇)題知らず 人麻呂

わが袖に跡踏みつけよ瀆千鳥逢ふこと難し見てもしのばむ

み狩する狩場の小野の檜柴のなれはまさらで戀ぞまされる

(一〇五八)女の許より歸り侍りけるに程もなく雪のいみじう降り侍りければ 中納

言兼輔

(一〇五一)題知らず 読人しらず

冬の夜の涙に凍るわが袖の心解けずも見ゆる君かな

有度瀆のうとくのみやは世をば經む波のよるよる逢ひ見てしがな

(一〇五九)題知らず 藤原元眞

霜氷心も解けぬ冬の池に夜更けてぞ鳴く鷺のひと聲

(一〇五二)題知らず 読人しらず

東路の道の果てなる常陸帯のかことばかりも逢はむとぞ思ふ

(一〇六〇)題知らず 藤原元眞

涙川身も浮くばかり流るれど消えぬは人の思ひなりけり

(一〇五三)題知らず 読人しらず

濁江のすまむことこそ難からめいかではのかに影を見てまし

(一〇六一)女に遣しける 藤原實方朝臣

いかにせむ久米路の橋の中空に渡しも果てぬ身とやなりなむ

(一〇五四)題知らず 読人しらず

時雨降る冬の木の葉のかわかずその思ふ人の袖はありける

(一〇六二)女の杉の實を包みておこせて侍りければ 藤原實方朝臣

たれぞこの三輪の檜原も知らなくに心の杉のわれを尋ぬる

(一〇五五)題知らず 読人しらず

ありとのみ音に聞きつゝ音羽川渡らば袖に影も見えなむ

(一〇六三)題知らず 小辯

わが戀はいはぬばかりぞ難波なる蘆の篠屋の下にこそ焚け

(二〇六四) 題知らず 伊勢

わが戀は荒磯の海の風をいたみしきりに寄する波の間もなし

(二〇六五) 人に遣しける 藤原清正

須磨の浦に蜃の樵り積む藻鹽木のからくも下に燃えわたるかな

(二〇六六) 題知らず 源景明

あるかひもなきさに寄する白波の間なくもの思ふわが身なりけり

(二〇六七) 題知らず 貫之

あしびきの山下たぎつ岩波の心くだけで人ぞ戀しき

(二〇六八) 題知らず 貫之

あしびきの山下しげき夏草の深くも君を思ふころかな

(二〇六九) 題知らず 坂上是則

牡鹿臥す夏野の草の道をなみしげき戀路にまどふころかな

(二〇七〇) 題知らず 曾禰好忠

蚊遣火のさ夜更けがたの下こがれ苦しやわが身人知れずのみ

(二〇七一) 題知らず 曾禰好忠

由良の門を渡る舟人梶緒絶えゆくへも知らぬ戀の道かな

(二〇七二) 鳥羽院御時上のをのことも寄風戀といふ心をよみ侍りけるに
師時 權中納言

追風に八重の汐路をゆく舟のほかにだにも逢ひ見てしがな

(二〇七三) 百首歌奉りし時 摂政太政大臣

梶緒絶え由良の湊に寄る舟のたよりも知らぬ沖つ汐風

(二〇七四) 題知らず 式子内親王

しるべせよ跡なき波に漕ぐ舟のゆくへも知らぬ八重の汐風

(二〇七五) 題知らず 權中納言長方

紀の國や由良の湊に拾ふてふたまさかにだに逢ひ見てしがな

(二〇七六) 法性寺入道前關白太政大臣家の歌合に 權中納言師俊

つれもなき人の心のうきにはふ蘆の下根の音にこそは泣け

(二〇七七) 和歌所歌合に忍戀をよめる 摂政太政大臣

難波人いかなる江にか朽ち果てむ逢ふことなみに身を盡しつゝ

(二〇七八) 隱名戀といへる心を 皇太后宮大夫俊成

蛭の刈るみるめを波にまがへつゝ名草の濱を尋ねわびぬる

(二〇七九) 題知らず 相模

逢ふまでのみるめ刈るべきかたぞなきまだ波なれぬ磯のあま入

(二〇八〇) 題知らず 業平朝臣

みるめ刈るかたやいつくぞ棹さしてわれに教へよ蛭の釣舟

新古今集 卷第十二 戀歌 一一

漏らすなよ雲ぬる峰の初時雨木の葉は下に色變るとも

(一〇八八) 戀歌あまたよみ侍りけるに 後徳大寺左大臣

かくとだに思ふ心をいせ山下ゆく水の草隠れつゝ

(一〇八一) 五十首歌奉りしに寄雲戀 皇太后宮大夫俊成女

(一〇八九) 題しらず 殷富門院大輔

下燃えに思ひ消えなむ煙だに跡なき雲の果てぞ悲しき

漏らさばや思ふ心をさてのみはえぞやましろの井手のしがらみ

(一〇八二) 撰政太政大臣百首歌合に 藤原定家朝臣

(一〇九〇) 忍戀の心を 近衛院御歌

なびかじな蜚の藻鹽火焚き初めて煙は空にくゆりわぶとも

戀ひしともいはば心のゆくべきに苦しや人目つゝむ思ひは

(一〇八三) 百首歌奉りし時戀歌 撰政太政大臣

(一〇九一) 見れど逢はぬ戀といふ心をよみ侍りける 花園左大臣

戀をのみすまの浦人藻鹽垂れ干しあへぬ袖の果てを知らばや

人知れぬ戀にわが身は沈めどもみるめに浮くは涙なりけり

(一〇八四) 戀の歌とてよめる 二條院讃岐

(一〇九二) 題知らず 神祇伯頭仲

みるめこそ入りぬる磯の草ならめ袖さへ波の下に朽ちぬる

もの思ふといはぬばかりは忍ぶともいかがはすべき袖の帯を

(一〇八五) 年を経たる戀といへる心をよみ侍りける 俊頼朝臣

君戀ふとなるみの浦の濱楸しをれてのみも年を経るかな

(一〇九三) 忍戀の心を 藤原清輔朝臣

(一〇八六) 忍戀の心を 前太政大臣

人知れず苦しきものはしのぶ山下はふ葛のつらみなりけり

知るらめや木の葉降りしく谷水の岩間に漏らす下の心を

(一〇九四) 和歌所歌合に忍戀の心を 藤原雅經

(一〇八七) 左大將に侍りける時家に百首歌合し侍りけるに忍戀の心を 撰政太政大臣

消えねただしのぶの山の峰の雲かゝる心の跡もなきまで

(二〇九五)千五百番歌合に 左衛門督通光

限りあればしのぶの山の麓にも落葉が上の露そ色づく

(二〇九六)千五百番歌合に 二條院讃岐

うちはへて苦しきものは人目のみしのぶの浦の蜃の栲縄

(二〇九七)和歌所歌合に依忍増戀といふことを 春宮權大夫公繼

忍ばじよ岩間つたひの谷川も瀬を堰くにこそ水まさりけれ

(二〇九八)題知らず 信濃

人もまだふみ見ぬ山の岩がくれ流るゝ水を袖に堰くかな

(二〇九九)題知らず 西行法師

はるかなる岩のはざまにひとりみて人目思はでもの思はばや

(一一〇〇)題知らず 西行法師

數ならぬ心のとがになし果てで知らせてこそは身をも恨みめ

(一一〇一)水無瀬戀十五首歌合に夏戀を 摂政太政大臣

草深き夏野分けゆくさ牡鹿の音をこそたてね露ぞこぼるゝ

(一一〇二)入道前關白右大臣に侍りける時百首歌人々によませ侍りけるに忍戀の心を 太宰大貳重家

後の世を嘆く涙といひなしてしほりやせまし墨染の袖

(一一〇三)大納言成通文遣しけれどつれなかりける女を 後の世まで恨み残るべき

よし申しければ 讀人しらず

たまづさの通ふばかりになくさめて後の世までの恨み残すな

(一一〇四)前大納言隆房中将に侍りける時右近の馬場の引折の日 まかれりけるに

物見侍りける女車より遣しける 讀人しらず

ためしあればながめはそれと知りながらおぼつかなきは心なりけり

(一一〇五)返し 前大納言隆房

いはぬより心やゆきてしるべするながむる方を人の問ふまで

(一一〇六)千五百番歌合に 左衛門督通光

ながめわびそれとはなしにものぞ思ふ雲のはたての夕暮の空

(一一〇七)雨の降る日女に遣しける 皇太后宮大夫俊成

思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降る

(一一〇八)水無瀬戀十五首歌合に 摂政太政大臣

山賤の麻のさ衣をさをあらみ逢はで月日や杉簷ける庵

(一一〇九) 欲言出戀といへる心を 藤原忠定

藻鹽焼く蜚の磯屋の夕煙立つ名も苦し思ひ絶えなで

思へどもいはで月日はすぎの門さすがにいかが忍び果つべき

(一一一七) 海邊戀といふことをよめる 藤原定家朝臣

(一一一〇) 百首歌奉りし時 皇太后宮大夫俊成

須磨の蜚の袖に吹き越す汐風のなるとはすれど手にもたまらず

逢ふことはかた野の里の笹の庵しのに露散る夜半の床かな

(一一一八) 撰政太政大臣家歌合により侍りける 寂蓮法師

(一一一一) 入道前關白右大臣に侍りける時百首歌の中に忍戀 皇太后宮大夫俊成

ありとても逢はぬためしの名取川朽ちだに果てぬ瀬々の埋木

散らすなよ篠の葉草のかりにても露かゝるべき袖の上かは

(一一一九) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

(一一一二) 題知らず 藤原元眞

嘆かずよ今はた同じ名取川瀬々の埋木朽ち果てぬとも

白玉か露かと問はむ人もがなもの思ふ袖をさして答へむ

(一一二〇) 百首歌奉りし時 二條院讃岐

(一一一三) 女に遣しける 藤原義孝

涙川たぎつ心の早き瀬をしがらみかけて堰く袖ぞなき

いつまでの命も知らぬ世の中につらき嘆きのやまずもあるかな

(一一二二) 撰政太政大臣百首歌よませ侍りけるに 高松院右衛門佐

(一一二四) 崇徳院に百首歌奉りける時 大炊御門右大臣

よそながらあやしとだにも思へかし戀せぬ人の袖の色かは

わが戀は千木の片そぎ難くのみゆき逢はで年の積りぬるかな

(一一二三) 戀の歌とてよめる 讀人しらす

(一一一五) 入道前關白家に百首歌よみ侍りける時逢はぬ戀といふ心を 藤原基輔朝臣

忍びあまり落つる涙を堰きかへしおさふる袖ようき名漏らすな

いつとなく藻汐焼く蜚の苦びさし久しくなりぬ逢はぬ思ひは

(一一二三) 入道前關白太政大臣家歌合に 道因法師

(一一一六) 夕戀といふことをよみ侍りける 藤原秀能

紅に涙の色なりゆくを幾しほまでと君に問はばや

(一一二四)百首歌の中に 式子内親王

夢にても見ゆらむものを嘆きつゝうちぬる宵の袖のけしきは

逢ふことはいつといぶぎの峰に生ふるさしも絶えせぬ思ひなりけり

(一一三三)撰政太政大臣家百首歌合に 藤原家隆朝臣

(一一二五)語らひ侍りける女の夢に見えて侍りければよみける 後徳大寺左大臣

富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり

覺めてのち夢なりけりと思ふにも逢ふはなごりの惜しくやはあらぬ

(一一三三)名立戀といふ心をよみ侍りける 權中納言俊忠

(一一二六)千五百番歌合に 撰政太政大臣

身に添へるその面影も消えななむ夢なりけりと忘るばかりに

なき名のみ立田の山に立つ雲のゆくへも知らぬながめをぞする

(一一三四)百首歌の中に戀の心を 惟明親王

(一一二七)題知らず 大納言實宗

夢のうちに逢ふと見えつる寢覺めこそつれなきよりも袖は濡れけれ

逢ふことのむなしき空の浮雲は身を知る雨のたよりなりけり

(一一三五)百首歌の中に戀の心を 右衛門督通具

(一一二八)五十首歌奉りし時 前大納言忠良

頼め置きし淺茅が露に秋かけて木の葉降り敷く宿の通路

わが戀は逢ふを限りの頼みだにゆくへも知らぬ空の浮雲

(一一三六)水無瀬戀十五首歌合に春戀の心を 皇太后宮大夫俊成女

(一一二九)隔、河忍戀といふことを 正三位經家

忍びあまり天の川瀬にことよせむせめては秋を忘れだにすな

(一一三七)冬戀 藤原定家朝臣

(一一三〇)遠き境を待つ戀といへる心を 賀茂重政

頼めてもはるけかるべき歸る山幾重の雲の下に待つらむ

床の霜枕の水消えわびぬ結びも置かぬ人の契りに

(一一三八)撰政太政大臣家百首歌合に曉戀 藤原有家朝臣

(一一三一)撰政太政大臣家百首歌合に 中宮大夫家房

つれなさのたぐひまでやはつらからぬ月をもめでし有明の空

(一一三九) 宇治にて夜戀といふことをのこどもつかうまつりしに 藤原秀能

つれもなき人の心は空蟬のむなしき戀に身をや替へてむ

袖の上にたれゆゑ月は宿るぞとよそになしても人の問へかし

(一一四七) 題知らず 西行法師

(一一四〇) 久戀といへることを 越前

なにとなくさすがに惜しき命かなり經ば人や思ひ知るとて

夏引きの手引きの絲の年經ても絶えぬ思ひにむすばほれつゝ

(一一四八) 題知らず 西行法師

(一一四一) 家に百首歌合し侍りけるに祈戀といへる心を 摂政太政大臣

思ひ知る人ありあけの世なりせばつきせず身をば恨みざらまし

幾夜われ波にしをれて貴舟川袖に玉散るもの思ふらむ

(一一四二) 家に百首歌合し侍りけるに祈戀といへる心を 定家朝臣

年も經ぬ祈る契りは初瀬山尾への鐘のよその夕暮

(一一四三) 片思ひの心をよめる 皇太后宮大夫俊成

憂き身をばわれだにいとふいとへただそをだに同じ心と思はむ

(一一四四) 題知らず 權中納言長方

戀ひ死なむ同じうき名をいかにして逢ふに替へつと人にいはれむ

(一一四五) 題知らず 殷富門院大輔

明日知らぬ命をぞ思ふおのづからあらば逢ふ世を待つにつけても

(一一四六) 題知らず 八條院高倉

新古今集 卷第十三 戀歌 三

(一一五五) 題知らず 西行法師

逢ふまでの命もがなと思ひしはくやしかりけるわが心かな

(一一四九) 中關白通ひ初め侍りけるころ 儀同三司母

(一一五六) 題知らず 三條院女藏人左近

忘れじのゆく末まではかたければ今日を限りの命ともがな

人ごころ薄花染めの狩衣さてだにあらで色や變らむ

(一一五〇) 忍びたる女をかりそめなる所に率てまかりて歸りてあしたに遣しける

(一一五七) 題知らず 藤原興風

謙徳公

限りなく結び置きける草枕いつこのたびを思ひ忘れむ

逢ひ見てもかひなかりけりうば玉のはかなき夢におとるつつは

(一一五一) 題知らず 業平朝臣

(一一五八) 題知らず 實方朝臣

思ふには忍ぶることぞ負けにける逢ふにしかへばさもあらばあれ

なかなかにもと思ひ初めて寝ぬる夜ははかなき夢もえやは見えける

(一一五二) 人のもとにまかり初めてあしたに遣しける 廉義公

(一一五九) 忍びたる人と二人臥して 伊勢

昨日まで逢ふにしかへばと思ひしを今日は命の惜しくもあるかな

夢とても人に語るな知るといへば手枕ならぬ枕だにせず

(一一五三) 百首の歌に 式子内親王

(一一六〇) 題知らず 和泉式部

逢ふことを今日松が枝の手向草幾よしをるゝ袖とかは知る

枕だに知らねばいはし見しままに君語るなよ春の夜の夢

(一一五四) 頭中將に侍りける時五節所の童女に物申し初めて後尋ねて遣しける 源

(一一六一) 人にも言ひはじめて 馬内侍

正清朝臣

戀しさに今日ぞ尋ぬる奥山のひかげの露に袖は濡れつゝ

忘れても人に語るなうたた寝の夢見てのちも長からじ夜を

(一一六二) 女に遣しける 藤原範永朝臣

つらかりし多くの年は忘れてひと夜の夢をあはれとぞ見し

(一一七〇) 題知らず 道信朝臣

(一一六三) 題知らず 高倉院御歌

心にもあらぬわが身のゆき歸り道の空にて消えぬべきかな

今朝よりはいとど思ひを焚きましてなげきこりつむ逢坂の山

(一一七一) 近江更衣に給はせける 延喜御歌

(一一六四) 初會戀の心を 源俊頼朝臣

はかなくも明けにけるかな朝露のおきてのちぞ消えまさりける

蘆の屋のしづはた帯の片結び心やすくもうち解くるかな

(一一七二) 御返し 更衣源周子

(一一六五) 題知らず 讀人しらす

朝露のおきつる空も思ほえず消えかへりつる心まどひに

かりそめの伏見の野への草枕つゆかゝりきと人に語るな

(一一七三) 題知らず 圓融院御歌

(一一六六) 人知れず忍びけることを文など散らすと聞きける人に遣しける 相模

置き添ふる露やいかなる露ならむ今は消えねと思ふわが身を

いかにせむ葛の裏吹く秋風に下葉の露の隠れなき身を

(一一七四) 題知らず 謙徳公

(一一六七) 題知らず 實方朝臣

思ひ出でて今は消ぬべし夜もすがらおき憂かりつる菊の上の露

明けがたき二見の浦に寄る波の袖のみ濡れて沖つ島人

(一一七五) 題知らず 清慎公

(一一六八) 題知らず 伊勢

うば玉の夜の衣を立ちながら歸るものとは今ぞ知りぬる

逢ふことの明けぬ夜ながら明けぬればわれこそ歸れ心やはゆく

(一一七六) 夏の夜女の許にまかりて侍りけるに人靜まる程 夜いたく更けて逢ひて

(一一六九) 九月十日餘りに夜更けて和泉式部が門を叩かせ侍りけるに 聞きつけざ

みじか夜の残りすくなく更けゆけばかねてもの憂き暁の空

りければあしたに遣しける 太宰師敦道親王

侍りければよめる 藤原清正

秋の夜の有明の月の入るまでにやすらひかねて歸りにしかな

(二一七七)女みこに通ひ初めてあしたに遣しける 大納言清蔭

明くといへばしづ心なき春の夜の夢とや君を夜のみは見む

(二一八五)題知らず 西行法師

明けぬれどまだきぬぎぬになりやらで人の袖をも漏らしつるかな

(二一七八)彌生の頃終夜物語して歸り侍りける人の 今朝はいとど物思はしきよし
申し遣したりけるに 和泉式部

面影の忘らるまじき別れかなごりを人の月にとどめて

今朝はしも嘆きもすらむ徒らに春の夜ひと夜夢をだに見で

(二一八六)後朝戀の心を 摂政太政大臣

またも來む秋をたのむの雁だにも鳴きてぞ歸る春のあけぼの

(二一七九)題知らず 赤染衛門

心からしばしとつゝむものからに鳴のはねがきつらき今朝かな

(二一八七)女のもとにまかりて心地例ならず侍りければ歸りて遣しける 賀茂成助

(二一八〇)忍びたる所より歸りてあしたに遣しける

たれゆきてえ君に告げまし道芝の露もるともに消えなましかば

わびつゝも君が心になふとて今朝も袂を干しぞわづらふ

(二一八八)女の許に物をだに言はむとてまかれりけるに空しく歸りてあしたに 左

大將朝光

(二一八一)小八條の御息所に遣しける 亭子院御歌

消えかへりあるかなきかのわが身かな恨みて歸る道芝の露

手枕にかせる袂の露けきは明けぬと告ぐる涙なりけり

(二一八九)三條關白女御入内のあしたに遣しける 花山院御歌

朝ばらけ置きつる霜の消えかへり暮待つほどの袖を見せばや

(二一八二)題知らず 藤原惟成

しばし待てまだ夜は深し長月の有明の月は人まどふなり

(二一九〇)法性寺入道前關白太政大臣家歌合に 藤原道經

庭に生ふる夕かけ草の下露や暮を待つ間の涙なるらむ

(二一八三)前栽の露置きたるをなどか見ずなりにしと申しける女に 實方朝臣

おきて見ば袖のみ濡れていとどしく草葉の玉の數やまさらむ

(二一九一)題知らず 小侍從

(二一八四)二條院の御時曉歸りなむとする戀といふことを 二條院讃岐

待つ宵に更けゆく鐘の聲聞けばあかぬ別れの鳥はものは

(一一九九) 寄風戀 宮内卿

(一二九二) 題知らず 藤原知家

これもまた長き別れになりやせむ暮を待つべき命ならねば

(一二〇〇) 題知らず 西行法師

(一二九三) 題知らず 西行法師

有明は思ひ出あれや横雲のただよはれつるしのめの空

(一二〇一) 題知らず 八條院高倉

(一二九四) 題知らず 清原元輔

大堰川ぬせきの水のわくらばに今日は頼めし暮にやはあらぬ

(一二〇二) 題知らず 鴨長明

(一二九五) 今日と契りける人のあるかと問ひて侍りければ 讀人しらず

夕暮に命かけたるかげろふのありやあらずや問ふもはかなし

(一二〇三) 題知らず 藤原秀能

(一二九六) 西行法師人々に百首歌よませ侍りけるに 藤原定家朝臣

あぢきなくつらき嵐の聲も憂しなど夕暮に待ちならひけむ

(一二〇四) 待戀といへる心を 式子内親王

(一二九七) 戀の歌とて 太上天皇

頼めずば人をまつちの山なりと寝なましものをいざよひの月

(一二〇五) 戀の歌とてよめる 西行法師

(一二九八) 水無瀬にて戀十五首歌合に夕戀といへる心を 摂政太政大臣

なにゆゑと思ひも入れぬ夕だに待ち出でしものを山の端の月

(一二〇六) 戀の歌とてよめる 藤原定家朝臣

頼めぬに君來やと待つ宵の間の更けゆかてただ明けなましかば

歸るさのものとや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月

(二二四) 題知らず 延喜御歌

(二二〇七) 題知らず 讀人しらす

東路に刈るてふ萱の亂れつゝ束の間もなく戀ひやわたらむ

君來むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬものの戀ひつゝぞぬる

(二二二五) 題知らず 權中納言敦忠

(二二〇八) 題知らず 人麻呂

結び置きし袂だに見ぬ花薄枯るとも枯れじ君し解かずば

衣手に山嵐吹きて寒き夜を君來まさずばひとりかも寝む

(二二二六) 百首歌中に 源重之

(二二〇九) 左大將朝光久しう音づれ侍らで旅なる所に 來あひて枕のなければ草を

霜の上に今朝降る雪のさむければ重ねて人をつらしとぞ思ふ

結びてしたるに 馬内侍

(二二二七) 題知らず 安法法師女

逢ふことはこれや限りの旅ならむ草の枕も霜枯れにけり

ひとり臥す荒れたる宿の床の上にあはれ幾夜の寢覺めしつらむ

(二二一〇) 天曆の御時間遠にあれやと侍りければ 女御徽子女王

(二二二八) 題知らず 源重之

なれゆくはうき世なればや須磨の蜚の鹽焼き衣間遠なるらむ

山城の淀の若菰かりに來て袖濡れぬとはかこたざらなむ

(二二一一) 逢ひて後逢ひがたき女に 坂上是則

(二二二九) 題知らず 紀實之

霧深き秋の野中の忘水絶え間がちなるころにもあるかな

かけて思ふ人もなければ夕されば面影絶えぬ玉かつらかな

(二二一二) 三條院みこの宮と申しける時久しう問はせ給はざりければ 安法法師女

(二二二〇) 宮仕し侍りける女を語らひ侍りけるにやむことなき男の入り立ちて 言

世の常の秋風ならば荻の葉のそよばかりの音はしてまし

ふけしきを見て恨みけるを女あらがひければよみ侍りける 平正文

(二二二三) 題知らず 中納言家持

いつはりをただすの森の木綿だすきかけつゝ誓へわれを思はば

あしひきの山のかげ草結び置きて戀ひやわたらむ逢ふよしをなみ

(二二二) 人に遣しける 鳥羽院御歌

いかばかりうれしからましもろとも恋ひらるゝ身も苦しかりせば

(二二二八) 題知らず 殷富門院大輔

なにかいとふよも長らへじさのみやは憂きにたへたる命なるべき

(二二三) 片思ひの心を 入道前關白太政大臣

わればかりつらさを忍ぶ人やあると今世にあらば思ひ合せよ

(二二二九) 題知らず 刑部卿頼輔

戀ひ死なむ命はなほも惜しきかな同し世にあるかひはなけれど

(二二三三) 撰政太政大臣百首歌合に契戀の心を 前大僧正慈圓

ただ頼めたとへば人のいつはりを重ねてこそはまたも恨みめ

(二二三〇) 題知らず 西行法師

あはれとて人の心のなさけあれな數ならぬにはよらぬ嘆きを

(二二三四) 女を恨みて今はまからじと申して後なほ忘れ難く覺えければ遣しける
左衛門督家通

つらしとは思ふものから伏柴のしばしもこりぬ心なりけり

(二二三二) 題知らず 西行法師

身を知れば人のとがとも思はぬに恨みがほにも濡るゝ袖かな

(二二二五) 頼むる事侍りける女わづらふ事侍りけるがおこたりて久我内大臣のもと
に遣しける 讀人しらす

頼め來し言の葉ばかりとどめ置きて淺茅が露と消えなましかば

(二二三一) 女に遣しける 皇太后宮大夫俊成

よしさらば後の世とだに頼め置けつらさにたへぬ身ともこそなれ

(二二二六) 返し 久我内大臣

あはれにもたれかは露も思はまし消え残るべきわが身ならねば

頼め置かむたださばかりを契りにて憂き世の中の夢になしてよ

(二二二七) 題知らず 小侍従

つらきをも恨みぬわれにならふなよ憂き身を知らぬ人もこそあれ

新古今集 卷第十四 戀歌 四

(二二三四) 中將に侍りける時女に遣しける 清慎公

宵々に君をあはれと思ひつゝ人にはいはで音をのみぞ泣く

(二二三五) 返し 讀人しらず

君だにも思ひ出でける宵々を待つはいかなる心地かはする

(二二三六) 少將滋幹に遣しける 讀人しらず

戀しさに死ぬる命を思ひ出でて問ふ人あらばなしと答へよ

(二二三七) 恨むること侍りてさらにまつで来じと誓ひごととして二日ばかりありて遣しける 謙徳公

別れては昨日今日こそ隔てつれ千代しも経たる心地のみする

(二二三八) 返し 恵子女王

昨日とも今日とも知らず今はとて別れしほどの心まどひに

(二二三九) 入道撰政久しくまつで来ざりけるころ鬢かきて 出でけるゆするつきの

水入りながら侍りけるを見て 右大將道綱母

絶えぬるか影だに見えは問ふべきを形見の水は水草ぬにけり

(二二四〇) 内に久しく参り給はざりける頃五月五日後朱雀院の御返事に 陽明門院

方々にひき別れつゝあやめ草あらぬねをやはかけむと思ひし

(二二四一) 題知らず 伊勢

言の葉のうつろふだにもあるものをいとど時雨の降りまさるらむ

(二二四二) 題知らず 右大將道綱母

吹く風につけても問はむさがにの通ひし道は空に絶ゆとも

(二二四三) 後の宮久しく里におはしけるころ遣しける 天曆御歌

葛の葉にあらぬわが身も秋風の吹くにつけつゝ恨みつるかな

(二二四四) 久しく参らざりける人に 延喜御歌

霜さやぐ野への草葉にあらねどもなか人目のかれまさるらむ

(二二四五) 御返し 讀人しらず

淺茅生ふる野べや枯るらむ山賤の垣ほの草は色も變らず

(二二四六) 春になりてと奏し侍りけるがさもなかりければ内よりまだ 年もかへら

ぬにやとの給はせたりける御返事を楓の紅葉につけて 女御徽子女王

かすむらむほどをも知らずしづれつゝ過ぎにし秋の紅葉をぞ見る

(二二四七) 御返し 天曆御歌

今來むと頼めつゝ經る言の葉ぞ常磐に見ゆる紅葉なりける

(二二四八) 女御の下に侍りけるに遣しける 朱雀院御歌

玉ぼこの道ははるかにあらねどもうたて雲居にまどふころかな

(二二四九) 御返し 女御熙子女王

思ひやる心は空にあるものをなどか雲居にあひ見ざるらむ

(二二五〇) 麗景殿女御参りて後雨降りける日梅壺女御に 後朱雀院御歌

春雨の降りしところは青柳のいと亂れつゝ人ぞ戀しき

(二二五一) 御返し 女御藤原生子

青柳のいと亂れたるこのころはひとすぢにしも思ひよられじ

(二二五二) また遣しける 後朱雀院御歌

青柳の絲はかたがたなびくとも思ひ初めてむ色は變らじ

(二二五三) 御返し 女御生子

淺緑深くもあらぬ青柳は色變らじといかが頼まむ

(二二五四) はやうもの申しける女に枯れたる葵をみあれの日遣しける 實方朝臣

いにしへの葵と人はとがむともなほそのかみの今日ぞ忘れぬ

(二二五五) 返し 讀人しらず

枯れにける葵のみこそ悲しけれあはれと見ずや賀茂の瑞垣

(二二五六) 廣幡の御息所に遣しける 天曆御歌

逢ふことをはつかに見えし月影のおぼろげにやはあはれとも思ふ

(二二五七) 題知らず 伊勢

さらしやな姨捨山の有明のつきずもものを思ふころかな

(二二五八) 題知らず 中務

いつとてもあはれと思ふを寝ぬる夜の月はおぼろげなくぞ見し

(二二五九) 題知らず 凡河内躬恆

更級の山よりほかに照る月も慰めかねつこのころの空

(二二六〇) 題知らず 讀人しらず

天の戸をおしあげがたの月見れば憂き人しもぞ戀しかりける

(二二六一) 題知らず 讀人しらず

ほの見えし月を戀しと歸るさの雲路の波に濡れて來しかな

(二二六二) 人に遣しける 紫式部

入る方はさやかなりける月影をつはの空にも待ちし宵かな

(二二七〇) 題知らず 八條院高倉

(二二六三) 返し 讀人しらず

曇れかしながむるからに悲しきは月におぼゆる人の面影

さしてゆく山の端もみなかき曇り心の空に消えし月影

(二二七一) 百首歌中に 太上天皇

(二二六四) 題知らず 藤原經衡

忘らるゝ身を知る袖の村雨につれなく山の月は出でけり

今はとて別れしほどの月をだに涙にくれでながめやはせし

(二二七二) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

(二二六五) 題知らず 肥後

めぐり逢はむ限りはいつと知らねども月な隔てそよその浮雲

面影の忘れぬ人によそへつゝ入るをぞ慕ふ秋の夜の月

(二二七三) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

(二二六六) 題知らず 後徳大寺左大臣

わが涙もとめて袖に宿れ月さりとて人の影は見えねど

憂き人の月はなにそのゆかりぞと思ひながらもうちながめつゝ

(二二七四) 千五百番歌合に 權中納言公經

(二二六七) 題知らず 西行法師

戀ひわぶる涙や空に曇らむ光も變る闇の月影

月のみやうはの空なる形見にて思ひも出では心通はむ

(二二七五) 千五百番歌合に 左衛門督通光

(二二六八) 題知らず 西行法師

幾めぐり空ゆく月も隔て來ぬ契りし仲はよその浮雲

くまもなき折しも人を思ひ出でて心と月をやつしつるかな

(二二七六) 千五百番歌合に 右衛門督通具

(二二六九) 題知らず 西行法師

今來むと契りしことは夢ながら見し夜に似たる有明の月

もの思ひてながむるころの月の色にかばかりなるあはれ添ふらむ

(二二七七) 千五百番歌合に 藤原有家朝臣

忘れじといひしばかりのなごりとてその夜の月はめぐり來にけり

(二二八五) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成女

(二二七八) 題知らず 撰政太政大臣

ならひ來したが偽りもまだ知らで待つとせし間の庭の蓬生

思ひ出でて夜な夜な月に尋ねずば待てと契りし中や絶えなむ

(二二八六) 經房卿家歌合に久戀を 二條院讃岐

(二二七九) 題知らず 藤原家隆朝臣

跡絶えて淺茅が末になりけり頼めし宿の庭の白露

忘るなよ今は心の變るともなれしその夜の有明の月

(二二八七) 撰政太政大臣家百首歌よませ侍りけるに 寂蓮法師

(二二八〇) 題知らず 法眼宗圓

來ぬ人を思ひ絶えたる庭の面の蓬が末ぞ待つにまされる

そのままに松の嵐も變らぬを忘れやしぬる更けし夜の月

(二二八八) 題知らず 左衛門督通光

(二二八一) 題知らず 藤原秀能

尋ねても袖にかくべきかたぞなき深き蓬の露のかことを

人ぞ憂き頼めぬ月はめぐり來て昔忘れぬ蓬生の宿

(二二八九) 題知らず 藤原保季朝臣

(二二八二) 八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを 撰政太政大臣

形見とてほの踏み分けし跡もなし來しは昔の庭の荻原

わくらばに待ちつる宵も更けにけりさは契りし山の端の月

(二二九〇) 題知らず 法橋行遍

(二二八三) 八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを 有家朝臣

なごりをば庭の淺茅にとどめ置きてたれゆゑ君が住み浮かれけむ

來ぬ人を待つとはなくて待つ宵の更けゆく空の月も恨めし

(二二九一) 撰政太政大臣家百首歌合に 定家朝臣

(二二八四) 八月十五夜和歌所にて月前戀といふことを 藤原定家朝臣

忘れずはなれし袖もや凍るらむ寝ぬ夜の床の霜のさ筵

松山と契りし人はつれなくて袖越す波に残る月影

(二二九二) 撰政太政大臣家百首歌合に 家隆朝臣

風吹かば峰に別れむ雲をだにありしなごりの形見とも見よ

(一三〇〇) 建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 權中納言公經

(二二九三) 百首歌奉りし時 撰政太政大臣

あはれなる心の闇のゆかりとも見し夜の夢をたれか定めむ

いはざりき今來むまでの空の雲月日隔ててもの思へとは

(一三〇一) 建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 右衛門督通具

(二二九四) 千五百番歌合に 家隆朝臣

契りきやあかぬ別れに露置きし暁ばかり形見なれとは

思ひ出でよたがかねことの未ならむ昨日の雲の跡の山風

(一三〇二) 建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 寂蓮法師

(二二九五) 二條院御時艶書の歌召しけるに 刑部卿範兼

恨みわび待たじ今はの身なれども思ひなれにし夕暮の空

忘れゆく人ゆゑ空をながむれば絶え絶えにこそ雲も見えけれ

(一三〇三) 建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 宜秋門院丹後

(二二九六) 題知らず 殷富門院大輔

忘れじの言の葉いかになりにけむ頼めし暮は秋風ぞ吹く

忘れなば生けらむものかと思ひしにそれもかなはぬこの世なりけり

(一三〇四) 家に百首歌合し侍りけるに 撰政太政大臣

(二二九七) 題知らず 西行法師

思ひかねうちぬる宵もありなまし吹きだにすさへ庭の松風

うとくなる人をなにとて恨むらむ知られず知らぬ折もありしに

(一三〇五) 家に百首歌合し侍りけるに 有家朝臣

(二二九八) 題知らず 西行法師

さらでだに恨みむと思ふわきも子が衣の裾に秋風ぞ吹く

今ぞ知る思ひ出でよと契りしは忘れむとてのなさけなりけり

(一三〇六) 題知らず 讀人しらず

(二二九九) 建仁元年三月歌合に逢不遇戀の心を 土御門内大臣

心にはいつも秋なる寢覺めかな身にしむ風の幾夜ともなく

あひ見しは昔語りのうつつゝにてそのかねことを夢になせとや

(一三〇七) 題知らず 西行法師

あはれとて訪ふ人のなどなかるらむもの思ふ宿の荻の上風

(二三一五)水無瀬戀十五首歌合に 藤原雅經

(二三〇八)入道前關白太政大臣家歌合に 俊恵法師

草枕結び定めむ方知らずならはぬ野への夢の通路

わが戀は今を限りと夕まぐれ荻吹く風のおとづれてゆく

(二三一六)和歌所歌合に深山戀といふことを 家隆朝臣

(二三〇九)題知らず 式子内親王

さてもなほ訪はれぬ秋のゆふは山雲吹く風も峰に見ゆらむ

今はただ心のほかに聞くものを知らずがほなる荻の上風

(二三一七)和歌所歌合に深山戀といふことを 藤原秀能

(二三一〇)家の歌合に 撰政太政大臣

思ひ入る深き心のたよりまで見しはそれともなき山路かな

いつも聞くものとや人の思ふらむ來ぬ夕暮の秋風の聲

(二三一八)題知らず 鴨長明

(二三一一)家の歌合に 前大僧正慈圓

ながめてもあはれと思へおほかたの空だに悲し秋の夕暮

心あらば吹かずもあらなむ宵々に人待つ宿の庭の松風

(二三一九)千五百番歌合に 右衛門督通具

(二三一二)和歌所にて歌合し侍りしに逢不遇戀の心を 寂蓮法師

言の葉の移りし秋も過ぎぬればわが身時雨と降る涙かな

里は荒れぬむなしき床のあたりまで身はならはしの秋風ぞ吹く

(二三二〇)千五百番歌合に 定家朝臣

(二三二三)水無瀬戀十五首歌合に 太上天皇

消えわびぬうつるふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露

里は荒れぬ尾の上の宮のおのづから待ち來し宵も昔なりけり

(二三二一)撰政太政大臣家歌合に 寂蓮法師

(二三二四)水無瀬戀十五首歌合に 有家朝臣

來ぬ人を秋のけしきや更けぬらむ恨みに弱る松蟲の聲

もの思はてただおほかたの露にだに濡るれば濡るゝ秋の袂を

(二三二二)戀の歌とてよみ侍りける 前大僧正慈圓

わが戀は庭の群萩つら枯れて人をも身をも秋の夕暮

(一三三〇) 暁戀の心を 前大僧正慈圓

(一三三三) 被忘戀の心を 太上天皇

暁の涼や空にたくふらむ袖に落ちくる鐘の音かな

袖の露もあらぬ色にぞ消えかへる移れば變る嘆きせし間に

(一三三二) 千五百番歌合に 權中納言公經

(一三三四) 被忘戀の心を 定家朝臣

つくづくと思ひあかしの浦千鳥波の枕に泣く泣くぞ聞く

むせぶとも知らじな心かはら屋にわれのみ消えぬ下の煙は

(一三三一) 千五百番歌合に 定家朝臣

(一三三五) 被忘戀の心を 家隆朝臣

尋ね見るつらき心の奥の海よ汐干の瀉のいふかひもなし

知られじな同し袖には通ふともたが夕暮と頼む秋風

(一三三三) 水無瀬戀十五首歌合に 藤原雅經

(一三三六) 被忘戀の心を 皇太后宮大夫俊成女

見し人の面影とめよ清見瀉袖にせきもる波の通路

露はらふ寢覺めは秋の昔にて見果てぬ夢に残る面影

(一三三四) 水無瀬戀十五首歌合に 皇太后宮大夫俊成女

(一三三七) 撰政太政大臣家百首歌合に尋戀 前大僧正慈圓

降りにけり時雨は袖に秋かけていひばかりを待つとせし間に

心こそゆくへも知らぬ三輪の山杉の梢の夕暮の空

(一三三五) 水無瀬戀十五首歌合に 皇太后宮大夫俊成女

(一三三八) 百首歌の中に 式子内親王

通ひ來し宿の道芝枯れ枯れに跡なき霜のむすぼれつゝ

さりともと待ちし月日ぞ移りゆく心の花の色にまかせて

(一三三九) 百首歌の中に 式子内親王

生きてよも明日まで人はつらからじこの夕暮を訪はば訪へかし

新古今集 卷第十五 戀歌 五

あだなりと思ひしかども君よりはもの忘れせぬ袖の上の露

(一三四三) 題知らず 藤原元真

(一三三六) 水無瀬戀十五首歌合に 藤原定家朝臣

同じくはわが身も露と消えなむ消えなばつらき言の葉も見じ

白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く

(一三四四) 頼めて侍りける女の後には返事をだにせず侍りければかの男に代りて

(一三三七) 水無瀬戀十五首歌合に 藤原家隆朝臣

和泉式部

思ひ入る身は深草の秋の露頼めし末や木枯しの風

今來むといふ言の葉も枯れゆくに夜な夜な露の何に置くらむ

(一三三八) 水無瀬戀十五首歌合に 前大僧正慈圓

(一三四五) 頼めたる事跡なくなり侍りにける女の久しくありて問ひて侍りける返事に 藤原長能

野への露は色もなくてやこぼれつる袖より過ぐる萩の上風

あだことの葉に置く露の消えにしをあるものとてや人の問ふらむ

(一三三九) 題知らず 左近中將公衡

(一三四六) 藤原惟成に遣しける 讀人しらず

戀ひわびて野への露とは消えぬともたれか草葉をあはれとは見む

うちはへていやは寝らるゝ宮城野の小萩が下葉色に出でしより

(一三四〇) 題知らず 右衛門督通具

(一三四七) 返し 藤原惟成

問へかきな尾花がもとの思ひ草しをるゝ野への露はいかにと

萩の葉や露のけしきもうちつけにもとより變る心あるものを

(一三四一) 家に戀十五首歌よみ侍りける時に 權中納言俊忠

(一三四八) 題知らず 花山院御歌

夜の間にも消ゆべきものを露霜のいかに忍べと頼め置くらむ

夜もすがら消えかへりつるわが身かな涙の露にむすぼれつゝ

(一三四二) 題知らず 道信朝臣

(一三四九) 久しく參らぬ人に 光孝天皇御歌

君がせぬわが手枕は草なれや涙の露の夜な夜なぞ置く

(二三五〇) 御返し 讀人しらず

枕のみ浮くと思ひし涙川今はわが身の沈むなりけり

(二三五八) 題知らず 讀人しらず

露ばかり置くらむ袖は頼まれず涙の川の滝つ瀬なれば

おもほえず袖に湊のさわぐかなもろこし舟の寄りしばかりに

(二三五九) 題知らず 讀人しらず

(二三五二) 陸奥の安達に侍りける女に九月ばかりに遣しける 源重之

思ひやるよその村雲しぐれつゝ安達の原に紅葉しぬらむ

妹が袖別れし日より白妙の衣片敷き戀ひつゝぞ寝る

(二三六〇) 題知らず 讀人しらず

(二三五二) 思ふこと侍りける秋の夕暮ひとりながめてよみ侍りける 六條右大臣室

身に近く來にけるものを色變る秋をばよそに思ひしかども

逢ふことのなみの下草みがくれてしづ心なく音こそ泣かるれ

(二三六一) 題知らず 讀人しらず

(二三五三) 題知らず 相模

色變る萩の下葉を見てもまづ人の心の秋ぞ知らるゝ

浦に焚く藻鹽の煙なびかめや四方の方より風は吹くとも

(二三六二) 題知らず 讀人しらず

(二三五四) 題知らず 相模

稲妻は照らさぬ宵もなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ

忘るらむと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき

(二三六三) 題知らず 讀人しらず

(二三五五) 題知らず 謙徳公

人知れぬ寢覺めの涙降り満ちてさもしぐれつる夜半の空かな

憂きながら人をばえしも忘れねばかつ恨みつゝなほぞ戀しき

(二三六四) 題知らず 讀人しらず

(二三五六) 題知らず 光孝天皇御歌 「涙のみ浮き出づる蟹の釣竿の長き夜すがら

戀ひつゝぞ寝る

(二三五七) 題知らず 坂上是則

命をばあだなるものと聞きしかどつらきがためは長くもあるかな

(一三六五) 題知らず 読人しらず

いづ方にゆき隠れなむ世の中に身のあればこそ人もつられ

昼は来て夜は別るゝ山鳥の影見る時ぞ音は泣かれける

(一三七三) 題知らず 読人しらず

(一三六六) 題知らず 読人しらず

今までに忘れぬ人は世にもあらしおのがさまさま年の経ぬれば

われもしか泣きてぞ人に戀ひられし今こそよそに聲をのみ聞け

(一三七四) 題知らず 人麻呂

(一三六七) 題知らず 読人しらず

玉水を手にむすびてもこころみむぬるくば石の中も頼まじ

夏野ゆく牡鹿の角のつかの間も忘れず思へ妹が心を

(一三七五) 題知らず 人麻呂

(一三六八) 題知らず 読人しらず

山城の井出の玉水手に汲みて頼みしかひもなき世なりけり

夏草の露分衣着もせぬになどわが袖の乾く時なき

(一三七六) 題知らず 八代女王

(一三六九) 題知らず 読人しらず

君があたり見つゝを居らむ伊駒山雲な隠しそ雨は降るとも

御被するならの小川の川風に祈りぞわたる下に絶えじと

(一三七七) 題知らず 清原深養父

(一三七〇) 題知らず 読人しらず

中空に立ちある雲の跡もなく身のはかなくもなりぬべきかな

恨みつゝ寝る夜の袖の乾かぬは枕の下に汐や満つらむ

(一三七八) 中納言家持に遣しける 山口女王

(一三七二) 題知らず 読人しらず

雲のある遠山鳥のよそにてもありとし聞けばわびつゝぞ寝る

蘆べより満ちくる汐のいやましに思ふか君が忘れかねつる

(一三七九) 中納言家持に遣しける 山口女王

(一三七二) 題知らず 読人しらず

鹽竈の前に浮きたる浮島の浮きて思ひのある世なりけり

(一三八〇) 題知らず 赤染衛門

逢ふと見てことぞとなく明けにけりはかなの夢の忘れがたみや

いかに寝て見えしなるらむつたた寝の夢よりのちはものをこそ思へ

(一三八八) 題知らず 藤原基俊

(一三八一) 題知らず 参議筆

床近くあながま夜半のきりぎりす夢にも人の見えもこそすれ

うち解けて寝ぬものゆゑに夢を見てもの思ひまさるころにもあるかな

(一三八九) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

(一三八二) 題知らず 伊勢

あはれなりつたた寝にのみ見し夢の長き思ひにむすばほれなむ

春の夜の夢にありつと見えつれば思ひ絶えにし人ぞ待たるゝ

(一三九〇) 題知らず 定家朝臣

(一三八三) 題知らず 盛明親王

かきやりしその黒髪筋ごとにつち伏すほどは面影に立つ

春の夜の夢のしるしはつらくとも見しばかりだにあらば頼まむ

(一三九一) 和歌所歌合に遇不逢戀の心を 皇太后宮大夫俊成

(一三八四) 題知らず 女御徽子女王

夢かよ見し面影も契りしも忘れずながらうつゝならねば

寝る夢にうつゝの憂さも忘れて思ひ慰むほどぞはかなき

(一三九二) 戀の歌とて 式子内親王

(一三八五) 春の夜女のもとにまかりて遣しける 能信朝臣

はかなくぞ知らぬ命を嘆き來しわがかねごとのかはりける世に

かくばかり寝で明かしたる春の夜にいかに見えつる夢にかありけむ

(一三九三) 戀の歌とて 辨

(一三八六) 題知らず 寂蓮法師

過ぎにける世々の契りも忘られていとふ憂き身の果てぞはかなき

涙川身も浮きぬべき寢覺めかなはかなき夢のなごりばかりに

(一三九四) 崇徳院に百首歌奉りける時戀歌 皇太后宮大夫俊成

(一三八七) 百首歌奉りしに 家隆朝臣

思ひわび見し面影はさておきて戀せざりけむ折りぞ戀しき

(一三九五) 題知らず 相模

流れ出でむつき名にしばし淀むかな求めぬ袖に淵はあれども

(一四〇二) 題知らず 和泉式部

いかにしていかにこの世にあり經はかしばしもものを思はざるべき

(一三九六) 男の久しくおとづれざりけるが忘れてやと申し侍りければよめる 馬内侍

(一四〇三) 題知らず 深養父

つらからば戀しきことは忘れなで添へてはなどかしづ心なき

うれしくは忘るゝこともありなましつらきに長き形見なりけり

(一三九七) 昔見ける人賀茂の祭の次第司に出で立ちてなむまかりわたると言ひて侍りければ 馬内侍

(一四〇四) 題知らず 素性法師

君しまれ道の行き來を定むらむ過ぎにし人をつつ忘れつゝ

逢ふことのかたみをだにも見てしがな人は絶ゆとも見つゝしのばむ

(一三九八) 年ごろ絶えにける女のくれといふもの尋ねたりけるに遣はすとて 藤原仲文

(一四〇五) 題知らず 小野小町

わが身こそあらぬかとのみたどるれ訪ふべき人に忘れしより

花咲かぬ朽木の袖の袖人のいかなるくれに思ひ出づらむ

(一四〇六) 題知らず 能信朝臣

(一三九九) 久しく音せぬ人に 大納言經信母

葛城や久米路に渡す岩橋の絶えにし仲となりや果てなむ

おのづからさこそはあれと思ふ間にまことに人の訪はずなりぬる

(一四〇七) 題知らず 祭主輔親

(一四〇〇) 忠盛朝臣かれがれになりて後いかか思ひけむ 久しく音づれぬことを恨めしくやなど言ひて侍りければ返事に 前中納言教盛母

今はとも思ひな絶えそ野中なる水の流れはゆきて尋ねむ

ならばねば人の訪はぬもつらからで悔しきこそ袖は濡れけれ

(一四〇八) 題知らず 伊勢

思ひ出づやみののお山のひとつ松契りしことはいつも忘れず

(一四〇一) 題知らず 皇嘉門院尾張

(一四〇九) 題知らず 業平朝臣

嘆かじな思へば人につらかりしこの世ながらの報いなりけり

出でていにし跡だにいまだ變らぬにたが通路と今はなるらむ

(二四一〇)題知らず 業平朝臣

梅の花香をのみ袖にとどめおきてわが思ふ人はおとづれもせぬ

(二四一一)齋宮女御に遣しける 天曆御歌

天の原そことも知らぬ大空におぼつかなさを嘆きつるかな

(二四一二)御返し 女御徽子女王

嘆くらむ心を空に見てしがな立つ朝霧に身をやなさまし

(二四一三)題知らず 光孝天皇御歌

逢はずして経るころほひの數多あればはるけき空にながめをぞする

(二四一四)女のほかへまかるを聞きて 兵部卿致平親王

思ひやる心も空にしら雲の出で立つ方を知らせやせぬ

(二四一五)題知らず 凡河内躬恆

雲居より遠山鳥の鳴きてゆく聲ほのかなる戀もするかな

(二四一六)辯更衣久しく参らざりけるに賜はせける 延喜御歌

雲居なる雁だに鳴きて来る秋になどかは人のおとづれもせぬ

(二四一七)齋宮女御春ころまかり出でて久しう参り侍らざりければ 天曆御歌

春ゆきて秋までとかは思ひけむかりにはあらず契りしものを

(二四一八)題知らず 西宮前左大臣

初雁のはつかに聞きしことづても雲路に絶えてわぶるころかな

(二四一九)五節のころ内にて見侍りける人にまたの年遣しける 藤原惟成

小忌衣去年ばかりこそなれざらめ今日のひかげのかけてだに問へ

(二四二〇)題知らず 藤原元眞

住吉の戀忘草種絶えてなき世に逢へるわれぞ悲しき

(二四二一)齋宮女御参り侍りけるにいかなることかありけむ 天曆御歌

水の上のはかなき數もおもほえず深き心しそことまれば

(二四二二)久しくなりにける人のもとに 謙徳公

長き世の盡きぬ嘆きの絶えざらばなにに命をかへて忘れむ

(二四二三)題知らず 權中納言敦忠

心にもまかせざりける命もて頼めもおかじ常ならぬ世を

(二四二四)題知らず 藤原元眞

世の憂きも人のつらきも忍ぶるに戀しきにこそ思ひわびぬれ

(一四三二) 題知らず 讀人しらず

(一四二五) 忍びて語らひける女の親聞きていさめ侍りければ 參議堂

はし鷹の野守の鏡えてしがな思ひ思はずよそながら見む

數ならばかゝらましやは世の中にいと悲しきはしづのをだまき

(一四三三) 題知らず 讀人しらず

(一四二六) 題知らず 藤原惟成

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな

人ならば思ふ心をいひてましよしやさこそはしづのをだまき

(一四三四) 題知らず 讀人しらず

(一四二七) 題知らず 讀人しらず

白波は立ちさわぐともこりすまの浦のみるめは刈らむとぞ思ふ

わが齡衰へゆけば白妙の袖のなれにし君をしぞ思ふ

(一四三五) 題知らず 讀人しらず

(一四二八) 題知らず 讀人しらず

今よりは逢はじとすれや白妙のわが衣手の乾く時なき

(一四二九) 題知らず 讀人しらず

玉くしげあけまく惜しきあたら夜を衣手かれてひとりかも寝む

(一四三〇) 題知らず 讀人しらず

逢ふことをおぼつかなくて過ぐすかな草葉の露の置きかはるまで

(一四三一) 題知らず 讀人しらず

秋の田の穂向けの風の片よりにわれはもの思ふつねなきものを

新古今集 卷第十六 雑歌 上

(一四四二) 梅 菅贈太政大臣

降る雪に色まどはせる梅の花づくひすのみや分きてしのばむ

(一四三六) 入道前關白太政大臣家百首歌よませ侍りけるに立春の心を 皇太后宮大夫俊成

(一四四三) 枇杷左大臣の大臣になりて侍りけるよろこび申すとて梅を折りて 貞信公

年暮れし涙のつらら解けにけり苔の袖にも春や立つらむ

おそくとくつひに咲きぬる梅の花たが植ゑ置きし種にかあるらむ

(一四三七) 土御門内大臣家に山家殘雪といふ心をよみ侍りける 藤原有家朝臣

(一四四四) 延長のころほひ五位藏人に侍りけるを離れ侍りて 朱雀院承平八年また

山陰やささらでは庭に跡もなし春ぞ來にける雪のむら消え

かへりなりて明くる年睦月に御遊び侍りける日梅の花を折りてよめる 源公忠朝臣

(一四三八) 圓融院位去り給ひて後船岡に子日し給ひけるに參りて朝に奉りける 一條左大臣

ももしきに變らぬものは梅の花折りてかざせるにほひなりけり

あはれなり昔の人を思ふには昨日の野へに御幸せましや

(一四四五) 梅の花を見給ひて 花山院御歌

色香をば思ひも入れず梅の花常ならぬ世によそへてぞ見る

(一四三九) 御返し 圓融院御歌

(一四四六) 上東門院世をそむき給ひにける春庭の紅梅を見侍りて 大貳三位

ひきかへて野へのけしきは見えしかど昔を戀ふる松はなかりき

梅の花なにほふらむ見る人の色をも香をも忘れぬる世に

(一四四〇) 月あかく侍りける夜袖の濡れたりけるを 大僧正行尊

(一四四七) 東三條院女御におはしましける時圓融院つねに渡り給ひけるを 聞き侍りて靱負の命婦が許に遣しける 東三條入道前撰政太政大臣

春來れば袖の氷も解けにけり漏り來る月の宿るばかりに

春霞たなびきわたる折にこそかゝる山へはかひもありけれ

(一四四一) 鶯を 菅贈太政大臣

(一四四八) 御返し 圓融院御歌

谷深み春の光のおそければ雪につゝめる鶯の聲

紫の雲にもあらで春霞たなびく山のかひはなにぞも

(二四四九)柳 菅贈太政大臣

道のへの朽木の柳春來ればあはれ昔としのばれぞする

(二四五〇)題知らず 清原深養父

昔見し春は昔の春ながらわが身ひとつのあらずもあるかな

(二四五一)堀河院におはしましける頃閑院の左大將の家の櫻を折らせに遣はすとて

圓融院御歌

垣越しに見るあだ人の家櫻花散るばかりゆきて折らばや

(二四五二)御返し 左大將朝光

折りに來と思ひやすらむ花櫻ありし御幸の春を戀ひつゝ

(二四五三)高陽院にて花の散るを見てよみ侍りける 肥後

萬代をふるにかひある宿なれやみ雪と見えて花ぞ散り來る

(二四五四)返し 二條關白内大臣

枝ごとの末までにほふ花なれば散るもみ雪と見ゆるなるらむ

(二四五五)近衛司にて年久しくなりて後上のをのこども大内の花見にまかれりける

によめる 藤原定家朝臣

春を経て御幸になるゝ花の陰古りゆく身をばあはれとや思ふ

(二四五六)最勝寺の櫻は鞠のかゝりにて久しくなりにしを その木年古りて風に倒

れたるよしを聞き侍りしかば をのこどもに仰せて異木をその跡に移し
植ゑさせし時まかりて 見侍りければあまたの年々暮れにし春まで立ち
なれにける事など思ひ出でてよみ侍りける 藤原雅經

なれなれて見しはなごりの春ぞともなどしら川の花の下陰

(二四五七)建久六年東大寺供養に行幸の時興福寺の八重櫻 盛りなりけるを見て枝

に結び付け侍りける 讀人しらす

故郷と思ひな果てそ花櫻かゝる御幸に逢ふ世ありけり

(二四五八)籠りゐて侍りける頃後徳大寺左大臣白川の花見に誘ひければまかりてよ

み侍りける 源師光

いざやまだ月日のゆくも知らぬ身は花の春とも今日こそは見れ

(二四五九)敦道のみこの許に前大納言公任の白川の家にまかりて 又の日みこの遣

しける使につけて申し侍りける 和泉式部

折る人のそれなるからにあぢきなく見しわが宿の花の香ぞする

(二四六〇)題知らず 藤原高光

見てもまたまたも見まくのほしかりし花の盛りは過ぎやしぬらむ

(二四六一)京極前太政大臣家に白河院御幸し給ひて又の日花の歌奉られけるによみ

侍りける 堀河左大臣

老いにける白髪も花ももろとも今日の御幸に雪と見えけり

(二四六二) 後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心ををのこどもつかまつりけるに 大納言忠家

櫻花折りて見しにも變らぬに散らぬばかりのしるしなりけり

(二四六三) 後冷泉院の御時御前にて翫新成櫻花といへる心ををのこどもつかまつりけるに 大納言經信

さもあらばあれ暮れゆく春も雲の上に散ること知らぬ花しにほはば

(二四六四) 無風散花といふことをよめる 大納言忠教

櫻花過ぎゆく春の友とてや風の音せぬ世にも散るらむ

(二四六五) 鳥羽殿にて花の散り方なるを御覽じて後三條内大臣に給はせける 鳥羽院御歌

惜しめども常ならぬ世の花なれば今はこのみを西に求めむ

(二四六六) 世をのがれて後百首歌よみ侍りけるに花の歌とて 皇太后宮大夫俊成

今はわれ吉野の山の花をこそ宿のものとも見るべかりけれ

(二四六七) 入道前關白太政大臣家歌合に 皇太后宮大夫俊成

春來ればなほこの世こそしのばるれいつかはかゝる花を見るべき

(二四六八) 同じ家の百首歌に 皇太后宮大夫俊成

照る月も雲のよそにぞゆきめぐる花ぞこの世の光なりける

(二四六九) 春のころ大乘院より人に遣しける 前大僧正慈圓

見せばやな志賀の唐崎麓なる長柄の山の春のけしきを

(二四七〇) 題知らず 前大僧正慈圓

柴の戸ににほはむ花はさもあらばあれながめてけりな恨めしの身や

(二四七一) 題知らず 西行法師

世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせむ

(二四七二) 東山に花見にまかりて侍るとてこれかれ誘ひけるを さしあふ事ありて

留まりて申し遣はしける 安法法師

身はとめつ心は送る山櫻風のたよりに思ひおこせよ

(二四七三) 題知らず 源俊賴朝臣

櫻麻の芋生の浦波立ちかへり見れどもあかず山梨の花

(二四七四) 橘爲仲朝臣陸奥に侍りける時歌あまた遣しける中に 加賀左衛門

白波の越ゆらむ末の松山は花とや見ゆる春の夜の月

(二四七五) 橘爲仲朝臣陸奥に侍りける時歌あまた遣しける中に 加賀左衛門

おぼつかな霞立つらむ武隈の松のくま漏る春の夜の月

(二四七六) 題知らず 法印幸清

世をいとふ吉野の奥の呼子鳥深き心のほどや知るらむ

奉るとて 法成寺入道前摂政太政大臣

唐衣花の袂に脱ぎ替へよわれこそ春の色は断ちつれ

(二四七七) 百首歌奉りし時に 前大納言忠良

折に逢へばこれもさすがにあはれなり小田のかはつの夕暮の聲

(二四八四) 御返し 上東門院

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかでか花の色を見るべき

(二四七八) 千五百番歌合に 有家朝臣

春の雨のあまねき御代を頼むかな霜に枯れゆく草葉漏らすな

(二四八五) 四月の祭の日まで花散り残りて侍りける年 その花を使少將のかざしに賜ふ葉に書きつけ侍りける 紫式部

神代にはありもやしけむ櫻花今日のかざしに折れるためしは

(二四七九) 崇徳院にて林下春雨といふことをつかうまつりけるに 八條前太政大臣

すべらぎの木高き陰に隠れてもなほ春雨に濡れむとぞ思ふ

(二四八六) いつきの昔を思ひ出でて 式子内親王

時鳥そのかみ山の旅枕ほの語らひし空ぞ忘れぬ

(二四八〇) 圓融院位去り給ひて後實方朝臣馬命婦と物語し侍りける時山吹の花を屏

風の上より投げこし給ひて侍りければ 實方朝臣

(二四八七) 左衛門督家通中将に侍りける時祭の使にて 神館に泊りて侍りける暁齋院の女房の中より遣しける 讀人しらす

八重ながら色も變らぬ山吹のなど九重に咲かずなりにし

立ち出づるなごりありあけの月影にいとど語らふ時鳥かな

(二四八一) 御返し 圓融院御歌

九重にあらで八重咲く山吹のいはぬ色をば知る人もなし

(二四八八) 返し 左衛門督家通

幾千代と限らぬ君が御代なれどなほ惜しまるゝ今朝のあけぼの

(二四八二) 五十首歌奉りし時 前大僧正慈圓

おのが波におなじ末葉ぞしをれぬる藤咲く田子のつらめしの身や

(二四八九) 三條院の御時五月五日菖蒲の根を時鳥の形に作りて 梅の枝に据ゑて人の奉りて侍りけるをこれを題にて歌つかうまつれと仰せられければ 三條院女藏人左近

(二四八三) 世を遁れて後四月一日上東門院太皇太后宮と申しける時衣がへの御装束

梅が枝に折たがへたる時鳥聲のあやめもたれか分くべき

(二四九〇) 五月ばかりものへまかりける道にいと白くくちなしの花の 咲けりける
をこれはなにの花ぞと人に問ひ侍りけれど申さざりければ 小辨

うちわたす遠方人にこと問へば答へぬからにしるき花かな

(二四九一) 五月雨空晴れて月あかく侍りけるに 赤染衛門

五月雨の空だに澄める月影に涙の雨は晴るゝ間もなし

(二四九二) 述懐百首歌中に五月雨 皇太后宮大夫俊成

五月雨はまやの軒端の雨そそぎあまりなまで濡るゝ袖かな

(二四九三) 題知らず 花山院御歌

ひとり寝る宿の床夏朝な朝な涙の露に濡れぬ日ぞなき

(二四九四) 贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひける時 少將義孝久しく参らざりける
に撫子の花につけて遣しける 恵子女王

よそへつゝ見れどつゆだに慰まずいかにかすべきなでしこの花

(二四九五) 月あかく侍りける夜人の螢を包みて遣したりければ雨降りけるに申し遣
しける 和泉式部

思ひあらば今宵の空はとひてまし見えしや月の光なりけむ

(二四九六) 題知らず 七條院大納言

思ひあれば露は袂にまがふかと秋のはじめをたれに問はまし

(二四九七) 后宮より内に扇奉り給ひけるに 中務

袖の浦波吹き返す秋風に雲の上まで涼しかるらむ

(二四九八) 業平朝臣の装束遣して侍りけるに 紀有常朝臣

秋や来る露やまがふと思ふまであるは涙の降るにぞありける

(二四九九) 早くより童友達に侍りける人の年ごろ経てゆき逢ひたるほのかにて
月十日のごろ月にきほひて歸り侍りければ 紫式部

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月かな

(二五〇〇) みこの宮と申しける時少納言藤原統理年ごろなれ仕つまつりけるを
を背きぬべきさまに思ひ立ちけるけしきを御覧じて 三條院御歌

月影の山の端分けて隠れなばそむく憂き世をわれやながめむ

(二五〇一) 題知らず 藤原爲時

山の端を出でがてにする月待つと寝ぬ夜のいたく更けにけるかな

(二五〇二) 参議正光臈月夜に忍びて人の許にまかれりけるを見あらはして遣しける
伊勢大輔

浮雲は立ち隠せどもひま漏りて空ゆく月の見えもするかな

(一五〇三) 返し 参議正光

浮雲に隠れてとこそ思ひしかねたくも月のひま漏りにける

(一五〇四) 三井寺にまかりて日ごろ過ぎて歸らむとしけるに人々なごり惜しみてよ
み侍りける 刑部卿範兼

月をなど待たれのみすと思ひけむげに山の端は出で憂かりけり

(一五〇五) 山里に籠りめて侍りける人の問ひて侍りければ 法印静賢

思ひ出づる人もあらしの山の端にひとりぞ入りし有明の月

(一五〇六) 八月十五夜和歌所にてをのことも歌つかうまつり侍りしに 民部卿範光

和歌の浦に家の風こそなけれども波吹く色は月に見えけり

(一五〇七) 和歌所歌合に湖上月明といふことを 宜秋門院丹後

夜もすがら浦漕ぐ舟は跡もなし月ぞ残れる志賀の唐崎

(一五〇八) 題知らず 藤原盛方朝臣

山の端に思ひも入らし世の中はとてかくてもありあけの月

(一五〇九) 永治元年讓位近くなりて夜もすがら月を見てよみ侍りける 皇太后宮大

夫俊成

忘れじよ忘るなどだにいひてまし雲居の月の心ありせば

(一五一〇) 崇徳院百首歌奉りけるに 皇太后宮大夫俊成

いかにして袖に光の宿るらむ雲居の月は隔てしものを

(一五一一) 文治のころほひ百首歌よみ侍りけるに述懐の歌とてよめる 左近中将公衡

心には忘るゝ時もなかりけり三代の昔の雲の上の月

(一五一一) 百首歌奉りける時秋の歌 二條院讃岐

昔見し雲居をめぐる秋の月いま幾年か袖に宿らむ

(一五一二) 月前述懐といへる心をよめる 藤原經通朝臣

憂き身世にながらへばなほ思ひ出でよ袂に契る有明の月

(一五一四) 石山に詣で侍りて月を見てよめる 藤原長能

都にも人や侍つらむ石山の峰に残れる秋の夜の月

(一五二五) 題知らず 凡河内躬恆

淡路にてあはとはるかに見し月の近き今宵はとこるがらかも

(一五二六) 月のあかりける夜あひ語らひける人のこの頃月は見るやと言へりけれ

ばよめる 源道濟

いたづらに寝では明せどもるともに君が來ぬ夜の月は見ざりき

(一五二七) 夜更くるまで寝られず侍りければ月の出づるをながめて 増基法師

天の原はるかにひとりながむれば袂に月の出でにけるかな

(二五二八)能宣朝臣大和國待乳の山近く住みける女の許に 夜更けてまかりて逢はざりけるを恨み侍りければ 譚人しらず

頼め來し人をまつちの山の端にさ夜更けしかば月も入りにし

(二五二九)百首歌奉りし時 撰政太政大臣

月見ばといひしばかりの人は來で榎の戸たたく庭の松風

(二五三〇)五十首歌奉りしに山家月の心を 前大僧正慈圓

山里に月は見るやと人は來ず空ゆく風ぞ木の葉をも訪ふ

(二五三一)撰政太政大臣大將に侍りし時月歌五十首よませ侍りけるに 前大僧正慈圓

有明の月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

(二五三二)同じ家の歌合に山月の心をよめる 藤原業清

山の端を出でても松の木の間より心づくしの有明の月

(二五三三)和歌所歌合に深山暁月といふことを 鴨長明

夜もすがらひとりみ山の榎の葉に曇るも澄める有明の月

(二五三四)熊野に詣で侍りし時奉りし歌の中に 藤原秀能

奥山の木の葉の落つる秋風に絶え絶え峰の月ぞ残れる

(二五二五)熊野に詣で侍りし時奉りし歌の中に 藤原秀能

月澄めば四方の浮雲空に消えて深山隠れにゆく嵐かな

(二五二六)山家の心をよみ侍りける 猷圓法師

ながめわびぬ柴の編戸のあけ方に山の端近く残る月影

(二五二七)題知らず 花山院御歌

暁の月見むとしも思はねど見し人ゆゑにながめられつゝ

(二五二八)題知らず 伊勢大輔

有明の月ばかりこそ通ひけれ來る人なしの宿の庭にも

(二五二九)題知らず 和泉式部

住みなれし人影もせぬわが宿に有明の月の幾夜ともなく

(二五三〇)家にて月照水といへる心を人々よみ侍りけるに 大納言經信

住む人もあるかなきかの宿ならし蘆間の月のもるにまかせて

(二五三一)秋の暮に病に沈みて世を遁れ侍りにける 又の年の秋九月十餘日月くま

なく侍りけるによみ侍りける 皇太后宮大夫俊成

思ひきや別れし秋にめぐり逢ひてまたもこの世の月を見むとは

(一五三二) 題知らず 西行法師

月を見て心浮かれしいにしへの秋にもさらにもぐり逢ひぬる

秋を経て月をながむる身となれり五十跡の間もなに嘆くらむ

(一五三三) 題知らず 西行法師

夜もすがら月こそ袖に宿りけれ昔の秋を思ひ出づれば

ながめてもむそちの秋は過ぎにけり思へば悲し山の端の月

(一五三四) 題知らず 西行法師

月の色に心を清く染めましや都を出でぬわが身なりせば

心ある人のみ秋の月を見れば何を憂き身の思出にせむ

(一五三五) 題知らず 西行法師

捨つとならば浮世を厭ふしあらむ我には曇れ秋の夜の月

身の憂さに月やあらぬとながむれば昔ながらの影ぞ漏りくる

(一五三六) 題知らず 西行法師

ふけにけるわが世の影を思ふ間にはるかに月の傾きにけり

有明の月よりほかにたれをかは山路の友と契りおくべき

(一五三七) 題知らず 入道親王覺性

ながめして過ぎにし方を思ふ間に峰より峰に月は移りぬ

都なる荒れたる宿にむなしくや月に尋ぬる人歸るらむ

(一五三八) 題知らず 藤原道經

秋の夜の月に心を慰めて憂き世に年の積りぬるかな

思ひやれ何をしのぶとなけれども都おぼゆる有明の月

(一五四六) 返し 式子内親王

(一五三九) 五十首歌召しし時 前大僧正慈圓

有明の同しながめは君も問へ都のほかも秋の山里

(一五四七) 春日社歌合に暁月の心を 撰政太政大臣

天の戸をおしあげがたの雲間より神代の月の影ぞ残れる

(一五四八) 春日社歌合に暁月の心を 右大將忠經

雲をのみつらきものとて明かす夜の月や梢にをちかたの山

(一五四九) 春日社歌合に暁月の心を 藤原保季朝臣

入りやらで夜を惜しむ月のやすらひにほのぼの明くる山の端ぞ憂き

(一五五〇) 月あかき夜定家朝臣に逢ひて侍りけるに歌の道には志深き事は いつばかりよりの事にかと尋ね侍りければ若く侍りし時 西行に久しくあひ伴

ひて聞き習ひ侍るよし申してそのかみ申ししことなど 語り侍りて歸りてあしたに遣しける 法橋行遍

あやしくぞ歸さは月の曇りにし昔語りに夜や更けにけむ

(一五五一) 故郷の月を 寂超法師

故郷の宿もる月にこと問はむわれをば知るや昔住みきと

(一五五二) 遍照寺にて月を見て 平忠盛朝臣

すみ來けむ昔の人は影絶えて宿もるものは有明の月

(一五五三) あひ知りて侍りける人の許にまかりたりけるに その人ほかに住みてい
たう荒れたる宿に月のさし入りて侍りければ 前中納言匡房

八重律茂れる宿は人もなしまばらに月の影ぞすみける

(一五五四) 題知らず 神祇伯顯仲

かもめゐる藤江の浦の沖つ州に夜舟いざよふ月のさやけさ

(一五五五) 題知らず 俊恵法師

難波瀉汐干にあさる蘆鶴も月かたづけば聲の恨むる

(一五五六) 和歌所歌合に海邊月といふことを 前大僧正慈圓

和歌の浦に月の出汐のさすまに夜鳴く鶴の聲ぞ悲しき

(一五五七) 和歌所歌合に海邊月といふことを 定家朝臣

藻汐汲む袖の月影おのづからよそに明さぬ須磨の浦人

(一五五八) 和歌所歌合に海邊月といふことを 藤原秀能

明石瀉色なき人の袖を見よすずるに月も宿るものかは

(一五五九) 熊野へ詣で侍りしついでに切目宿にて海邊眺望といふ心を男どもつかう
まつりしに 源具親

ながめよと思はでしもや歸るらむ月待つ波の蜚の釣舟

(一五六〇) 八十に多く餘りて後百首歌召ししによみて奉りし 皇太后宮大夫俊成
占め置きて今やと思ふ秋山の蓬がもとに松蟲の鳴く

(一五六一) 千五百番歌合に 皇太后宮大夫俊成

荒れわたる秋の庭こそあはれなれまして消えなむ露の夕暮

(一五六二) 題知らず 西行法師

雲かゝる遠山畑の秋されば思ひやるだに悲しきものを

(一五六三) 五十首歌人々によませ侍りけるに述懐の心をよみ侍りける 守覺法親王

風そよぐ篠の小笹の假の世を思ふ寢覺めに露ぞこぼるゝ

(一五六四) 寄風懷舊といふことを 左衛門督通光

淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜忘れぬ夢を吹く嵐かな

(一五六五) 寄風懷舊といふことを 皇太后宮大夫俊成女

葛の葉のうらみにかへる夢の世を忘れがたみの野への秋風

(一五六六) 題知らず 祝部允仲

白露は置きにけらしな宮城野のもとあらの小萩末たわむまで

(一五六七) 法成寺入道前太政大臣女郎花を折りて歌よむべきよし侍りければ 紫式部

女郎花盛りの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ

(一五六八) 返し 法成寺入道前撰政太政大臣

白露は分きても置かし女郎花心がらにや色の染むらむ

(一五六九) 題知らず 曾禰好忠

山里に葛這ひかゝる松垣のひまなくものは秋ぞ悲しき

(一五七〇) 秋の暮に身の老いぬることを嘆きてよみ侍りける 安法法師

百年の秋の嵐は過ごし來ぬいづれの暮の露と消えなむ

(一五七一) 頼綱朝臣津の國の羽束といふ所に侍りける時遣しける 前中納言匡房

秋果つる羽束の山の寂しきに有明の月をたれと見るらむ

(一五七二) 九月ばかりに薄を崇徳院に奉るとてよめる 大藏卿行宗

花薄秋の末葉になりぬればことぞともなく露ぞこぼるゝ

(一五七三) 山里に住み侍りける頃嵐烈しきあした前中納言顯長が許に遣しける 後

徳大寺左大臣

夜半に吹く嵐につけて思ふかな都もかくや秋は寂しき

(一五七四) 返し 前中納言顯長

世の中にあきはてぬれば都にも今はあらしの音のみぞする

(一五七五) 清涼殿の庭に植ゑ給へりける菊を位去り給ひて後おぼし出でて 冷泉院

御歌

うつろふは心のほかの秋なれば今はよそにぞきくの上の露

(一五八三) 佛名のあした削り花を御覧じて 朱雀院御歌

(一五七六) 長月のころ野宮に前栽植ゑけるに 源順

時過ぎて霜に枯れにし花なれど今日は昔の心地こそすれ

頼もしな野の宮人の植うる花しぐるゝ月にあへずなるとも

(一五八四) 花山院下りみ給ひて又の年御佛名に削り花につけて申し侍りける 前大

(一五七七) 題知らず 讀人しらず

納言公任

ほどもなく覺めぬる夢のうちなれどその世に似たる花の色かな

山川の岩ゆく水も氷してひとりくだる峰の松風

(一五八五) 返し 御形宣旨

見し夢をいづれの世ぞと思ふ間に折を忘れぬ花ぞ悲しき

(一五七八) 百首歌奉りし時 土御門内大臣

朝ごとに汀の氷踏み分けて君につかふる道ぞかしこき

(一五八六) 題知らず 皇太后宮大夫俊成

老いぬともまたも逢はむとゆく年に涙の玉を手向けつるかな

(一五七九) 最勝四天王院の障子に阿武隈川かきたる所 藤原家隆朝臣

君が代にあふくま川の埋木も氷の下に春を待ちけり

(一五八七) 題知らず 慈覺大師

おほかたに過ぐる月日をながめしはわが身に年の積るなりけり

(一五八〇) 元輔が昔住み侍りける家のかたはらに清少納言 住みける頃雪いみじう
降りて隔ての垣も倒れて侍りければ申し遣しける 赤染衛門

跡もなく雪ふる里は荒れにけりいづれ昔の垣根なるらむ

(一五八一) 御惱み重くならせ給ひて後雪のあしたに 後白河院御歌

露の命消えなましかばかばかり降る白雪を詠めましやは

(一五八二) 雪に寄せて述懐の心をよめる 皇太后宮大夫俊成

杣山や梢に重る雪折れにたへぬなげきの身をくだくらむ

新古今集 卷第十七 雑歌 中

年経れば朽ちこそまされ橋柱昔ながらの名だに變らで

(一五九五) 長柄の橋をよめる 惠慶法師

春の日のながらの濱に舟とめていづれか橋と問へど答へぬ

(一五九六) 長柄の橋をよめる 後徳大寺左大臣

朽ちにける長柄の橋を来て見れば蘆の枯葉に秋風ぞ吹く

(一五九七) 題知らず 權中納言定頼

沖つ風夜半に吹くらし難波瀉曉かけて波ぞ寄すなる

(一五九八) 春須磨の方にまかりてよめる 藤原孝善

須磨の浦のなぎたる朝は目もはるに霞にまがふ蜚の釣舟

(一五九九) 天曆御時屏風の歌 壬生忠見

秋風の關吹き越ゆるたびごとに聲うち添ふる須磨の浦波

(一六〇〇) 五十首歌よみて奉りしに 前大僧正慈圓

須磨の關夢を通さぬ波の音を思ひも寄らで宿を借りける

(一六〇一) 和歌所の歌合に關路秋風といふことを 摂政太政大臣

人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにしのはただ秋の風

(二五八八) 朱鳥五年九月紀伊國行幸の時 河鳥皇子

白波の濱松が枝の手向草幾世までにか年の經ぬらむ

(二五八九) 題知らず 式部卿宇合

山城の岩田の小野の柞原見つゝや君が山路越ゆらむ

(二五九〇) 題知らず 在原業平朝臣

蘆の屋の灘の汐焼きいとまなみ黄楊の小櫛もささず來にけり

(二五九一) 題知らず 在原業平朝臣

晴るゝ夜の星か川べの螢かもわが住む方に蜚の焚く火か

(二五九二) 題知らず 讀人しらす

志賀の蜚の鹽焼く煙風をいたみ立ちはのぼらで山にたなびく

(二五九三) 題知らず 貫之

難波女の衣干すとて刈りて焚く蘆火の煙立たぬ日ぞなき

(二五九四) 長柄の橋をよめる 忠岑

(一六〇二) 明石の浦をよめる 源俊賴朝臣

蟹小舟苦吹き返す浦風にひとり明石の月をこそ見れ

(一六〇三) 眺望の心を 寂蓮法師

和歌の浦を松の葉越しにながむれば梢に寄する蟹の釣舟

(一六〇四) 千五百番歌合に 正三位季能

水の江のよし野の宮は神さびて齡たけたる浦の松風

(一六〇五) 海邊の心を 藤原秀能

今さらに住み憂しともいかがせむ灘の鹽屋の夕暮の空

(一六〇六) 娘の齋王に具して下り侍りて大淀の浦に楔し侍るとて 女御徽子女王

大淀の浦に立つ波かへらずは松の變らぬ色を見まじや

(一六〇七) 大貳三位里に出で侍りにけるを聞しめして 後冷泉院御歌

待つ人は心ゆくともすみよしの里にとのみは思はざらなむ

(一六〇八) 御返し 大貳三位

住吉の松はまつともおもほえで君が千歳の陰ぞ戀しき

(一六〇九) 教長卿名所歌よませ侍りけるに 祝部成仲

うち寄する波の聲にてしるきかな吹上の濱の秋の初風

(一六一〇) 百首歌奉りし時海邊歌 越前

沖つ風夜寒になれや田子の浦の蟹の藻汐火焚きまさるらむ

(一六一一) 海邊霞といへる心をよみ侍りし 藤原家隆朝臣

見わたせば霞のうちもかすみけり煙たなびく鹽竈の浦

(一六一二) 大神宮に奉りける百首歌の中に若菜をよめる 皇太后宮大夫俊成

今日とてや磯菜摘むらむ伊勢島や一志の浦の蟹の乙女子

(一六一三) 伊勢にまかりける時よめる 西行法師

鈴鹿山憂き世をよそに振り捨てていかなりゆくわが身なるらむ

(一六一四) 題知らず 前大僧正慈圓

世の中を心高くも厭ふかな富士の煙を身の思ひにて

(一六一五) 東の方へ修行し侍りけるに富士の山をよめる 西行法師

風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬわが思ひかな

(一六一六) 五月の晦日に富士の山の雪白く降れるを見てよみ侍りける 業平朝臣

時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪の降るらむ

(二六一七) 題知らず 在原元方

春秋も知らぬときはの山里に住む人さへや面變りせぬ

(二六一八) 五十首歌奉りし時 前大僧正慈圓

花ならでただ柴の戸をさして思ふ心の奥もみ吉野の山

(二六一九) 題知らず 西行法師

吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ

(二六二〇) 題知らず 藤原家衡朝臣

厭ひてもなほ厭はしきせなりけり吉野の奥の秋の夕暮

(二六二二) 千五百番歌合に 右衛門督通具

ひとすぢになればさてもすぎの庵に夜な夜な變る風の音かな

(二六二二) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居の心をよめる 藤原有家朝臣

たれかはと思ひ絶えても松にのみおとづれてゆく風は恨めし

(二六二三) 鳥羽にて歌合し侍りしに山家風といふことを 宜秋門院丹後

山里は世の憂きよりも住みわびぬことのほかなる峰の嵐に

(二六二四) 百首歌奉りしに 藤原家隆朝臣

滝の首松の嵐もなれぬればうち寝るほどの夢は見せけり

(二六二五) 題知らず 寂然法師

事繁き世をのがれにし深山べに嵐の風も心して吹け

(二六二六) 少將高光横川にまかりて頭おろし侍りにけるに法服遣はずとて 權大納

言師氏

奥山の苔の衣にくらべ見よいつれか露の置きまさるとも

(二六二七) 返し 如覺

白露のあした夕べにおく山の苔の衣は風もさはらず

(二六二八) 能宣朝臣大原野に詣でて侍りけるに山里のいとあやしきに 住むべくも

あらぬ様なる人の侍りければ何處わたりより住むぞなど問ひ侍りければ
讀人しらず

世の中をそむきにとては來しかどもなほ憂きことはおほ原の里

(二六二九) 返し 大中臣能宣朝臣

身をばかつをしほの山と思ひつゝいかに定めて人の入けむ

(二六三〇) 深き山に住み侍りける聖のもとに尋ねまかりけるに 庵の戸を閉ぢて人

も侍らざりければ歸るとて書きつけける 惠慶法師

苔の庵さして來つれど君まさで歸る深山の道ぞ露けき

(一六三二) 聖後に見て返し 惠慶法師

荒れ果てて風もさはらぬ苔の庵にわれはなくとも露はもりけむ

われながら思ふかものをとばかりに袖にしぐるゝ庭の松風

(一六三三) 題知らず 西行法師

山深くさこそ心は通ふとも住まであはれは知らむものは

(一六三九) 山寺に侍りけるころ 道命法師

世をそむくところとか聞く奥山はもの思ひにぞ入るべかりける

(一六三三) 題知らず 西行法師

山陰に住まぬ心はいかなれや惜しまれて入る月もある世に

(一六四〇) 少將井の尼大原より出でたりと聞きて遣しける 和泉式部

世をそむく方はいづくもありぬべし大原山はすみよかりきや

(一六三四) 山家送年といへる心をよみ侍りける 寂蓮法師

立ち出でて爪木折り來し片岡の深き山路となりけるかな

(一六四一) 返し 少將井尼

思ふことおほ原山の炭竈はいとどなげきの數をこそ積め

(一六三五) 住吉の歌合に山を 太上天皇

奥山のおどろが下も踏み分けて道ある世ぞと人に知らせむ

(一六四二) 題知らず 西行法師

たれ住みてあはれ知るらむ山里の雨降りすさぶ夕暮の空

(一六三六) 百首歌奉りし時 二條院讃岐

長らへてなほ君が代を松山の待つとせし間に年ぞ經にける

(一六四三) 題知らず 西行法師

枝折せでなほ山深く分け入らむ憂きこと聞かぬところありやと

(一六三七) 山家松といふことを 皇太后宮大夫俊成

今はとて妻木樵るべき宿の松千代をば君となほ祈るかな

(一六四四) 題知らず 殷富門院大輔

かざし折る三輪の繁山かき分けてあはれとぞ思ふ杉立てる門

(一六三八) 春日歌合に松風といへることを 藤原有家朝臣

(一六四五) 法輪寺に住み侍りけるに人の詣で來て暮れぬとて急ぎ侍りければ 道命法師

いつとなきをぐらの山の陰を見て暮れぬと人の急くなるかな

(一六四六) 後白河院栖霞寺におはしましけるに駒牽の引分の使にて参りけるに 藤原定家朝臣

嵯峨の山千代の古道跡とめてまた露分くる望月の駒

(一六四七) 嘆くこと侍りけるころ 知足院入道前關白太政大臣

佐保川の流れ久しき身なれどもつき世に逢ひて沈みぬるかな

(一六四八) 冬の頃大將離れて嘆くこと侍りける明る年右大臣になりて奏し侍りける

東三條院入道關白太政大臣

かゝる瀬もありけるものを宇治川の絶えぬばかりも嘆きけるかな

(一六四九) 御返し 圓融院御歌

昔より絶えせぬ川の末なれば淀むばかりをなに嘆くらむ

(一六五〇) 題知らず 人麻呂

もののふの八十宇治川の網代木にいざよふ波のゆくへ知らずも

(一六五一) 布引の滝見にまかりて 中納言行平

わが世をば今日か明日かと待つかひの涙の滝といづれ高けむ

(一六五二) 京極前太政大臣布引滝見にまかりたりけるに 二條關白内大臣

水上の空に見ゆるは白雲の立つにまがへる布引の滝

(一六五三) 最勝四天王院の障子に、布引の滝かきたる所 藤原有家朝臣

ひさかたの天つ少女が夏衣雲居にさらす布引の滝

(一六五四) 天の川原を過ぐとて 撰政太政大臣

昔聞く天の川原を尋ね来て跡なき水をながむばかりぞ

(一六五五) 題知らず 藤原實方朝臣

天の川通ふ浮木にこと問はむ紅葉の橋は散るや散らずや

(一六五六) 堀河院御時百首歌奉りけるに 前中納言匡房

槿の板も苔むすばかりなりにけり幾世經ぬらむ瀬田の長橋

(一六五七) 天曆御時屏風に國々の所の名を書かせさせ侍りけるに飛鳥川 中務

定めなき名には立てれど飛鳥川早く渡りし瀬にこそありけれ

(一六五八) 題知らず 前大僧正慈圓

山里にひとりながめて思ふかな世に住む人の心強さを

(一六五九) 題知らず 西行法師

山里に憂き世いとむ友もがな悔しく過ぎし昔語らむ

(一六六〇) 題知らず 西行法師

山里は人來させじと思はねど訪はるゝことぞうとくなりゆく

(一六六一) 題知らず 前大僧正慈圓

草の庵をいとひてもまたいかげむ露の命のかゝる限りは

(一六六二) 都を出でて久しく修行し侍りけるに問ふべき人の問はず侍りければ熊野より遣しける 大僧正行尊

わくらばになどは人の問はざらむ音無川に住む身なりとも

(一六六三) あひ知りける人の熊野に籠り侍りけるに遣しける 安法法師

世をそむく山の南の松風に苔の衣や夜寒なるらむ

(一六六四) 西行法師百首歌すすめてよませ侍りけるに 藤原家隆朝臣

いつかわれ苔の袂に露置きて知らぬ山路の月を見るべき

(一六六五) 百首歌奉りしに山家の心を 式子内親王

今はわれ松の柱の杉の庵に閉づべきものを苔深き袖

(一六六六) 百首歌奉りしに山家の心を 小侍從

密摘む山路の露に濡れにけり暁起きの墨染めの袖

(一六六七) 百首歌奉りしに山家の心を 摂政太政大臣

忘れじの人だに訪はぬ山路かな櫻は雪に降り變れども

(一六六八) 五十首歌奉りし時 藤原雅經

影宿す露のみしげくなり果てて草にやつるゝ故郷の月

(一六六九) 俊憲法師身まかりて後年頃遣しける新など弟子どもの許に遣すとて 賀茂重保

煙絶えて焼く人もなき炭竈の跡のなげきをたれか樵るらむ

(一六七〇) 老いて後津の國なる山寺にまかり籠れりけるに 寂蓮尋ねまかりて侍りけるに庵の様住み荒らして哀れに見え侍りけるを 歸りて後とぶらひ侍りければ 西日法師

八十餘り西の迎へを待ちかねて住み荒したる柴の庵ぞ

(一六七二) 山家の歌あまたよみ侍りけるに 前大僧正慈圓

山里に訪ひ來る人の言種はこの住ひこそうらやましけれ

(一六七三) 後白河院隠れさせ給ひて後百首歌に 式子内親王

斧の柄の朽ちし昔は遠けれどありしにもあらぬ世をも經るかな

(一六七四) 述懐百首歌よみ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

いかにせむ賤が園生の奥の竹かき籠るとも世の中ぞかし

(一六七五) 老の後昔を思ひ出で侍りて 祝部成仲

明け暮れは昔をのみぞしのぶ草葉末の露に袖濡らしつゝ

(二六七五) 題知らず 前大僧正慈圓

岡のべの里のあるじを尋ねれば人は答へず山風の風

(二六七六) 題知らず 西行法師

古畑のそはの立つ木にゐる鳩の友呼ぶ聲のすこき夕暮

(二六七七) 題知らず 西行法師

山賤の片岡かけて占むる野の境に立てる玉のを柳

(二六七八) 題知らず 西行法師

繁き野を幾一群に分けなしてさらに昔をしのび返さむ

(二六七九) 題知らず 西行法師

昔見し庭の小松に年古りてあらしの音を梢にぞ聞く

(二六八〇) 三井寺焼けて後住み侍りける坊を思ひやりてよめる 大僧正行尊

住みなれしわが故郷はこのごろや淺茅が原に鶉鳴くらむ

(二六八一) 百首歌よみ侍りけるに 撰政太政大臣

故郷は淺茅が末になり果てて月に残れる人の面影

(二六八二) 題知らず 西行法師

これや見し昔住みけむ跡ならむ蓬が露に月のかゝれる

(二六八三) 人のもとにまかりてこれかれ松の陰に下りゐて遊びけるに 貫之

陰にとて立ち隠るれば唐衣濡れぬ雨降る松の聲かな

(二六八四) 西院の邊りに早うあひ知りける人を尋ね侍りけるに 重摘み侍りける

女知らぬよし申しければよみ侍りける 能因法師

石上古りにし人を尋ねれば荒れたる宿にすみれ摘むなり

(二六八五) 主なき宿を 恵慶法師

いにしへを思ひやりてぞ戀ひわたる荒れたる宿の苔の岩橋

(二六八六) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに閑居の心を 藤原定家朝臣

わくらばに訪はれし人も昔にてそれより庭の跡は絶えにき

(二六八七) ものへまかりける途に山人あまた逢へりけるを見て 赤染衛門

なげき樵る身は山ながら過せかし憂き世の中になに歸るらむ

(二六八八) 題知らず 人麻呂

秋されば狩人越ゆる立田山立ちてもゐてもものをしぞ思ふ

(二六八九) 題知らず 天智天皇御歌

朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝゆくはたが子ぞ

新古今集 卷第十八 雑歌 下

老いぬとて松は緑ぞまさりけるわが黒髪の雪の寒さに

(二六九〇)山 菅贈太政大臣

あしびきのあなたこなたに道はあれど都へいざといふ人のなき

(二六九七)野 菅贈太政大臣

筑紫にも紫生ふる野べはあれどなき名悲しぶ人ぞ聞えぬ

(二六九一)日 菅贈太政大臣

天の原茜さし出づる光にはいつれの沼か冴え残るべき

(二六九八)道 菅贈太政大臣

刈萱の關守にのみ見えつるは人も許さぬ道べなりけり

(二六九二)月 菅贈太政大臣

月ごとに流ると思ひします鏡西のそらにも止まらざりけり

(二六九九)海 菅贈太政大臣

海ならずたたへる水の底までも清き心は月ぞ照らさむ

(二六九三)雲 菅贈太政大臣

山別れ飛びゆく雲の歸り來る影見る時はなほ頼まれぬ

(二七〇〇)鵲 菅贈太政大臣

彦星のゆき逢ひを待つ鵲の渡せる橋をわれに貸さなむ

(二六九四)霧 菅贈太政大臣

霧立ちて照る日の本は見えずとも身は惑はれじ寄るべありやと

(二七〇一)波 菅贈太政大臣

流木と立つ白波と焼く鹽といづれか辛きわだつみの底

(二六九五)雪 菅贈太政大臣

花と散り玉と見えつゝあざむけば雪ふるさどぞ夢に見えける

(二七〇二)題知らず 讀人しらず

ささなみや比良山風の海吹けば釣りする蟹の袖反る見ゆ

(二六九六)松 菅贈太政大臣

(二七〇三)題知らず 讀人しらず

白波の寄する渚に世をつくす蟹の子なれば宿も定めず

(一七〇四) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

舟のうち波の下にぞ老いにける蟹のしわざも暇なの世や

(一七〇五) 題知らず 前中納言匡房

さすらふる身は定めたる方もなし浮きたる舟の波にまかせて

(一七〇六) 題知らず 増賀上人

いかにせむ身をつき舟の荷を重みつひの泊りやいづくなるらむ

(一七〇七) 題知らず 人麻呂

葦鴨の騒ぐ入江の水の江の世に住みがたきわが身なりけり

(一七〇八) 題知らず 大中臣能宣朝臣

葦鴨の羽風になびく浮草の定めなき世をたれか頼まむ

(一七〇九) 渚の松といふことをよみ侍りける 源順

老いにける渚の松の深緑沈める影をよそにやは見る

(一七一〇) 山水をむすびてよみ侍りける 能因法師

あしびきの山下水に影見れば眉白妙にわれ老いにけり

(一七一〇) 尼になりぬと聞きける人に装束遣すとて 法成寺入道前撰政太政大臣

なれ見てし花の袂をうち返し法の衣を裁ちぞ替へつる

(一七一一) 后に立ち給ひける時冷泉院の后宮の御額を奉り給ひけるを出家の時返し

奉り給ふとて 東三條院

そのかみの玉のかざしをうち返し今は衣の裏を頼まむ

(一七一二) 返し 冷泉院太皇太后宮

盡きもせぬ光の間にもまぎれなで老いて歸れる髪をつれなさ

(一七一三) 上東門院出家の後黄金の装束したる沈の數珠銀の箱に入れて梅の枝に付

けて奉られける 枇杷皇太后宮

變るらむ衣の色を思ひやる涙や裏の玉にまがはむ

(一七一四) 返し 上東門院

まがふらむ衣の玉に亂れつゝなほまだ覺めぬ心地こそすれ

(一七一五) 題知らず 和泉式部

汐の間に四方の浦々尋ぬれど今はわが身のいふかひもなし

(一七一六) 屏風の繪に鹽竈の浦かきて侍りけるを 一條院皇后宮

いにしへの蜚や煙となりぬらむ人目も見えぬ鹽竈の浦

(一七一七) 少將高光横川に登りて頭おろし侍りにけるを聞かせ給ひて遣しける 天

曆御歌

都より雲の八重立つ山なれば横川の水やすみよかるらむ

(一七一九)御返し 如覺

ももしきの内のみつねに戀しくて雲の八重立つ山は住み憂し

(一七二〇)世を背きて小野といふ所に住み侍りける頃 業平朝臣雪のいと高つ降り

積みたるをかき分けてまつで来て 夢かと思ふ思ひきやとよみ侍りけるに 惟喬親王

夢かともなにか思はむ憂き世をば背かざりけむほどぞ悔しき

(一七二二)都の外に住み侍りける頃久しうおとづれざりける人に遣しける 女御徽

子女王

雲居飛ぶ雁の音近き住ひにもなほ玉章は掛けずやありけむ

(一七二二)亭子院下るゝ給はむとしける秋よみける 伊勢

白露は置きて替れどももしきのうつろふ秋はものぞ悲しき

(一七二三)殿上離れて侍りてよみ侍りける 藤原清正

天つ風吹けひの浦にある鶴のなか雲居に歸らざるべき

(一七二四)二條院菩提樹院におはしまして後の春 昔を思ひ出でて大納言經信参り

て侍りける又の日女房の申し遣しける 讀人しらす

いにしへのなれし雲居をしのぶとや霞を分けて君尋ねけむ

(一七二五)最勝四天王院の障子に大淀かきたる所 藤原定家朝臣

大淀の浦に刈り干すみるめだに霞に絶えて歸るかりがね

(一七二六)最慶法師千載集書きて奉りける包紙に 「墨をすり筆を染めつゝ年経れど

書きあらはせる言の葉ぞなき」と書き付けて侍りける御返し 後白河院御歌

濱千鳥踏み置く跡の積りなばかひある浦に逢はざらめやは

(一七二七)上東門院高陽院におはしましてけるに行幸侍りて堰き入れたる滝を御覽じ

て 後朱雀院御歌

滝つ瀬に人の心を見ることは昔に今も變らざりけり

(一七二八)權中納言通俊後拾遺撰侍りける頃 まづ片端もゆかしくなど申して侍

りければ 申し合せてこそとてまだ清書もせぬ本を遣し侍りけるを見て

返し遣はすとて 周防内侍

淺からぬ心ぞ見ゆる音羽川堰き入れし水の流れならねど

(一七二九)歌奉れと仰せられければ忠岑がなど書き集めて奉りける奥に書き付け

る 壬生忠見

言の葉の中を泣く泣く尋ねば昔の人に逢ひ見つるかな

(一七三〇)遊女の心をよみ侍りける 藤原爲忠朝臣

ひとり寝の今宵も明けぬたれとしも頼まばこそは來ぬも恨みめ

(一七三一)大江擧周はじめて殿上許されて草深き庭に下りて拜しけるを見侍りて

草分けて立ちぬる袖のうれしさに絶えず涙の露ぞこぼるゝ

(一七三二) 秋の頃わづらひけるおこたりて度々とぶらひける人に遣しける 伊勢大輔

うれしさは忘れやはするしのぶ草しのぶるものを秋の夕暮

(一七三三) 返し 大納言経信

秋風の音せざりせば白露の軒のしのぶにかゝらまじやは

(一七三四) ある所に通ひ侍りけるを朝光大將見交して夜一夜物語して歸りて又の日

右大將濟時

忍草いかなる露か置きつらむ今朝は根もみなあらはれにけり

(一七三五) 返し 左大將朝光

淺茅生を尋ねざりせば忍草思ひ置きけむ露を見まじや

(一七三六) わづらひける人のかく申し侍りける 讀人しらす

長らへむとしも思はぬ露の身のさすがに消えむことをこそ思へ

(一七三七) 返し 小馬命婦

露の身の消えばわれこそ先立たため後れむものか森の小草

(一七三八) 題知らず 和泉式部

命だにあらば見つべき身の果てをしのばむ人のなきぞ悲しき

(一七三九) 例ならぬこと侍りけるに知れりける聖のとぶらひにまつて来て侍りけれ

ば 大僧正行尊

定めなき昔語りを數ふればわが身も數に入りぬべきかな

(一七四〇) 五十首歌奉りし時 前大僧正慈圓

世の中の晴れゆく空に降る霜の憂き身ばかりぞ置き所なき

(一七四一) 例ならぬこと侍りけるに無動寺にてよみ侍りける 前大僧正慈圓

頼みてしわが古寺の苔の下にいつしか朽ちむ名こそ惜しけれ

(一七四二) 題知らず 大僧正行尊

くり返しわが身の咎を求むれば君もなき世にめぐるなりけり

(一七四三) 題知らず 清原元輔

憂しといひて世をひたすらに背かねば物思知らぬ身とやなりなむ

(一七四四) 題知らず 讀人しらす

背けども天の下をし離れねばいづくにも降る涙なりけり

(一七四五) 延喜の御時女藏人内匠白馬節會見侍りけるに 車より紅の衣を出だした

りけるを檢非違使の糺さむとしければ言ひ遣しける 女藏人内匠

大空に照る日の色をいさめても天の下にはたれか住むべき

かく言へりければ糺さずねりけり

背きてもなほ憂きものは世なりけり身を離れたる心ならねば

(一七五三) 述懐の心をよめる 寂蓮法師

(一七四六) 例ならで太秦に籠りて侍りけるに心細く覺えければ 周防内侍

身の憂さを思ひ知らずばいかがせむいとひながらもなほ過すかな

かくしつゝ夕の雲となりもせばあはれかけてもたれかしのばむ

(一七五四) 述懐の心をよめる 前大僧正慈圓

(一七四七) 題知らず 前大僧正慈圓

何事を思ふ人ぞと人問はば答へぬさきに袖ぞ濡るべき

思はねど世を背かむといふ人の同じ數にやわれもなりなむ

(一七五五) 述懐の心をよめる 前大僧正慈圓

(一七四八) 題知らず 西行法師

數ならぬ身をも心のありがほに浮かれてはまた歸り來にけり

いたづらに過ぎにしことや嘆かれむ受けがたき身の夕暮の空

(一七五六) 述懐の心をよめる 前大僧正慈圓

(一七四九) 題知らず 西行法師

愚かなる心の引くにまかせてもさてきはいかにつひの思を

うち絶えて世に經る身にはあらねどもあらぬすぢにも罪ぞ悲しき

(一七五七) 和歌所にて述懐の心を 前大僧正慈圓

(一七五〇) 題知らず 西行法師

年月をいかでわが身に送りけむ昨日の人も今日はなき世に

山里に契りし庵や荒れぬらむ待たれむとだに思はざりしを

(一七五八) 和歌所にて述懐の心を 右衛門督通具

(一七五一) 題知らず 西行法師

受けがたき人の姿に浮かび出でて懲りずやたれもまた沈むべき

袖に置く露をば露と忍べどもなれゆく月や色を知るらむ

(一七五九) 和歌所にて述懐の心を 定家朝臣

(一七五二) 守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに 寂蓮法師

君が代に逢はずは何を玉の緒の長くとまでは惜しまれし身を

(一七六〇) 和歌所にて述懐の心を 家隆朝臣

おほかたの秋の寢覺めの長き夜も君をぞ祈る身を思ふとて

お返しものを思ふは苦しきに知らずがほにて世をや過ぎまし

(一七六一) 和歌所にて述懐の心を 家隆朝臣

和歌の浦や沖つ潮合に浮び出づるあはれわが身の寄るべ知らせよ

(一七六八) 五十首歌よみ侍りけるに述懐の心を 守覺法親王
長らへて世に住むかひはなけれども憂きに替へたる命なりけり

(一七六二) 和歌所にて述懐の心を 家隆朝臣

その山と契らぬ月も秋風もすすむる袖に露こぼれつゝ

(一七六九) 五十首歌よみ侍りけるに述懐の心を 權中納言兼宗
世を捨つる心はなほぞなかりける憂きを憂しとは思ひ知れども

(一七六三) 和歌所にて述懐の心を 雅經

君が代に逢へるばかりの道あれど身をは頼まずゆく末の空

(一七七〇) 述懐の心をよみ侍りける 左近中將公衡
捨てやらぬわが身ぞつらきさりとともと思ふ心に道をまかせて

(一七六四) 和歌所にて述懐の心を 皇太后宮大夫俊成女

惜しむとも涙に月も心からなれぬる袖に秋を恨みて

(一七七二) 題知らず 源師光
憂きながらあればある世に故郷の夢をつつゝに覺ましかねつゝ

(一七六五) 千五百番歌合に 撰政太政大臣

浮き沈み來む世はさてもいかにぞと心に問ひて答へかねぬる

(一七七三) 題知らず 賀茂季保
憂きながらなほ惜しまるゝ命かな後の世とても頼みなければ

(一七六六) 題知らず 撰政太政大臣

われながら心の果てを知らぬかな捨てられぬ世のまた厭はしき

(一七七四) 題知らず 荒木田長延
さりともと頼む心のゆく末も思へば知らぬ世にまかすらむ

(一七六七) 題知らず 撰政太政大臣

つくづくと思へば安き世の中を心と嘆くわが身なりけり

(二七七五)入道前關白太政大臣家百首歌よませ侍りけるに 刑部卿頼輔

河舟ののぼりわづらふ綱手繩くるしくてのみ世をわたるかな

(二七八二)五十首歌の中に 前大僧正慈圓

思ふことなど問ふ人のなかるらむ仰げば空に月ぞさやけき

(二七七六)題知らず 前大僧正覺辨

老いらくの月日はいとど早瀬川かへらぬ波に濡るゝ袖かな

(二七八三)五十首歌の中に 前大僧正慈圓

いかにして今まで世にはありあけのつきせぬものをいとふ心は

(二七七七)よみて侍りける百首歌を源家長が許に見せに遣しける奥に書き付けて侍りける 藤原行能

(二七八四)西行法師山里よりまかり出でて昔出家し侍りしその月日にあたりて侍るなど申したりける返事に 八條院高倉

かき流す言の葉をだに沈むなよ身こそかくてもやま川の水

憂き世出でし月日の影のめぐり来て變らぬ道をまた照らすらむ

(二七七八)身の望かなひ侍らで社の交らひもせで籠りゐて侍りけるに葵を見てよめる 鴨長明

(二七八五)大神宮歌合に 太上天皇

見ればまついとど涙ぞもろかづらいかに契りてかけ離れけむ

大空に契る思ひの年も經ぬ月日も受けよゆく末の空

(二七七九)題知らず 源季景

同じくはあれないにしへ思出のなければともしのばずもなし

(二七八六)前大僧都全眞西國の方に侍りけるに遣しける 承仁法親王

(二七八〇)題知らず 西行法師

いづくにも住まれずはただ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に

(二七八七)前大僧正慈圓文にては思ふほどの事も申し盡くし難きよし申し遣して侍りける返事に 前右大將頼朝

(二七八一)題知らず 西行法師

月のゆく山に心を送り入れて闇なる跡の身をいかにせむ

(二七八八)世の中の常なきころ 大江嘉言

今日までは人を嘆きて暮れにけりいつ身の上にならむとすらむ

(一七八九) 題知らず 清慎公

道芝の露にあらそふわが身かないづれかまづは消えむとすらむ

(一七九〇) 題知らず 皇嘉門院

何とかや壁に生ふなる草の名よそれにもたくふわが身なりけり

(一七九一) 題知らず 權中納言資實

來し方をさながら夢になしつれば覺むるうつゝのなきぞ悲しき

(一七九二) 松の木の焼けるを見て 性空上人

千歳經る松だにくゆる世の中に今日とも知らで立てるわれかな

(一七九三) 題知らず 源俊賴朝臣

數ならで世にすみの江のみをつくしいつを待つともなき身なりけり

(一七九四) 題知らず 皇太后宮大夫俊成

憂きながら久しくぞ世を過ぎにけるあはれやかけし住吉の松

(一七九五) 春日社歌合に松風といふことを 藤原家隆朝臣

春日山谷の埋木朽ちぬとも君に告げこせ峰の松風

(一七九六) 春日社歌合に松風といふことを 宜秋門院丹後

なにとなく聞けば涙ぞこぼれぬる苔の袂に通ふ松風

(一七九七) 草子に葦手長歌など書きて奥に 女御徽子女王

みな人の背き果てぬる世の中にふるの社の身をいかにせむ

(一七九八) 臨時の祭の舞人にて諸共に侍りけるを共に四位して後祭の日遣しける

實方朝臣

衣手の山ぬの水に影見えしなほそのかみの春ぞ戀しき

(一七九九) 返し 藤原道信朝臣

いにしへの山ぬの衣なかりせば忘らるゝ身となりやしなまし

(一八〇〇) 後冷泉院御時大嘗會に日陰の組緒して實基朝臣の許に遣はすとて 先帝

の御時思ひ出でて添へていひ遣しける 加賀左衛門

立ちながらきてだに見せよ小忌衣あかぬ昔の忘れがたみに

(一八〇一) 秋夜聞蚕といふ題をよめと人々に仰せられて大殿こもりけるあしたにそ

の歌を御覽じて 天曆御歌

秋の夜の暁方のきりぎりす人づてならで聞かましものを

(一八〇二) 秋雨を 中務卿具平親王

ながめつゝわが思ふことは日暮しに軒の雫の絶ゆる世もなし

(一八〇三) 題知らず 大中臣能宣朝臣

水茎の中に残れる滝の聲いとしも寒き秋の聲かな

(二八〇四)題知らず 小野小町

木枯しの風にもみぢて人知れず憂き言の葉の積るころかな

(二八〇五)述懐百首歌よみ侍りける時紅葉を 皇太后宮大夫俊成

嵐吹く峰の紅葉の日に添へてもろくなりゆくわが涙かな

(二八〇六)題知らず 崇徳院御歌

うたた寝は荻吹く風におどろけど長き夢路ぞ覺むる時なき

(二八〇七)題知らず 宮内卿

竹の葉に風吹き弱る夕暮のものあはれは秋としもなし

(二八〇八)題知らず 和泉式部

夕暮は雲のけしきを見るからにながめじと思ふ心こそつけ

(二八〇九)題知らず 和泉式部

暮れぬめりいく日をかくて過ぎぬらむ入相の鐘のつくづくとして

(二八一〇)題知らず 西行法師

待たれつる入相の鐘の音すなり明日もやあらば聞かむとすらむ

(二八一二)暁の心を 皇太后宮大夫俊成

暁とつげの枕をそばだてて聞くも悲しき鐘の音かな

(二八一三)百首歌に 式子内親王

暁のゆふつけ鳥ぞあはれなる長き眠りを思ふ枕に

(二八一四)尼にならむと思ひ立ちけるを人のとめ侍りければ 和泉式部

かくばかり憂きを忍びて長らへばこれよりまさるものをこそ思へ

(二八一五)題知らず 和泉式部

たらちねの諫めしものをつれづれとながむるをだに問ふ人もなし

(二八一六)熊野へ参りて大峰へ入らむとて年頃養ひ立てて侍りける乳母のもとに遣

しける 大僧正行尊

あはれとはぐくみ立てしにいしへは世を背けとも思はざりけむ

(二八一七)百首歌奉りし時 土御門内大臣

位山跡を尋ねてのぼれども子を思ふ道になほ迷ひぬる

(二八一八)百首歌よみ侍りけるに懐舊の歌 皇太后宮大夫俊成

昔だに昔と思ひしたらちねのなほ戀しきぞはかなかりける

(二八一九)述懐百首歌よみ侍りけるに 俊頼朝臣

ささがにのいとかりける身のほどを思へば夢の心地こそすれ

世の中を今はの心つくからに過ぎにし方ぞいとど戀しき

(二八一九)夕暮に蜘蛛のいとはかなげに巣がくを常よりもあはれと見て 僧正遍照

(一八二六)題知らず 前大僧正慈圓

ささがにの空に巣がくも同じこと全き宿にも幾世かは經む

世をいとふ心の深くなるままに過ぐる月日をつち數入つゝ

(二八二〇)題知らず 西宮前左大臣

(一八二七)題知らず 前大僧正慈圓

光待つ枝にかゝれる露の命消え果てねとや春のつれなき

ひとかたに思ひ取りにし心にはなほ背かるゝ身をいかにせむ

(二八二二)野分したるあしたに幼き人をだに訪はざりける人に 赤染衛門

(一八二八)題知らず 前大僧正慈圓

荒く吹く風はいかにと宮城野の小萩が上を人の問へかし

なにゆゑにこの世を深くとふぞと人の問へかしく答へむ

(二八二二)和泉式部道貞に忘られて後程なく敦道親王に通ふと聞きて遣しける 赤

(一八二九)題知らず 前大僧正慈圓

染衛門

うつろはでしばし信太の森を見よかへりもぞする葛の裏風

思ふべきわが後の世はあるかなきかなければこそはこの世には住め

(二八二三)返し 和泉式部

(一八三〇)題知らず 西行法師

秋風はすこく吹くども葛の葉のうつらみがほには見えじとぞ思ふ

世をいとふ名をだにもさば留め置きて數ならぬ身の思出にせむ

(二八二四)病限りに覺えける時定家朝臣中將転任の事申すとて民部卿範光がもとに

(一八三二)題知らず 西行法師

遣しける 皇太后宮大夫俊成

身の憂さを思ひ知らでややみなまし背く習ひのなき世なりせば

小笹原風待つ露の消えやらでこのひとふしを思ひ置くな

(一八三三)題知らず 西行法師

(二八二五)題知らず 前大僧正慈圓

いかがすべき世にあらばやは世をも捨てあな憂の世やとさらに思はむ

(二八三三) 題知らず 西行法師

なにごとにとまる心のありければさらにしもまた世のいとほしき

(二八四〇) 題知らず 寂蓮法師

數ならぬ身はなきものになし果てつたがためにかは世をも恨みむ

(二八三四) 題知らず 入道前關白太政大臣

昔より離れがたきは憂き世かなかたみにしのぶ仲ならねども

(二八四一) 題知らず 法橋行遍

頼みありて今ゆく末を待つ人や過ぐる月日を嘆かざるらむ

(二八三五) 嘆くこと侍りける頃大峰に籠るとて 同行どももかたへは京へ歸りねな
ど申してよみ侍りける 大僧正行尊

(二八四二) 守覺法親王五十首歌よませけるに 源師光

長らへて生けるをいかにもどかまし憂き身のほどをよそに思はば

(二八三六) 題知らず 大僧正行尊

思ひ出でてもしも尋ぬる人もあらばありとないひそ定めなき世に
數ならぬ身をなにゆゑに恨みけむとてもかくても過ぐしける世を

(二八四三) 題知らず 八條院高倉

憂き世をば出づる日ごといとへどもいつかは月の入る方を見む

(二八三七) 百首歌奉りしに 前大僧正慈圓

いつかわれ深山の里の寂しきにあるじとなりて人に訪はれむ

(二八四四) 題知らず 西行法師

情ありし昔のみなほしのばれて長らへまうき世にも経るかな

(二八三八) 題知らず 俊頼朝臣

憂き身には山田の晩稲おしこめて世をひたすらに恨みわびぬる

(二八四五) 題知らず 清輔朝臣

長らへばまたこのごろやしのはれむ憂しと見し世ぞ今は戀しき

(二八三九) 年頃修行の心ありけるを捨てがたき事侍りて過ぎけるに 親など亡くな
りて心やすく思ひ立ちける頃障子に書き付け侍りける 山田法師

(二八四六) 寂蓮法師人々すめて百首歌よませ侍りけるにいなびて熊野へ詣でける
道にて 夢に何事も衰へゆけどこの道こそ世の末に變らぬものはあれ

猶この歌よむべき由別當湛快三位俊成に申すと見侍りて驚きながらこ
の歌を急ぎよみ出だして遣しける奥に書き付け侍りける 西行法師

賤の男の朝な朝なに樵り集むるしばしのほどもありがたの世や

末の世もこの情のみ變はらずと見し夢なくはよそに聞かまし

(二八四七)千載集撰び侍りける時古き人々の歌を見て 皇太后宮大夫俊成

ゆく末はわれをもしのぶ人やあらむ昔を思ふ心習ひに

(二八四八)崇徳院に百首歌奉りけるに無常歌 皇太后宮大夫俊成

世の中を思ひつらねてながむればむなしき空に消ゆる白雲

(二八四九)百首歌に 式子内親王

暮るゝ間も待つべき世かはあだし野の末葉の露に嵐立つなり

(二八五〇)津の國におはして汀の蘆を見給ひて 花山院御歌

津の國のながらふべもあらぬかな短き蘆の世にこそありけれ

(二八五一)題知らず 中務卿具平親王

風早み荻の葉ごとに置く露の後れ先立つほどのはかなさ

(二八五二)題知らず 蝉丸

秋風になびく淺茅の末ごとにおく白露のあはれ世の中

(二八五三)題知らず 蝉丸

世の中はとてまかくても同じこと宮も藁屋も果てしなれば

新古今集 卷第十九 神祇歌

人知れず今や今やとちはやぶる神さぶるまで君をこそ待て

(一八六一) 題知らず 讀人しらず

道遠しほどもはるかに隔たれり思ひおこせよわれも忘れじ

(一八五四) 題知らず 讀人しらず

(一八六二) 題知らず 讀人しらず

知るらめや今日の子の日の姫小松生ひむ末まで榮ゆべしとは

思ふこと身にあまるまでなる滝のしばし淀むをなに恨むらむ

(一八五五) 題知らず 讀人しらず

(一八六三) 題知らず 讀人しらず

情なく折る人つらしわが宿のあるじ忘れぬ梅の立ち枝を

われ頼む人いたづらになし果てばまた雲分けてのぼるばかりぞ

(一八五六) 題知らず 讀人しらず

(一八六四) 題知らず 讀人しらず

補陀落の南の岸に堂建てて今ぞ榮えむ北の藤波

鏡にも影みたらしの水の面に映るばかりの心とを知れ

(一八五七) 題知らず 讀人しらず

(一八六五) 題知らず 讀人しらず

夜や寒き衣や薄き片そぎのゆき合ひの間より霜や置くらむ

在り來つゝ來つゝ見れどもいさぎよき人の心をわれ忘れめや

(一八五八) 題知らず 讀人しらず

(一八六六) 題知らず 讀人しらず

いかばかり年は經ぬとも住の江の松ぞふたたび生ひ變りける

西の海立つ白波の上にしてなに過すらむ假のこの世を

(一八五九) 題知らず 讀人しらず

(一八六七) 延喜六年日本紀竟宴に神日本磐餘彦天皇 大江千古

むつまじと君はしらなみ瑞垣の久しき世より祝ひそめてき

白波に玉依姫の來しことは渚やつひに泊りなりけむ

(一八六〇) 題知らず 讀人しらず

(二八六八) 猿田彦 紀淑望

ひさかたの天の八重雲ふり分けて降りし君をわれぞ迎へし

(二八六九) 玉依姫 三統理平

飛びかける天の磐舟尋ねてぞ秋津島には宮はじめける

(二八七〇) 賀茂の社午日うたひ侍りける歌 三統理平

大和かも海に嵐の西吹けばいづれの浦に御舟つながむ

(二八七一) 神樂をよみ侍りける 紀貫之

置く霜に色も變らぬ榊葉の香をやは人の求めて来つらむ

(二八七二) 臨時の祭をよめる 紀貫之

宮人の摺れる衣に木綿襷かけて心をたれに寄すらむ

(二八七三) 大將に侍りける時勅使にて大神宮に詣でてよみ侍りける 摂政太政大臣

神風や御裳濯川のそのかみに契りしことの末をたがふな

(二八七四) 同じ時外宮にてよみ侍りける 藤原定家朝臣

契りありて今日みや川の木綿鬢長き世までもかけて頼まむ

(二八七五) 公繼卿勅使にて大神宮に詣でて歸り上り侍りけるに齋宮女房の中より申し贈りける 讀人しらす

うれしさもあはれもいかに答へまし故郷人に問はれましかば

(二八七六) 返し 春宮權大夫公繼

神風や五十鈴川波數知らずすむべき御代にまた歸り來む

(二八七七) 大神宮歌中に 太上天皇

ながめばや神路の山に雲消えて夕べの空を出でむ月影

(二八七八) 大神宮歌中に 太上天皇

神風や豊みてぐらになびく四手かけて仰ぐといふもかしこし

(二八七九) 題知らず 西行法師

宮柱下つ岩根に敷き立ててつゆも曇らぬ日のみ影かな

(二八八〇) 題知らず 西行法師

神路山月さやかなる誓ひありて天の下をば照らすなりけり

(二八八一) 伊勢の月讀の社に参りて月をよめる 西行法師

さやかなる鷺の高嶺の雲居より影やはらぐる月讀の森

(二八八二) 神祇の歌とてよめる 前大僧正慈圓

やはらぐる光に餘る影なれや五十鈴川原の秋の夜の月

(二八八三) 公卿勅使にて歸り侍りける一志のむまやにてよみ侍りける 中院入道右大臣

立ち歸りまたも見まくのほしきかな御裳濯川の瀬々の白波

(二八八四) 入道前關白家百首歌よみ侍りけるに 皇太后宮大夫俊成

神風や五十鈴の川の宮柱幾千代すめと立てはじめけむ

(二八八五) 入道前關白家百首歌よみ侍りけるに 俊恵法師

神風や玉串の葉を取りかざし内外の宮に君をこそ祈れ

(二八八六) 五十首歌奉りし時 越前

神風や山田の原の榊葉に心のしめをかけぬ日ぞなき

(二八八七) 社頭納涼といふことを 大中臣明親

五十鈴川空やまだきに秋の聲したつ岩根の松の夕風

(二八八八) 香椎宮の杉をよみ侍りける 讀人しらす

ちはやぶる香椎の宮の綾杉は神のみぞきに立てるなりけり

(二八八九) 八幡宮の權官にて年久しかりける事を恨みて御神樂の夜参りて榊に結び

付け侍りける 法印成清

榊葉にそのいふかひはなけれども神に心をかけぬ間ぞなき

(二八九〇) 賀茂に参りて 周防内侍

年を経て憂き影をのみたらしのかはる世もなき身をいかにせむ

(二八九一) 文治六年女御入内屏風に臨時祭かける所をよみ侍りける 皇太后宮大夫

俊成

月冴ゆる御手洗川に影見えて氷に摺れる山藍の袖

(二八九二) 社頭の雪といふ心をよみ侍りける 按察使公道

木綿四手の風に亂るゝ音冴えて庭白妙に雪ぞ積れる

(二八九三) 十首歌合の中に神祇をよめる 前大僧正慈圓

君をいのる心の色を人問はば紵の宮の朱の玉垣

(二八九四) みあれに参りて社の司おのおの葵をかけけるによめる 賀茂重保

跡垂れし神にあふひのなかりせば何に頼みをかけて過ぎまし

(二八九五) 社司ども貴布禰に参りて雨乞ひし侍りけるついでによめる 賀茂幸平

大御田のうるほふばかり堰きかけて井堰に落せ川上の神

(二八九六) 鴨社歌合とて人々よみ侍りけるに月を 鴨長明

石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋ねてぞすむ

(二八九七) 辨に侍りける時春日の祭に下りて周防内侍に遣しける 中納言資仲

萬代を祈りぞかくる木綿禪春日の山の峰の風に

(二八九八)文治六年女御入内屏風に春日祭 入道前關白太政大臣

今日祭る神の心やなびくらむ四手に波立つ左保の川風

(二八九九)家に百首歌よみ侍りける時神祇の心を 入道前關白太政大臣

天の下三笠の山の陰ならで頼むかたなき身とは知らずや

(二九〇〇)家に百首歌よみ侍りける時神祇の心を 皇太后宮大夫俊成

春日野のおどろの道の埋水未だに神のしるしあらはせ

(二九〇一)大原野の祭に参りて周防内侍に遣しける 藤原伊家

千代までも心して吹けもみぢ葉を神もをしほの山風の風

(二九〇二)最勝四天王院の障子に小鹽の山かきたる所 前大僧正慈圓

小鹽山神のしるしをまつの葉に契りし色はかへるものかは

(二九〇三)日吉社に奉りける歌の中に二宮を 前大僧正慈圓

やはらぐる影ぞ麓に曇りなきもとの光は峰に澄めども

(二九〇四)述懐の心を 前大僧正慈圓

わが頼む七の社の木綿禪かけても六の道に歸すな

(二九〇五) 述懐の心を 前大僧正慈圓

おしなべて日吉の影は曇らぬに涙あやしき昨日今日かな

(二九〇六) 述懐の心を 前大僧正慈圓

もろ人の願ひをみつの濱風に心涼しき四手の音かな

(二九〇七) 北野よみて奉りける 前大僧正慈圓

覺めぬれば思ひ合せて音をぞ泣く心づくしのいにしへの夢

(二九〇八) 熊野へ詣で給ひける道に花の盛りなりけるを御覽じて 白河院御歌

咲きにほふ花のけしきを見るからに神の心ぞ空に知らるゝ

(二九〇九) 熊野に参りて奉り侍りし 太上天皇

岩にむす苔踏みならずみ熊野の山のかひあるゆく末もがな

(二九一〇) 新宮に詣つとて熊野川にて 太上天皇

熊野川下す早瀬の水馴棹さすが見なれぬ波の通路

(二九一一) 白河院熊野に詣で給へりけるに御供の人々鹽屋の王子にて歌よみ侍りけるに 徳大寺左大臣

立ちのぼる鹽屋の煙浦風になびくを神の心ともがな

(二九一二) 熊野へ詣で侍りしに岩代の王子に人々の名など書き付けさせて しばし

侍りしに拜殿の長押に書き付け侍りし時 讀人しらず

岩代の神は知るらむしるべせよ頼む憂き世の夢のゆく末

(二九一三)熊野の本宮焼けて年の内に遷宮侍りしに参りて 太上天皇

契りあればうれしきかゝる折に逢ひぬ忘るな神もゆく末の空

(二九一四)加賀守にて侍りける時白山に詣でたりけるを 思ひ出でて日吉の客人の
宮にてよみ侍りける 左京大夫顕輔

年経とも越の白山忘れずば頭の雪をあはれとも見よ

(二九一五)一品聡子内親王住吉に詣でて人々歌よみ侍りけるによめる 藤原道經

住吉の濱松が枝に風吹けば波の白木綿かけぬ間ぞなき

(二九一六)奉幣の使に住吉に参りて昔住みける泊りの荒れたりけるをよみ侍りける
津守有基

住みよしと思ひし宿は荒れにけり神のしるしを待つとせしまに

(二九一七)ある所の屏風の繪に十一月神祭る家の前に馬に乗りて人のゆく所を 大
中臣能宣朝臣

榊葉の霜つちはらひかれずのみ住めとぞ祈る神の御前に

(二九一八)延喜御時屏風に夏神樂の心をよみ侍りけるに 貫之

川社しのにをりはへ干す衣いかに干せばか七日ひざらむ

新古今集 卷第廿 釋教歌

(二九一九) 題知らず 讀人しらす

なほ頼め標茅が原のさせも草われ世の中にあらむ限りは

(二九二〇) 題知らず 讀人しらす

なにか思ふなにかは嘆く世の中はただ朝顔の花の上の露

(二九二二) 智縁上人伯耆の大山に参りて出でなむとしける暁夢に見えける歌 讀人しらす

山深く年經るわれもあるものをいづちか月の出でてゆくらむ

(二九二二) 難波の御津寺にて蘆の葉のそよぐを聞きて 行基菩薩

蘆そよぐ汐瀨の波のいつまでか浮世の中に浮びわたらむ

(二九二三) 比叡山中堂建立の時 傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせたまへ

(二九二四) 入唐の時の歌 智證大師

法の舟さしてゆく身ぞもろもろの神も佛もわれをみそなへ

(二九二五) 菩提寺の講堂の柱に蟲の食ひたる歌 智證大師

しるへある時にだにゆけ極樂の道にまどへる世の中の人

(二九二六) 御嶽の笙の岩屋に籠りてよめる 日藏上人

寂寞の苔の岩戸の静けきに涙の雨の降らぬ日ぞなき

(二九二七) 臨終正念ならむことを思ひてよめる 法圓上人

南無阿彌陀佛の御手にかかる絲のをはり亂れぬ心ともがな

(二九二八) 題知らず 僧都源信

われだにもまつ極樂に生れなば知るも知らぬもみな迎へてむ

(二九二九) 天王寺の龜井の水を御覽じて 上東門院

濁りなき龜井の水をむすびあげて心の塵をすすぎつるかな

(二九三〇) 法華經二十八品の歌人々によませ侍りけるに提婆品の心を 法成寺入道
前撰政太政大臣

わだつ海の底より來つるほどもなくこの身ながらに身をぞきはむる

(二九三二) 勸持品の心を 大納言齊信

數ならぬ命はなにか惜しからむ法説くほどを忍ぶばかりぞ

(二九三三) 五月ばかりに雲林院の菩提講に詣でてよみ侍りける 肥後

紫の雲の林を見わたせば法にあふちの花咲きにけり

色にのみ染めし心の悔しきをむなしと説ける法のつれしな

(一九三三) 涅槃經讀み侍りける時夢に「散る花に池の氷も解けぬなり花咲き散らす
春の夜の空」と書きて人の見せ侍りければ夢の中に返しすと覺えける

(一九四〇) 撰政太政大臣家百首歌に十樂の心をよみ侍りけるに聖衆來迎樂 寂蓮法師

歌 肥後

紫の雲路に誘ふ琴の音に憂き世をはらふ峰の松風

谷川の流れし清く澄みぬればくまなき月の影も浮びぬ

(一九四二) 蓮華初開樂 寂蓮法師

(一九三四) 述懷歌の中に 前大僧正慈圓

これやこの憂き世のほかの春ならむ花のとほそのあけぼのの空

願はくはしばし闇路にやすらひてかゝげやせまし法のともしび

(一九四二) 快樂不退樂 寂蓮法師

(一九三五) 述懷歌の中に 前大僧正慈圓

春秋も限らぬ花に置く露は後れ先立つ恨みやはする

説くみ法きくの白露夜はおきてつとめて消えむことをしぞ思ふ

(一九四三) 引接結縁樂 寂蓮法師

(一九三六) 述懷歌の中に 前大僧正慈圓

立ち歸りくるしき海に置く網も深きえにこそ心引くらぬ

極樂へまだわが心ゆき着かず羊の歩みしばしとどまれ

(一九四四) 法華經二十八品の歌よみ侍りけるに方便品唯一乘法の心を 前大僧正

(一九三七) 觀心如月輪若在輕霧中の心を 權僧正公胤

慈圓

わが心なほ晴れやらぬ秋霧にほのかに見ゆる有明の月

いづくにもわが法ならぬ法やあると空吹く風に問へど答へぬ

(一九三八) 家に百首歌よみ侍りける時十界の心をよみ侍りけるに縁覺の心を 撰政

太政大臣

(一九四五) 化城喻品化作大城郭 前大僧正慈圓

奥山にひとり浮世は悟りにき常なき色を風にまかせて

思ふなよ憂き世の中を出で果てて宿る奥にも宿はありけり

(一九三九) 心經の心をよめる 小侍従

(一九四六) 分別功德品或住不退地 前大僧正慈圓

鷲の山今日聞く法の道ならで歸らぬ宿にゆく人ぞなき

(一九四七) 普門品心念不空過 前大僧正慈圓

おしなべてむなしき空と思ひしに藤咲きぬれば紫の雲

(一九五五) 菩薩清涼月遊於畢竟空 寂然法師

(一九四八) 水渚常不滿といふ心を 崇徳院御歌

雲晴れてむなしき空に澄みながら憂き世の中をめぐる月影

おしなべて憂き身はさこそなるみ瀉満ち干る汐の變るのみかは

(一九五六) 梅檀香風悦可衆心 寂然法師

(一九四九) 先照高山 崇徳院御歌

吹く風に花橘やにほふらむ昔覺ゆる今日の庭かな

朝日さす峰のつづきは芽ぐめどもまだ霜深し谷の陰草

(一九五七) 作是教已復至他國 寂然法師

(一九五〇) 家に百首歌よみ侍りける時五智の心を妙觀察智 入道前關白太政大臣

闇深き木のもとことに契りおきて朝立つ霧の跡の露けさ

底清く心の水を澄まさずばいか悟りの蓮をも見む

(一九五八) 此日已過命即衰滅 寂然法師

(一九五一) 勸持品 正三位經家

さらずとて幾代もあらじいざやさは法に替へつる命と思はむ

(一九五九) 悲鳴いつ咽痛戀本群 素覺法師

(一九五二) 法師品加刀杖瓦石念佛故應忍の心を 寂蓮法師

草深き狩場の小野を立ち出でて友まどはせる鹿ぞ鳴くなる

深き夜の窓つつ雨に音せぬは憂き世を軒のしのぶなりけり

(一九六〇) 棄恩入無爲 寂然法師

(一九五三) 五百弟子品内秘菩薩行の心を 前大僧正慈圓

背かすばいづれの世にかめぐりあひて思ひけりとも人に知られむ

いにしへの鹿鳴く野への庵にも心の月は曇らざりけり

(一九六一) 合會有別離 源季廣

逢ひ見ても峰に別るゝ白雲のかゝるこの世のいとほしきかな

(一九六二) 聞名欲往生 寂然法師

音に聞く君がりいつかいきの松待つらむものを心つくしに

(一九六三) 心懷戀慕渴仰於佛 寂然法師

別れにしその面影の戀しきに夢にも見えよ山の端の月

(一九六四) 十戒の歌よみ侍りけるに不殺生戒 寂然法師

わだつ海の深きに沈むいさりせで保つかひある法を求めよ

(一九六五) 不偷盜戒 寂然法師

浮草のひと葉なりとも磯隠れ思ひなかけそ沖つ白波

(一九六六) 不邪淫戒 寂然法師

さらぬだに重きが上に小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ

(一九六七) 不こ酒戒 寂然法師

花のもと露の情はほどもあらし酔ひなすすめそ春の山風

(一九六八) 入道前關白家に十如是歌よませ侍りけるに如是報 二條院讃岐

憂きもなほ昔のゆゑと思はずばいかにこの世を恨み果てまし

(一九六九) 待賢門院中納言、人々に勧めて二十八品の歌よませ侍りけるに、序品

廣度諸衆生、其教無有量の心を 皇太后宮大夫俊成

わたすべき數も限らぬ橋柱いかに立てける誓ひなるらむ

(一九七〇) 美福門院に、極樂六時讚の繪に書かるべき歌奉るべきよし侍りけるに、

よみ侍りける。時に、大衆法を聞きて、彌歡喜瞻仰せむ 皇太后宮大夫俊成

今ぞこれ入り日を見ても思ひ來し彌陀のみ國の夕暮の空

(一九七一) 暁到りて、波の聲、金の岸に寄するほど 皇太后宮大夫俊成

いにしへの尾の上の鐘に似たるかな岸打つ波の暁の聲

(一九七二) 百首歌の中に、毎日晨朝入諸定の心を 式子内親王

靜かなる暁ことに見わたせばまだ深き夜の夢ぞ悲しき

(一九七三) 發心和歌集の歌。普門品、種々諸惡趣 選子内親王

逢ふことをいづくにてとか契るべき憂き身のゆかむ方を知らねば

(一九七四) 五百弟子品の心を 僧都源信

玉かけし衣の裏を返してぞおろかなりける心をば知る

(一九七五) 維摩經十喻の中に、此身如夢といへる心を 赤染衛門

夢や夢うつゝや夢と分かぬかななる世にか覺めむとすらむ

(二九七六)二月十五日の暮れ方に、伊勢大輔がもとに遣しける 相模

常よりも今日の煙のたよりにや西をはるかに思ひやるらむ

(二九七七)返し 伊勢大輔

今日はいとど涙にくれぬ西の山思ひ入り日の影をながめて

(二九七八)西行法師を呼び侍りけるに、まかるべきよしは申しながら、まづで来て、

月の明かりけるに、門の前を通ると聞きて、よみて遣しける 待賢門院堀河

西へゆくしるべと思ふ月影の空頼めこそかひなかりけれ

(二九七九)返し 西行法師

立ち入らで雲間を分けし月影は待たぬけしきや空に見えけむ

(二九八〇)人の身まかりにける後、結縁經供養しけるに、即往安樂世界の心をよめ

る 瞻西上人

むかし見し月の光をしるべにて今宵や君が西へゆくらむ

(二九八一)観心をよみ侍りける 西行法師

やみ晴れて心の空に澄む月は西の山へや近くなるらむ

